ハリーポッターに怒りの転生

めだかクロニクル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハリーポッターに怒りの転生

【Ｎコード】
Ｎ４１９６Ｑ

【作者名】
めだかクロニクル

【あらすじ】
ハリーポッターの世界に転生します。
不思議と、作者と会話すると言う不思議な雰囲気ですが宜しくお願いします。

あらすじとキャラクター紹介（前書き）

初回の方の話についていけないという方がいたのであらすじを載せておきました。主人公のテンションについていけない方は番外編から読んでください。

あらすじとキャラクター紹介

あらすじ

ハリーポッターの世界にＨＯＬＩＣの力をもらい、転生させられた少年は、なぜだか7巻の時代に送られた。トリップじゃねえかと怒りながら、なんだかんだで主人公組みに遭遇。そして、ロンが死亡しているという原作無視の流れに、自分の力を使いロンの魂を入れなおすという荒業に出る。信用を得たのもつかの間に何を思ったか、ヴォルデモートの軍勢に居候する。戦い方を学びヴォルデモートが杖探しのたびに行くというので、またしても、何を思ったかホグワーツに強行編入する事に、そこでであった、原作ではいたのかいないのかも分からない新一年生と意気投合、そして新たに判明した、みぞの鏡の中の部屋に創設者達が残した古の守りを求め、ダンジョン攻略中。初回の方の話についていけないという方がいたのであらすじを載せておきました。主人公のテンションについていけない方は番外編から読んでください。

キャラクター一覧

主人公

名前不肖

通称

君、貴様、あなた、名無し（アレックス命名）。

年齢

１５歳。外見１０歳

キーワード

なぜか、好かれる体質。

アレックス・クープ

年齢１１歳
解説
危ないからホグワーツに来たくなかった子。両親から、ありとあらゆる防衛術と攻撃呪文を学ぶ。多数の魔法薬とおまもり所持。残念な人にはさんずけで家名で呼ぶ。ハリーＶＳヴォルデモートには不干渉をつらぬく。
キーワード
ショタコンホイホイ、巻き込まれキャラ、一言多い、食物崇拝。

以下、アレックスの電波による主観と偏見のキャラ解説。

ハリーポッター
すぐ、怒る短気さん。ハリー教の神。一瞬、ホレそうになった。

ロナルドウィーズリー
しょっぱなで死んだ残念な子。
なぜか、人と裸で風呂に入るのを嫌がる。小さいに違いない。

ハーマイオーニグレンジャー
巻き毛。

ルーナラブグット
時々、口調が変わり、武者になる、おっとり天然女子で毒舌。筋力がハンパない。北斗真拳を使える。

ジネブラウィーズリー

ハリー教の幹部。けっこう可愛いお姉さん。男好きのハリーさんを愛している不憫な女性。

ネビルロングボトム
ハリー教の幹部。
自傷行為が激しいドMで痛い子。勘違いやろう。
ハリーさん大好き。フィネガンさんと悪巧みを計画中。
ハリーさんといけない関係。

シェーマスフィネガン
爆破大好きやろう。危ない人。短気。ハリーさんと同室をの人、ハリーさんといけない関係。ハリーさんに恋焦がれている。

その他、ＤＡ
ハリーさん大好き、あわよくば恋仲になろうとしている。

セブルススネイプ
ショタコン。
ハリーさんのピンチに現れて、ハリーさんの心をわしづかみにしようとしてる中二な人。

アルバスダンブルドア
土の中に住む住人。呼吸も食事もしなくていいという超人。

ミネルバマクゴナガル

結構やさしい、ババア。ほれるかと思った。

ポモーナスプラウト
身体に植物を寄生させている、霊力で操る魔界の住人。
実は、ナイスバディ

リーマスルーピン
犬耳を生やす人。腐女子界の神。

ヴォルデモート
蛇の人。暇すぎて世界をのっとた人。目が怖い。
名無しさんのストーカー。

ベラトリックスレストレンジ
戦いになると豹変するらしい。ｈｈが基本用語らしい。

ドビー
愛すべき隣人。彼の手から作られるものは特級中師やミスター味っ子もしのぐ。

クリーチャー
つんでれ、彼の包丁さばきは光速を超える。

箱の中の勇者。
影の主人公。世界の裏で暗躍し世の平和を守ってる。
ヴォルデモートも一瞬でぬっ殺せる最強の人。武器は聖剣エクスか

リバー、この世の全ての情報があるという2のつく箱の中の勇者達が集う場所。
彼いわくなんでもいけるらしい。
僕に礼儀と世渡り術を教えてくれた人。

世界に転生の前（前書き）

ハリーポッターの世界で頑張る、童顔少年の物語。

世界に転生の前

「君、死んだから」
「ご飯がすすむ君で食べようかな。さらさら鮭茶ずけでたべようかな」
「聞いてる？」
「聞いてない。やっぱり、鰹節ふりかけ～の、めんつゆかけ～の、チャーシュー焼き～のでいただきます。君も食べる？用意したけど」
「あっ、おいしそう。食べます」
「うまっっっ何だこれ、神の私も食べた事ない、神の味」
「でしょ？この味が忘れられないから死ねないんだよ」
「・・・ごめん」
「何？」
「・・・ごめん・・・死んだ」
「僕さ、ちょっと前まで引きこもりだったんだよ。前にさ、イジメ問題解決しようとしたら、先生が生徒集めて、俺を悪者にしようと計画したみたいでさ、大人信用できなくなったんだよ。だけど、ハリーポッター読んででたら生きるってすばらしいって思ってさ、友情感じたくなっていま　今ハッピーな学生生活送ってるんだ」
「・・・まじでごめん・・・君死んだんだ・・・」
「・・・生きてて良かった～日本食、食えなくなるとか死んだわ～って感じだわ。イギリス行って、あんな冷凍食品万歳の食事食うかと思ったら死んだほうがましだわ」
「・・・ごめん」
「お前・・・ぶっ殺していい？？どうせ、お前は神で、間違って殺したとか言うんだろ？？それで最後にドッキリ～って言うんだろ？？ベタだね～」
「・・・ドッキリじゃない」
「・・・雰囲気的に、黒すぎる空間に、僕と君が白くなってるから

不自然だし、思ったものが出てくるから不自然に思ってたけど・・・
僕・・・死んだの？」
「ごめん・・・雷ドッカンするの間違えた・・・」
「感電死したの？」
「・・・焼け死んだ」
「？」
「雷ドッカンで死ななきゃいけない運命の人がいて、ドッカンしよ
うとしたら、直前に、お前は、そこにいてはいけないとか言って、
君が飛び込んできて・・・」
「死んだの？」
「うん・・・君は、先先代の神の生まれ変わりだから、何が起きる
か分かったんだろうね・・・」
「僕の前世が神？神も輪廻転生に含まれるの！？」
「君は、神の仕事飽きたとか言って、アデューって言いながら転生
した。そんな神見た事ねえよ、後処理丸投げしやがって、前の神は
過労で壊れて、誰もやりたくないからって、俺に無理やりやらせや
がって」
「怒ってる？」
「当たり前」
「何かごめんね。大変だったんだね。よく頑張ったね」
「そんな言葉かけないでーーー泣いちゃう！！！そんな綺麗な目で
見つめないでー」
「良いんだよ泣いて。ここには、僕しかいないから。誰も見てない」
ひとしきり泣いた後、話が戻った。
「それで、僕は元神様なんだね」
「うん、じゃなきゃ、この空間で、好き勝手に物を造れない」
「ふ～ん、じゃあ、君は神殺しなのね」
「！！・・・マジでごめん。許して。何でもするから」
「蘇らせて」
「あの黒焦げに？？痛いだけで、すぐ死ぬと思うけど・・・」

「他の身体になったらどうするの？」
「その人を別の世界に転移させて、君をその身体に入れるけど」
「え？？別世界？？」
「元神様でも忘れてるよね。この世界の創作物は他の世界の思念から出来てる物だから。っていうか、その法則創ったの君だけどね」
「まじ？？じゃあ、僕が大好きな、ナルトや、×××ＨＯＬＩＣとかハリーポッターは現実にどっかで存在してるの？」
「当たり前じゃん。じゃなきゃ、あんな凡人に想像できないでしょ」
「作者馬鹿にしたら、殺すぞ」
「ごめんなさい。ってかキャラ違う」
「そう？」
「黒いよこの人。絶対さっきの、自分が優位に立つ為の演技だ」
「うん？」
「何でもないです」
「じゃあ、僕を転生させろ。それで許す」
「？？まじ～ぶったまげ～許してもらえるの！！何でもしちゃうよ」
「とりあぜず、ハリーポッターの世界に転生させろ」
「許してもらえるなら何でも良いよ。転生するだけ？？」
「どういう意味？？」
「他の間違えて殺した人は、能力とか要求してくけど」
「お前何人殺してるの・・・」
「２９９人！！君で３００人目達成！！」
「神に復活したら殺すから」
「何でもしますから許してください。特典いくつでもつけますから」
「しょうがないか。今は君が神だもんな」
「僕が新世界の神だ」
「だまれ！！」
「はい・・・」
「能力特典は、とりあえず、魔力キャパシティ無限、ハリーポッター世界の魔法を全て使える、×××ＨＯＲＩＣの魔法全部できる、

肉体年齢、性別を自由自在に変えれる、新術、魔法の開発が可能な知識、後は自分の境遇を自由に相手に変えられる能力」
「わかりました～最後のはどういう意味ですか？」
「ハリーの兄弟って言ったら、ハリーの兄弟設定、シリウスの従兄弟って言ったらシリウスの従兄弟設定って事だ」
「は～い、そうしときます。後はないですか？」
「う～ん転生した後の特典追加が欲しいな」
「うっ・・・そんな発想してきた人はいませんでした。あほなチート能力のみしか要求してこない人ばっかだったのに」
「ちなみに、どんな能力要求してくる人が多いの？」
「多いのは、ギアスの能力全部とか、肉体最強とか、七美の能力とかドラクエの魔法とか、ナルトの術とか、後は魔眼とかですかね」
「・・・知らない」
「え？」
「今言われた能力、ほとんど知らない」
「珍しいですね、オタクじゃない人が死ぬなんて。×××ＨＯＲＩＣとか知ってるから詳しい人かと思ったんですが」
「違う！！！僕は、オタクだ！！！ただ、ちょっと、好きなアニメが偏ってるだけなんだ！！知ってるよＶガンダムとか、カテコウとかいう単語知ってるんだからね」
「そこでキレるんですか、全般的に網羅してないと」
「だって、家の中にいるより、外で蛙さんと喋る方が楽しいんだもん。ドラクエとか難しすぎてできないし」
「痛いですね」
「泣くから。元神様なかしったって先生にチクッてやる」
「え？？泣かないで下さい。そんな目しないで、許してください。何でもいう事聞きますから」
「じゃあさっきの、お願い聞いて」
「また演技か。う～ん特典追加。そんな発想した人いないからな」
「元、神だからね、もしもの事を考えて準備しとくさ。だめか？？」

「そんな、可愛い顔で怖い顔しないで欲しいよ」
「可愛い??死ぬか?」
「ひっ!!追加特典の様な物でしたら、あの方に頼めば動ですか?」
「どのかた?」
「今書いてる方」

世界に転生の前（後書き）

ご指摘の点を修正しておきました。

作者協力するの？

ひっ！！追加特典の様な物でしたら、あの方に頼めば動ですか？」
「どのかた？」
「今書いてる方」

「止まらないで下さいよ」

「だから止まらないで下さい。書き込んで会話してください」

「俺？」
「そう、作者さんです」
「どういうこと？」
「さっきも言いましたが、創作物は別世界の情報が流入してるだけなんですよ」
「え？じゃあ今書いてる事も、現実に？」
「なってますよ」
「マジか。俺がここで止めたら？」
「リンクしてるので、進まないですね」
「俺はどうすればいいの？」
「話を完結させてください」
「完」

「今地震あったんだけど」
「私が起こしました、次ふざけたら、雷ドッカンしますよ」

「わかりました。それで、転生者君に何をすれば？」
「普通にかいてて下さい。助けがほしいときは喋らせますから」
「わかりました。」

むかつく突然の展開

「話は付きました。困った事があれば、作者さんに頼んでください。」
「あ～うん。わかった。」
「姿はそのままで良いですか？指定していく人いますけど」
「どんな？」
「男の子の場合は、何か美男子にしていきますね。女の子の場合は、髪の色変えたり、何か長い人が多いですね」
「美男子は嫌いだな。自分の顔気に入ってるしな」
「そうですね、美男子って感じじゃなく、やんちゃなショタっ子って感じですもんね」
「何て言った？」
「何でもないです。怖いからとっととハリーポッター世界に行ってください。作者早くしてください。お願いします」
「はいはい」
洗濯機の中に入れられたような変な感じがして、吹き飛ばされた。
黒から白の世界に良き、あれは？鋼の錬？？通り過ぎて、カラーの世界に降り立った。
「ここが、ハリーポッターの世界ね。けっこう普通だな。僕の不可思議さと比べたら、時限の魔女以外は何でも普通か」
歩きながら、ここは、魔法使いの、町だとは分かったが、ホグズミードではないようだ。原作に出てないから、どこか分からない。
「一般人もいるから、普通の町か？」
しばらく歩くと、石の壁に、ゴドッリクの谷と書いてある。
「え？こんな所なの？もっと田舎かと思った」
「お前、唯の壁に何話しかけてんの？」
「この壁の字」
「は？」

見えてないのか、魔法の字か？
風が吹いて新聞が飛んできた。情報が知りたいと、拾った。
「何してんの？」
これも、魔法で見えないのか。
「変な奴」
そう言って、子どもは消えた。
新聞を読み始めると、驚愕の表紙が目に飛び込んだ。
ダンブルドア殺される　追悼式は
「死んでんじゃねえか！！！最終巻の時代に飛ばすとか何考えてんの！！！普通、石だろ石のあたりに飛ばすだろ！これじゃ、隠れてるハリーに会えねえし、可愛くてハグしたくならねえ大人ハリーにしか会えねえだろ」
沸点が湧き上がった。
「あの！！！ボケ！！！！！！」
怒りに震えた管状が伝わったのか
「ひっ」
と言う声が聞こえた気がした。

「とりあえず、今いつだ？状況が把握できない。ってか転生じゃなくてトリップしてるし」
てくてく
「やめろ、てくてくって足音になってる。恥ずかしいから、文才は求めないから、少し小説っぽくして」
「努力します」
情報を収集しようと道を歩き始めた。
しばらく歩くと、閑静な住宅街に似つかわしくない光景が目に入った。
「これが、ハリーの家か」

そこには、瓦礫の山と化した木々があった。
そこが、家だと分かったのは、立て札にポッター家であると記されていたからである。
「どうするかな。季節は昼間に子どもがいたし、夏休みくらいの時期かな。ってことは、まだ、追悼式はやってないだろ。ハリーの家に行けば、まだ、脱出の最中かな。姿現し試すか。イメージが大事なんだよな」
目を閉じ、意識を集中させた。
プリモールド、ハリーの家。イメージを描き、飛んだ。
「ふ～ん。イメージどうりの場所だな」
家をのドアをノックしたが、返事がない。
「いないのか。う～ん。あれを使うか」
左手を前に出し、魔法人を創る。
「我、探す彼の者。我を導き、彼の元へ姿を現せ」
魔方陣が光り、白く光る燕が現れ現れた。
その燕に触れると、一瞬暗くなり、そして明るくなった。
ふわっとする嫌な感覚、そして、身体を加工させようとする力、足元がない。
あまりの事に、見苦しくも叫ぼうとする声も出ない。
口をグッと噛み。恐怖が頭を支配した。しばらく落ちると、アドレナリンで頭がはっきりする。時間が、とても短く感じた。

救う代償

浮く、その方法だ。目を閉じ、イメージを作り、目を開いた。
「浮いてる。大丈夫、力は使える」
周りを見渡すと、大分落ちたのだろう、上のほうで光線が飛び交っている。
「ハリーが襲われている時か、急がなくちゃ」
風を切る音が激しさを増す、はやくもっと早く、そう思う事で、スピードが上がった。
「まだ、遅い。我、求む、我より早き、機械、現れよ」
シュっという音がして足元に感覚が合った。
「メーヴェ？マジか憧れのメーヴェじゃん。こいつ僕より早いのか。さすが、未来世界」
アクセルを一気に踏み込み、加速した。
人間が一瞬で過ぎ去っていく。
「危ない！！」
見覚えのある顔が、見知らぬ顔から呪を受けようとしていた。杖などない。指を杖代わりに、守りの魔法を使った。
「プロテゴネスト」
緑色の光線が、跳ね返り、打った相手に直撃した。
「殺した？僕が？」
次に飛び込んできた光景は、ロンが呪を受けようとしている光景。
「くそっ」
そう言いながら、呪をかけようとしている奴を殴りつける。
「早くハリーの元に行かなくちゃ。あれはスネイプ」
見るとスネイプが、目の前にいる死食い人を退け、呪文を放とうとしていた。
「あれは、双子のどっちか。怪我させるか！！！」
後一歩のところで呪文が放たれた。続けざま、スネイプの横を通り

過ぎ、双子の片割れをキャッチした。
「後は任せる」
そう言って、ルーピンに押し付けた。
ルーピンは、困惑した顔だったので続いて付け足す。
「ダンブルドアよ。永遠なり」
そう言って、横を通り過ぎた。
「ハリーどこだ。あの光は」
廻りの光線とは明らかに違う、光があった。
「あそこか」
近づくと、ヴォルデモートの杖が破壊されている所だった。
「ヘドヴィグは死んだか！！！クソッ、主を守りし、誇り高き勇敢な鳥よ。我の元へ。彷徨える魂、今だ、誇りを忘れぬ暖かき身体へ還りたまえ」
ヘドヴィグが生きた姿で現れた。
「ッグ、何だ」
身体から突然何かが抜ける脱力感と頭に違和感があった。
そんな事よりもヴォルデモートは杖を砕かれても、尚、ハリーを追おうとした。
「ヴォルデモート！！！くらえ！！！」
牽制に五指から放たれる、呪文をいとも容易く避けると、僕を睨んで来た。
「何者だ。その様な呪文の出し方をするとは」
「お前に関係ない。我、守りたきもの有り、邪念を擁きし者を退けよ」
「何だ、これは！！！」
そう言いながら、見えない壁に押されるように、退けられた。
「怖いな、さすが闇の帝王だ。ハリーを追うか」
ハリーの乗ったバイクを見つけ、後を追った。途中、後ろから追ってくる死食い人を退けた。

突然ハリーが消えた。隠れ穴に着いたのだろうと思い、魔法で張ってある結界を、壊さないように、クロウの魔術で通り抜けた。
「誰！！！」
そういって、杖を向けてくる、２人の魔法使いはモリーとハグリッドだった。
「ママ！！！子どもだよ」
僕は、もう、１５歳なんだけどな。童顔の日本人だからしょうがないか。
「手を上げます。何ならはだかになりましょうか？僕は、ハリーを守りに来ました。ダンブルドアよ永遠なり。ヴォルデモートは、糞食らえ」
「なっ！？」
驚かれるのも、無理はないと思った。知らない奴が、守りの魔法を抜けて突然現れて、それも、子ども、驚くだろうと思った。
その時、突然、人が飛び込んできた。
血だらけの人を支えて、歩いてきた。
「ジョージがやられた」
僕は、走り出した。
途中、全員から杖を向けられた。
「治療が先だ！！！信用できないなら、杖を向けていろ！」
若い世代は杖を降ろしたが、やはり修羅場を経験している大人世代は杖を降ろさなかった。
「出欠が思っていたより酷い、急がなければ。歌うように言うだったか？」
オペラのように歌った。
「血が止まらない。クソ！！！我の前に横たわりし傷つき身体、元の姿を取り戻せ」
直った。そう思った瞬間、強烈な脱力感が遅い立っていられなくなった。
地面の泥の上に、這い蹲り、身体に力が入らない。

「僕！！！」
「誰が僕だよ、そう思った。復活したら、痛い目に合わしてやるからな」
そう、呟いて、意識がなくなった。

予定外　ロン？

誰かが叫ぶ声で意識を取り戻した。
顔をクシャクシャにして、誰もが叫んでいた。
リーマス顔を青ざめている傍らに、トンクスが寄り添っている。
次に目に飛び込んできたのは、ロンが横たわる姿だった。
ロンの名前を叫ぶ声が、空しく響く。
「死なないでロン！！！目を開けて、ロン！！ロン！！！」
しばらく呆然としていたが、死という言葉を切っ掛けに身体が動いた。
「いつだ！！いつ死んだ？」
「なっ！？」
受け入れられないのだろうか、怒りの表情を向けてくる。
時間が惜しかったので、端にいるトンクスに向かった。
「たしかロンと一緒にいたのはトンクスだったよね。ロンが死んでからどのくらい時間が経ってる？」
必死の形相にたじろいだ、トンクスが返答を返す。
「２０分くらい」
「良かった！！まだ間に合う」
ロンの身体の側に泣き崩れている人達に言った。
「どいてください。今からロンの魂を呼び戻します」
「子どもが出る幕じゃない！！！」
アーサーに怒鳴られ、驚いたが、時間がなかったので、術を行使した。
「友を守りし、志高き魂、今元の身体へ」
術の発動と同時に円陣が現れた。
その円陣を、見て驚きの顔をする人々。
次になった表情は、驚愕と喜びの表情だった。
「ロン！！！」

ロンが起き上がったのだ。
ロンに駆け寄っていく人々の傍らで、身体がぐらりと揺れた。
突然、口の中にこみ上げる物があり、鉄の味が広がる。そのまま、吐血した。
いち早くきずいた、リーマスとトンクスが駆け寄ってきて倒れそうな身体をささえた。
「すみませんが、回復呪文かけてもらえますか?あとできれば、爪を切って僕の口の中に入れてくれませんか?体の回復を早めたいので」
「トンクス呪文を頼む」
そう言ってリーマスは手の爪に、清めの呪文を放ち、引っこ抜いた。
予想外の行動に驚いたが、説明するのもめんどくさいので、血まみれの爪を口の中に入れる。
爪を引っこ抜くなら、清めの呪文は後からで良いんじゃないのかと疑問がわいた。
魔法陣を出し、爪の細胞をバラバラにし、体の各部に送っていき、傷を埋めていく。
しばらく繰り返すうちに、体の傷は癒えた。
「回復呪文って、痒いんですね」
「もう大丈夫なの?」
「何とか」
短い間で傷を癒した事に驚愕に表情を見せ言った。
「私の呪文必要だった?」
「同時進行じゃなきゃ、こんなに早く直りませんよ」
「他に何かすることある?」
「お腹が減りました」
「ふふ。これ食べて、もうちょっと待ってくれる。ロンが生き返ってみんな喜んで、私たちの事に気付いてないみたいだから」
そう言って、手に収まらないほどの大きなクッキーを渡してきた。
クッキーを見ると、満面の笑みをして食べ始めた。

「おいしい」
そういって、リーマスを見ると、手から血が出ていた。
「ごめんなさい。忘れてました。すぐに直します。手を出してください」
出された手の指を口の中にいれ、先ほどリーマスから貰った爪の細胞を増殖させ、爪を復元させた。
「はい。終わったよ」
「もう？」
そう言って、リーマスは手を見たが、爪は綺麗に揃っていた。
「しまった」
「どうした？」
「リーマスさん、ごめんなさい。クッキー食べてる時にやっちゃったから砂糖の成分入っちゃたかも」
そう言うと、リーマスは、自分の指を舐め、笑った。
「すぐに直します」
「それはだめだ。便利な指だから放っておいてくれ。紅茶を飲む時に指で混ぜるだけなんて何て便利なんだ」
リーマスが子どものようにはしゃぐ活き活きした顔をしながら言った。
「気に入ってるなら何もしないよ。リーマスさんってこういう性格なの？」
トンクスに聞いた。
「キュートでしょ？」
「仲良く慣れそう」
「そろそろ、私もお腹がすいたわね」
「リーマスもお腹減ったでしょ？」
指を舐めだしそうなほどウットリと眺めるリーマスに聞いた。
「え？あっうん。そうだな」
「ロン生還おめでとう。みんな、ロンが生き返ってよかったわね。ところで私たち、朝から何も食べてなくて餓死しそうなんだけど」

はっとした顔をみんながして、お腹に手を当てた。
どうやら、みんなもお腹が空いていたらしい。
「安心したら、お腹空いちゃったね」
「誰のせいだと思ってるの？さっきまで一生何も食べたくないって思うほどだったのよ。ねえハリー？」
ハーマイオー二ーが言った。
「お腹空いてるかどうかなんて忘れてたね。でも確かにロンの言うとおり、お腹減った」
「そうねご飯にしましょうね。今日はお祝いよ」
モリーはそう言って、杖を振るった。

もちろん偽名

「うわー。おいしそう」
「ほら、みんな席について」
全員が席に着き、食べ始めた。
「これは、何て食べ物？」
隣に座っている、トンクスに聞く。
「キッシュよ」
「これは何の肉？」
「ほろほろ鳥よ」
「おいしいね。こんなにおいしい料理食べた事ない。あっロン、その、パンとって」
「うん」
パンを取って渡すロンが怪訝な顔をした。
「君は誰？」
その、言葉に全員の動きが止まった。
バタバタしていて忘れていたのだ。
視線が注目する。

「誰って言われても、名前は遠藤小林。もちろん偽名」
視線が痛みにうめき声が漏れそうだった。
「本名は簡単に教えられない。そういう、術を使うから」
「では、君は何故ここにいる？」
「リーマスさん怖いです。ダンブルドアの命でハリーを守りに来ました」
完璧なる嘘を真顔でつく、しかし、こうでも言わなければ、信じてもらえない。
「君の様な、子どもが？」

「子ども子どもって多少幼く見えるか見知れませんが、いくつだと思ってるんですか？」
「５歳くらい？」
真顔で言われて、ショックを受ける。
「それはさすがに酷いんじゃ」
「だってねー？」
みんなが頷いている。
とてつもない違和感、、よく考えると、身長差がおかしい。
「鏡下さい」
トンクスが鏡を貸してくれた。
「なんじゃこりゃー。誰これ？僕なの？何でこんなに小さくなってるの？アポトキシン？転生ってこういうこと？違うよね」
「どうしたのちょっと落ち着いて、お水飲んで」
貰った水を一気に飲み干し、落ち着ける。
「薬で姿を変えてるの？君は本当はいくつなの」
「実年齢は１５歳。薬で姿を変えてるわけじゃない」
「やっぱ子どもなのね」
「でも良く考えたら、年齢を元に戻せばよかったんだよね」
「え？老け薬を使うの？」
「ううん、ゆびぱっちん」
カスッという、指ぱっちん失敗の音と共に年齢を実年齢まであげた。
「どう？戻った？」
「戻ってないわ、せいぜい１０歳くらいよ」
びっくりして鏡を見ると、ちゃんと元に戻っていた。
「戻ってます」
「え？」
「これで一様１５歳です」
「そうなの？」
「あなた、アジアよね？」
「ジャパンです」

「ジャパン？」
「私知ってるは、東洋の島国で、箸とかいうもので全てを切り裂き、全てを突き刺し、腐った豆を食べるのが日本人よね」
驚愕と言うより、マイナスの驚愕という顔をしていた。
「う～ん。その通りだけどね」
箸を取り出し説明した。
「杖か！？」
全員が身構える。
「全てを切り裂き、全てを突き刺す。そして全てを食らう」
そういいながら、ほろほろ鳥を箸で食べた。
「ナイフとフォークの代わりなんだよ」
「すばらしい！！他にはどんな文化があるんだね？」
「アーサーちょっと待って、後でいくらでも聞いて良いから。重要な事を聞いてないわ。あなたが味方だと証明できる事ってないかしら？」
その時、突然、扉が開きアラスター・ムーディが入ってきた。
リーマスが動き、二人が杖を向け合う。
「合言葉は？」
「山」
「川」
「二人とも馬鹿なの？」
「そいつは誰だ」
「今の姿じゃ分からないか。さっき盾の呪文をあなたに使った人ですよ」
「そんなことわかっとる。お前、死食い人を攻撃してたが、何の目的だ。攻撃したからと言って信用はせんぞ。お前は怪しすぎる。見た事もない術を使ったり、お前の体からは闇の魔術の気配がする」
「黒魔術使うからね」
「闇の魔法使いか！？」
杖が向けられる。

「黒だろうと、あなた達の側に変わりはありません。ヴォルデモートは僕の敵です」
「信用できんな。スネイプの件もある」
その言葉に、周りが渋い顔をする。
「この子は信用できると思うよ」
そう言ったのはリーマスだった。
「この子は、ジョージの傷を治したりロンを助けたり不思議な魔法を使うが、救ってもらったのは事実だ。それに、どうも、術を使う反動で自分の体が傷つくようだ。自己犠牲なんて、闇の魔法使いだったらありえないと思うがね」
「確かに、わしも小僧に助けられた。死食い人の打った死の呪文を跳ね返してな、それに、こいつは、ヴォルデモートと対峙して退けおったぞ」
全員が驚愕の顔をする。
「本当なの？」
「闇の力が苦手な魔法を使いましたから。マジで死ぬかと思いましたよ」
「死の呪文を跳ね返したって、どうやったの？」
「死の呪文って強力だから防げないんですよね？だったら、同じくらい強力なのをって思って、盾の呪文と死の呪文を混ぜたんです」
「死の呪文に死の呪文をぶつけて威力を軽減させて、盾の呪文で跳ね返したということか」
「ぶったまげー、そんな事できるんだ」
ロンが素っ頓狂な声を上げた。
「あれは、どうやった？ロンを生き返らせたのは？」
「僕が生き返った？僕死んでたの？」
「今さらなの？もういい、無視して続けて」
ハーマイオーニーがあきれた声を上げた。
「どうって言われても、死んだばっかだったら、体が壊れていないだろうし魂も離れきっていないだろうから、入れなおしたんだよ。

あれは、ちょっと特殊な術だから。家伝の術みたいな物かな？」
「ジャパンの術なの？」
「微妙かな、日本人の術者がいたり、中国人の術者がいたり、存在がありえない術者がいたり、こっちとは違って、基礎は一緒だけど、独自の術を使う人の魔法を混ぜて、自分流に創り直したって感じだよ」
「独自の術？すごいわね。それも強力なのばっかり、あの呪文みたいなのは日本語よね？コンニチハ」
「さすがハーマイオーニー、こんにちは。あれは日本語だよ。言霊を使うだけだから、こっちの術と基本は同じだけど、強力な術を使うのにはちゃんと術を言わなきゃいけないから時間がかかるのが難点だけどね」
「言霊？」
「詳しく説明すると宗教観とか真理の説明になるから、簡単に説明するけど言葉には力がある。魔術を行使するのに魔力を言葉で導くという事。例えばルーモスの語源は光の力って意味でしょ」
「そういう事ね。でも、その歳でどうやって、そこまでの術を？」
「それは、秘密」

「術を使うのにリスクがあるね？制御できないということなのかな？」

リーマスが聞いてきた。

「うーん。あれは、対価不足ってやつだと思う。」

「対価？」

「何かをかなえるには、同等の何かを支払わなきゃいけない。だから術を使うのには魔力を払えばよいけど、誰か何かしてあげる時に同価値の者を貰わなきゃ、代償が自分にかえって来るんだよ」

「それで、ヴォルデモートを退けたりは出来るが、人の傷を治すと傷つくわけか」

「ヴォルデモートは、襲ってきたから退けただけだからね。あれもハリーを守るためで、充分ルール違反だから、普通の術者だったら傷つくけどね。僕の魔力は多いから、多い魔力を代償に払ってる。さすがに人の生死に関わる様な傷の時はちょっとだけ体に傷が付くみたいだけど」

「ちょっと？吐血したじゃない」

「人を生き返らせる代価が吐血だったら、軽いもんでしょ？」

「代価が成立すれば、良いって事ね？」

「うん、だから、さっき、僕が吐血した後、リーマスさんが指を怪我したのを、クッキーを代償に治したのは成立したんだよね」

「じゃあ、僕も何か払うよ」

ロンが言った。

「ウィーズリー家の誇りにかけて払わさせてくれ」

アーサーが言った。

「無理だと思う。人の命の代価ってわかってます？」

「命か」

「本気で見合うものだったら、同じ命ですね」

「だったら、私の命を」
モリーが言った。
「いらないですって、もう自分の体で代償払っちゃいましたから」
「じゃあ何かさせて」
ジニーが言った。
「そうだぜ。俺達が双子でいられるのは、閣下のおかげなんだから」
「えー、うーん。じゃあ友達になって」
キョトンと言う顔をしている。
「そんな事でいいの？」
「閣下の仰せのままに」
笑いの輪に包まれた

ムーディーの苦手な者

黙って聞いていた、ムーディーが聞いてきた。
「それで一番重要な事を聞くが、どうやってハリーが移動する日を知っていた？まさか散歩してたら突然出くわしたとはいわせんぞ」
「う～ん、何て言えばいいんだろう。予言かな？」
「予言？」
「ハリーがこの日危ないっていうのを占いで出たから、ハリーのところに、移動したの、姿表しみたいなものかな」
「占いが出来るのか？お前の占いは絶対なのか？」
「大体はかな、ロンが死ぬなんて出てなかったから」
「誰が死ぬかまでわかるのか？」
「うん。占いどうりだったら、今日ムーディーさん死んでたよ。間に合ってよかった」
全員が息を呑んだ。
「ふん、死ぬなら死ぬで良いんだ。余計な事をしおって」
「嫌だよ。ムーディーさんに死んでほしくない」
突然必死になって、ムーディに懇願するように、目に涙を浮かべて言った。
「わかった。わしが悪かった。泣きべそかくな」
「ふふ。闇祓い形無しね」
トンクスが笑った。
「まあ、結論は出たんじゃないかな？少なくとも味方である事に変わりはないと思うが」
リーマスが言った。
「まだだ、この先の予言もあるのか？」
「あるよ」
皆が目の色を変えた。
「教えろ」

「ごめんなさい。言えない」
「何故だ？」
「人の未来に関することだから、言うと結末が変わっちゃう。細かい事だったら、大丈夫だけど、現にありえないはずのロンの死があった。多分あれは、死ぬはずだった者を助けたからだと思う」
「わしの身代わりになったのか？」
「多分」
「わしに関しては二度と助けるな」
「嫌だ。お願い誰も死なせないから、僕頑張るから、そんな事言わないでよ」
同じ展開、同じ答えが返ってきた。
「でも、あれはいただけないな、人を助ける為に君が傷つくのは良くない」
リーマスが、優しい声で言った。
やさしい。やさしい人だ。絶対この人を死なせない。そう心に誓った。
「一つだけ予言を教えるね。ヴォルデモートは滅びるよ」
「それが聞ければ充分だ。小僧」
そういって、僕の頭を小突いてきた。
「すばらしい予言を聞いた。さて、ケーキにしようか」
「待ってましたー」
双子の兄弟が息の合った声を出した。
「まちなさい。まず、あの子にいう事があるわ」
怖い、怒られるのかな？息子を殺す原因作ったんだもんな。
「ありがとう。本当にありがとう。息子を助けていただきありがとう」
モリーが言った。
「ああ、本当にありがとう」
アーサも言った。
「サンキュー」

と双子がグーサイン
「ありがとう」
ジニーが言った。
「ほらロンも」
ハーマイオーニーがせかす
「ありがとう！！！」
ロンが恥ずかしがるように言い切った。

日本文化

ハリーやたらと大人しいな。何かあるのか？悩んでるんだよな。
日本文化について、永遠と聞いてくる、ハーマイオーニーとアーサーの相手をしながら、主人公とまったく絡んでないことに気が付いた。
「日本人は、魚しかたべないの？」
「肉も食べるよ。でもやっぱり、魚とか野菜とか食べる事のが多いかな」
「たんぱく質はどうしているのかしら？」
「豆とかかな、豆を加工して色々作るんだよ」
「それで、豆を腐らすのね」
「好嫌い激しい食べ物だけどね」
「日本人は風呂好きと言うから臭いの強い食べ物があるのは不思議だわ」
「ほう日本人は風呂好きなのかね。どのくらい入るのかね？」
「毎日ですね」
「毎日！？綺麗好きだ。潔癖なのかい？」
「島国だし、木の生えてる山が多いので、水には困らないんです。現実は違うんですけど」
「日本人は大きな公衆浴場があって富士山の絵を背中に牛乳を飲むそうよ」
「ほう、すばらしいね。何故牛乳を飲むんだね？」
「そこに牛乳があったから」
「かっこいいわ。何か分からないけどカッコいいわ」
「後は、露天風呂とかがあるよ」
「何だねそれは？」
「外の風呂だよ。日本は火山が多いから、いたるところに風呂があって、外の風景を見ながら風呂に入るんだよ。露天風呂は開放的で

気持ちいいんだよ」
「すばらしい。よし作ろう」
「え？アーサーさん？」
「どうすればいいんだね？」
「とりあえず土を掘って温泉を掘り当てなければ」
「よし掘ろう。魔法を使えばすぐさ」
「もう、じゃあ僕が作るよ」
「代価は大丈夫なのかね？」
「もちろんもらいます」
「何がいるかね？」
「しばらく、この家に泊めてください」
「そんな事は、こちらからお願いしたいくらいだ。唯、保護者の方は良いのかな？」
「大丈夫です。死にましたから。じゃあ、創って来ます」
外に飛び出していった。
「まずい事聞いてしまったな」
「そうですね、傷ついてないようだから安心ですね」
「そこが心配だね」
「どういうことですか？」
「あんなに幼い子が傷つかなくなるほどの事を経験してるという事じゃないか」
ハーマイオーニーは口を押さえた。
「ハリーでさえ、大変な人生を送ってきて、今だ、乗り越えられないのに、あの子どんな人生を送ってきたのかしら」

風呂と親馬鹿

窓の外をトンクスとリーマスが見ている。
「ねえリーマス、あの子、好きでしょ？」
トンクスがニヤニヤしながら言った。
「なっ何を、私にその趣味はないぞ。二つの意味でやばいじゃないか」
「そんな事聞いてないわよ。あなた、自分の子どもと重ねてるんでしょ？」
「うん、まあ、そうだな。親心を抱いてしまうな」
「私もそうなのよ。母性をくすぐられるのよね」
「あの子を見ていると、子どもが欲しいと思ってしまう」
「そうね。でも、まだ悩んでるんでしょ？あっ、あの子が転んだ」
ガシャーン
リーマスが窓を突き破って飛び出した。
抱いて帰ってくると、叫びだした。
「膝をすりむいた、トンクス何とかしてくれ」
「親ばかね、ってか何で、また小さくなってるの？」
魔法で傷を治しながら聞いた。
「服がきつかったので小さくなりました。やっぱり魔法で治療は痒いですね」
「大丈夫か！？大丈夫なのか！？」
「大丈夫ですよ。リーマスさん、心配してくれて嬉しいです」
ニコッと笑顔をのぞかせると、トンクスとリーマスが満面の笑みになった。
この時、これは使えると、腹黒い事を考えた。
「そうだ、日本式お風呂できたんで入りましょうよ」
「日本式？それは面白そうだ」
「もう出来たのかね？すばらしい」

「女性用も作ったので、トンクスさんもどうぞ」
「あら、嬉しいわね。さっそく皆に知らせなくちゃ」
皆ではいる事になり、外に皆出てきた。
「あの子は？何か準備するって言ってたわ」
「来たようだな」
「待たせてごめんなさい」
「何を準備してたんだい？」
「後のお楽しみ、早く入ろうよ。こっちが男湯、隣が女湯」
「じゃあ後でね、リーマス。あなたはどっちに入るの？」
「えっ？僕、男だけど」
「あなたの肉体年齢なら、どっちでも良いと思うけど」
「そうかなー？やっぱ男湯」
「ふふ、じゃあ気が向いたら、いらっしゃいね」
「もー早く入ってよー」
そう言って入り口を潜った。
「ここが脱衣所だよ。日本は、裸で風呂に入るから、水泳パンツとか準備しないでね」
そう言って、手を振ると、みんなの水泳パンツが消えた。
「え？裸なの？」
ロンが、聞いてきた。
「ホグワーツもそうでしょう？」
「そうだけど。外だし」
「男たる者、隠す事なかれ」
「そうだぜロン、隠す事なんか無いぜ」
「そうともさ。それとも、隠さなきゃいけないものがあるのかな？」
双子が言った。
「わかったよ」
ロンが諦めたようだ。
風呂に入るとアーサーが感嘆の声を上げた。
「日本の風呂はすばらしい。何たる爽快感」

「こういう時、日本では、絶景かな絶景かなって言うんだよ」
「ふむ、そうか絶景かな絶景かな」
「戦いの中癒されるね。そうだろ、アラスター？」
「中々だな。裸ならば、武器を持つやつもおらんしな」
「昔の日本人も、そういう考え方で、裸で風呂に入る事にしたみたいだよ。特に仲間と信頼しあう意味で、裸の友という言葉もあるくらいだよ」
「そうか。日本人は話が合いそうだな」
「もっと気に入る事があるよ」
「なんだ？」
カスッと言う失敗の指ぱっちんト共に、お盆に載った徳利と猪口、つまみが数点現れた。

僕の悩み

「日本の酒だよ。お風呂に入りながら飲む酒は格別なんだって」
「それは、日本人はすばらしい」
「うむ、日本人とは共になりたいものだ」
「君の気配りは、完璧だね。子どもにしたいくらいだ」
「俺達も、飲みたいぜ。だろうジョージ」
「そうともさ、フレッド」
「逆でしょ？」
僕の指摘に二人は驚いた。
「さすが閣下だ」
「本名を教えたら、分かるよ」
「そういうものか」
「本名を教えるっていうのは、こっちでは、魂の恥を掴まれた様なものだから」
「僕も飲みたい」
ロンが近づいてきた。
「ママには言うなよ」
「わかってるよ、パパ。ハリーもおいでよ」
「うん」
「じゃあ僕も」
「君はだめだろ！！！」
全員、同時に声を上げた。
「え～じゃあ大人になる」
そう言って、姿を２０歳にした。
「日本では、１０代で、酒を飲んで良いのか？」
「一様２０歳の姿だけど」
「どうみても、１３歳くらいにしかみえないよ」
「うん、つまみ消すよ。自信作なんだけど」

「ごめん、つい本音が」
「ってか、外国人が、おとなっぽすぎるんだよ！！！」
「日本人てみんなそうなの？」
「一部の人だけです」
「うわーん、トンクスー」
そう言いながら5歳の姿に戻り、女湯に消えた。
「それでね、トンクスみんな、そういうんだ」
「そうね。確かに、幼く見えるわね。だけど気にしないで、あなたの長所よ」
「そうよ。可愛い事は良い事だわ」
「そうよ。私がハリーに一目ぼれしたのも、可愛かったからだし」
「そうなの、ジニー？」
「うん、そうなの。あのころのハリーは可愛かったな。今ではかっこよくなったけど」
「ジニー女は押しよ！パパを落とした時もそうだった」
「だってハーマイオーニー」
恋話が始まったので、男湯の時と同じように、酒を出した。
こちらは、梅酒にした。
「うわーん、リーマスー」
そう言って、男湯に戻った。

ハリーの悩み

皆が寝静まった後、こっそり抜け出した。
「ハリー大丈夫？」
外に寂しそうに座るハリーの姿があった。
「うん、大丈夫」
「何を悩んでいるの？話して」
「君は、未来を知ってるんだよね？」
「似たようなもんかな」
「ダンブルドアの死も知ってたの？」
「知ってたよ」
「なんで助けないの？」
正確には助ける事が不可能だったが、怒りをぶつける相手が欲しいのかと思い、従った。
「必然だから」
「じゃあシリウスも」
「必然」
「何でそんな事」
「ヴォルデモートが滅びる為に必要な代償なの、でも、ハリーは、そんな事で悩んでるんじゃないよね？」
「え？」
「ロンの事？」
しばらく経った後、ハリーが口を開いた。
「僕、今日怖かったんだ。ロンが自分の代わりに、死んだと思った。だってそうでしょ？ロンは、僕に変身してたんだよ。僕を守るために死ぬなんて、こんな」
ハリーが泣き出した。
僕はハリーの前から、そっと抱きついた。
「怖いね。苦しいね。守られるほうは溜まんないよね。お父さんと

お母さんと重ねちゃったんだよね」
ハリーの鳴き声が一層強まる。
「良いよ、泣いて。僕が、姿を隠すから」
ハリーの腕に力が入り、抱きつく力が強くなる。
「優しい子、大丈夫。誰も死なせないから。でもね一つだけ覚えておいて、終わる時、こうなる事は必然だったて」
そう言って、頭に手をやり眠らせた。
「願わくば、彼等の未来に幸多からん事を」

追悼式

しばらく、楽しい生活があり、ハリーがあれ以来、事あるごとに僕のところに来る事になった。他にもみんなで、食事の時、僕の隣を争いだして、日替わりの日程を決めた。料理も、酒と一緒に出したつまみが美味しかった事から日本食を事あるごとに作らされた。ムーディがイカの塩辛を気に入って、常備しなくては、いけなくなったのはめんどくさかった。

一緒に寝ると言って聞かないリーマスと一緒に寝たり、ずるいと言い出した皆に結局、日替わりになったり、きっと、戦争が近い事を薄々感じているのだろう、少しでも心の安住の地が欲しいのだ。

僕は、基本的に、皆の癒しになれば良いので、年齢を、ちょこちょこ変えている。

リーマスの側では、5歳にしている。

そんな生活の中、ダンブルドアの追悼式に行った。

たしか、襲われるんだったなと思い、ここの周りに結界を張った。

案の定、結界が攻撃された。

「死食い人が襲ってきました。ディメンターもいます。皆さん避難をしてください」

直後にシャックボルトの守護霊がやってきて、魔法省が落ちた事を伝えた。

「皆急いで、もうじき、守りが破られます」

バン、バン、と姿現しをしていく音がする。

「クッもう、保てない」

直後、術を破られた事で体から血が流れる

それを、合図に一斉に死食い人が襲ってきた。

ハリーが駆け寄ってきた。

「行って！ハリーにはやらなきゃいけない事があるだろ」

「でも！！！」

「ハーマイオーニー頼む連れてって！！！」
「ック、わかったわ。ロン、ハリー行くわよ」
バシッという音と共に3人は消えた。
「リーマスたちも行って、僕の術に当たるよ」
「しかし！！！」
「あーもー、トンクスお願い！！！」
「わかったわ」
あらかた逃げた事を確認すると、両腕を突き出し、一気に十個の気絶呪文を打ち出しながら体を回転させる。
さながら、ストゥーピファイのスプリンクラーだ。
しかし、数が多すぎた。
法具の指輪を出現させ、指にはめた。
一発の気を分散させ、多くの敵を打つ。
ディメンターにも効果があるようだ。
突然、大きな声がした。
「見つけたぞ。幼き者よ」
「ヴォルデモート」
「貴様には聞きたい事が山ほどある」
「僕にはないけど？」
「私にはある」
「知らない。怖いからバイバイ」
そう言って逃げた。

「これから、どうしよう。誰がどこに行ったかわかんないしな。術を使えば分かるだろうけど、しばらくは、暇な時間だしな」
「そうだ京都に行こう。違うわ！！！ヴォルデモートの所に行こう。暇だし」
また、ヴォルデモートの所に戻った。
「ただいま」

「貴様！！！」
「僕は、君の子ども。だから、一緒に連れて行って」
「そうだったな。一緒に来い。我が子よ」
神様の特典使えるなと、思いながら着いて行った。

三河屋さんと食事と

「ちわーす、三河屋です」
「さぶちゃん、ガリーック!!!ピマーン!!!キュッカンヴァーをお願いします」
「わかりました。ベラット・リックスさん」
ブーンと言う音と共に、子どもが消えた。
「ベラトリックス何をしている?」
「はっ!!私はいったい何を!?」
「錯乱の呪文を使われたのだ。さすがだ」
「あの餓鬼!殺してやる」
「殺気立つのは良いが、貴様、我が子を殺すのか」
「我が子!?そうでした。滅相もございません我が君。闇の帝王の王子様に手を触れようなど恐れ多い」
「ただいま、買って来たよ~」
「さぶちゃ!・・・。王子様、よく帰っていらっしゃいました」
「え~もう解けちゃたの~パパが解いたんでしょ?」
「そう、怒るな我が子よ。ベラトリックスは闇の帝王の右腕だ。そう、いじめるな」
「右腕!!!我が君、身に余るお言葉です」
「ベラちゃん、しょうがないな~。右腕記念に、今日は僕がご飯作ってあげる~」
「王子様に作らせるなど滅相もございません。ワームテールにやらせれば良いのです」
「わ、私がやらせていただきます」
「ピーター、いつの間にいたの?良いよ、今日はぼくが作る。命令ね。逆らわないよね?」
「ひっ!わかりました王子」
「よーし、腕によりをかけて作るぞ~」

「楽しみ似ているぞ我が子よ。肉は入れろよ」
キッチンで、音程が非常にずれた歌が聞こえる中、死食い人の会議をするのに魔法力を総動員しなければいけなかった。死食い人達は、それでも音量が上がってくる声に、疲れ果てて、息も絶え絶えだった。死を覚悟する者までいた。
突然、歌が止んだと思うと、王子が現れた。
「何で皆、倒れてるの？」
「！！！王子様、ご機嫌麗しゅうございます」
「全員で揃えるってキモい、びっくりするじゃんか。」
「そう言うな。どうしたのだ。我が子よ」
「うん、パパ。ご飯できたから様子を見に来たの」
「どうせ、魔力の減少で会議などできない。食事を持ってきてやれ」
「え？パパは食べたくないの？」
「そんなことはない。食べたいに決まっている」
「パパはツンデレだな」
そう、言いながら、失敗する指ぱっちんの音と共に食事が現れた。
「これは何だ？我が子よ」
「これはね、日本料理ですき焼きっていうんだよ。肉も野菜も食べられるから、みんな健康になれるでしょ？」
「良い香りです王子」
「だまれ！ワームテール。王子をほめるのは私が先だ」
ベラトリックスが怒鳴る。
「ほう？食欲をそそる匂いですな王子？時にどの様な薬を使えば、これほど、甘美な匂いが出せるのですかな？」
「やだなースネちゃま、薬なんかじゃないよ。これは、僕の愛情だよ」
「話している場合ではないぞ、せっかくの我が子の料理が冷めるではないか。早速食事にするぞ」
「ちょっと待ったー。この料理を食べる時は生卵につけて食べるんだよ。」

「生卵ですか王子？」
「文化が違うから戸惑うかもしれないけど、一番美味しい食べ方だよ」
「我らは、死食い人だ。そんな事にこだわったりはせん。そうだな？」
「はい。我が君」
全員声をそろえて言った。
「では、食すか・・・」
「どう？口に合う？」
「我が子よ、何と美味たる味か」
「こんな美味しいもの食べた事がありません王子」
「抜け駆けするなワームテール。王子の食事は全て私がいただく！！！」
「叫ぶなベラトリックス。それにしても、薬も使わずこの味を出すとは恐れ入ります」
「みんな、何かキャラ違う」
小声でそう呟いた。

ピーター

食事を食べ終わった後、会議を再開したようで、何故か僕は、お風呂に入ってくるようにいに全員から促がされた。
ヴォルデモートガ根城にしている、マルフォイ家の別荘にも露天風呂を作ろうとしたが、反対されたので、しかたなく、室内の風呂を、魔法でそう見えるようにした。
「良い湯だなーこんな時は、日本酒に限る」
グビッと飲み干しながらイカの焼き物を食べる。カタッと物音がしたので後ろを振り返ると、ピーターがいた。
「あれ、ピーター、もう終わったの？」
「はい、終わりました。」
「ピーター、もっと気楽に話そうよ」
そういって、ピーターの猪口を出した。
「僕の母国の酒だよ。美味しいから飲んでみなよ」
恐る恐る飲むと、目をキュンと輝かせて言った。
「王子、美味しいです。このイカもとっても美味しいです」
「そう？よかった。ピーター、どうして、友達を裏切ったの？」
「ひっ、わ、私は、闇の帝王の為に」
「良いよ。そんな事言わなくても。君の名前からは、友を思う気持ちしか語られてこない。なのに、どうして？」
「わ、私は、言えない」
「怖い？じゃあ手を出して」
そう言って敗れぬ誓いを立てた。
「王子」
「これで、大丈夫だよ。ピーター話して」
「わ、私は予言を受けた」
「それで？」
「ジェームズを・・・友を殺し、友に罪を着せ・・・闇の手の中で

光を助けよと」
「そう、それで友を殺したの？」
「それだけではない。私は、闇が怖かった。自分が死ぬのが恐ろしく、ジェームズ達の彼光が私を影の世界に追いやったんだ。だけど、僕を救ってくれたジェームズだけは殺したくなかった」
そう言ってピーターは泣き始めた。湯面に映る姿は、幼き頃のピーターそのものだった。
「大丈夫。彼らはきっと許してくれる」
そういって、ピーターを抱きしめた。
泣く彼を魔法で眠らせ、ベット転送した。
彼を、心のそこから愛おしくおもった。
「彼の余生に幸多からん事を」
そう言って、猪口を口に当てた。

電話会談

「新事実発覚だね。ピーターにそんな予言が合ったとは思ってもみなかったな。原作にそんな伏線あったかな」
「なかったと思うけど」
「作者さんか！？びっくりした。突然介入するんだもん。」
「なんか原作にないこと多いね。これも、君が介入したからなのかな？」
「わかんないな。ところでさ、何か話しにくいよね」
「何が？」
「作者さんと話すのって、頭に話しかけられてるみたいで何か違和感ある」
「そう、言われてもな。しょうがないじゃん」
「あれできるかな？」
「何が？」
「我望むものあり、異なる次元を繋ぎ、言葉を繋げ」
「よし、これで良いな」
「あっちょっと待って電話」
「もしもし？」
「僕、僕、わかる？」
がちゃ
「ごめん。僕、僕、詐欺かかってきたわ。本当にあるんだね。感動した」
「いや、僕だから！電話してるの僕だから！もう一回かけるから、ちゃんと出て」
プルルルル
「もしもし？」
「切らないでね！めんどくさいから作者さん」
「え～有りですか？こんなの有りですか？」

「まぁ、魔法だし。メーヴェ出せたから大丈夫かなって思って」
「何か変な気分、キャラクターと喋るって」
「それよりさ、どうなってるの？原作に載ってない事があるって」
「知らないよ」
「あんたが書いてるんでしょ？」
「いやだって、頭の中で勝手にストーリー出てくるから。それに、神様も言ってたけど、君のやっている事は、現実に起きていて、それが、俺の頭の中に流れてきて、そこに俺が介入して」
「頭痛いからやめて」
「俺も言ってて気持ち悪くなってきた」
「何か俺らって似てる？」
「僕も思った。もしかして童顔？童顔設定に全然違和感感じてないし」
「君ほどじゃないけどね。3～5歳くらい若く見えるみたいだよ」
「本当に？けっこうな童顔だね。なんかさ大人に見られたいって気持ちと、かまってもらえるから良いなって気持ちに戸惑わない？」
「わかる。ムカつく時もあるけど、便利といえば便利だよね」
「知らない人も親切にしてくれるしね」
「そうそう、道に迷った時とか、後ヤンキーに絡まれない」
「ヤンキーって意外に優しいしね。怪しい大人とかは困るけど」
「ショタコンね。リアルなのはやめて欲しいよね。痴漢とかされてもどう反応して良いかわかんないしね」
「痴漢された事あるの！？何回？」
「5回。君はないの？」
「俺まだ15歳だからそんなに電車に乗らない。でも、繁華街歩いてて、裏道に迷い込んだ時とか変な人着いて来て、困ったな」
「大丈夫だったの？」
「写真取らして、って言われたからピースして、飴もらった」
「危ないよ。だめだよ。お父さん許しません」
「誰が？そんな歳じゃないでしょ？」

「へへ。君よりは年上」
「うざー」
「そういえばさ、名前を決めなくて良いの？」
「偽名は言ったよ」
「あれじゃ、だめでしょ」
「まだ、偽名決めてないんだよね」
「名は大事だからね」
「うん。名は大事。ちゃんと考えておくよ」

「それよりさ、君ピーターどうするの？」
「ピーターは助けたい。好きだし」
「同感だね。一番、人間らしいよね。何か見捨てられない感じだよね」
「分かってもらえる？あんま理解されないんだよね」
「3巻の最後の、シリウスがピーターに言った。（だったら、死ねばよかったんだ）ってやつあれはないよね。」
「僕もそう思う。友達を裏切るのは許せないけど、他の魔法使い達がかなわない相手にね立ち向かえないよね。強いやつの言い分だよね」
「あいつら正義感の塊だからな」
「何とか助けてあげたいよね」
「そうだね」
「今からどうするの？このままヴォルデモートと一緒にいるの？」
「そのうち、消えるよ。この前のロンの事もあるから、不測の事態が心配」
「ってかさ、人を生き返らせたよね？真理を破壊した？」
「してないよ、時間も巻き戻してないよ」
「どうやったの？代価は？」
「魂が離れきってなかったっていうのと、魔力を大量に払ったのと、

寿命を払ったからね」
「寿命？大丈夫なの？」
「自分の事は良く分からない。」
「無理しないでね」
「リーマスさんみたいなこと言うね」
「何か弟みたいだからさ」
「ありがとう。兄ちゃん（笑）」
「がんばれよ、弟（笑）。それと、ハリーにヘドウィグ生きてる事教えてやれよ」

ベラトリックスの悩み相談

朝起きてボーっとしていると昨日の会話を思い出した。
「兄ちゃんっていうと前の世界の事思い出しちゃうな・・・何か気持ち暗くなる。別の事を考えなくては！！」
朝食を作りながら、卵を割っていた時、鳥つながりでヘドウィグの事を思い出した。
「そうだ。ヘドウィグの事忘れてた。今は魔法で場所分からないから、ヘドウィグ困ってるだろうな。後で届ければ良いか」
朝食をびっくりするくらいでかい、テーブルの上に運び終えると寂しく感じた。
誰も席についていないのだ。
「闇の陣営って朝が苦手なのかな・・・よし！！歌おう」
「ケロケロケロ　いざ進め～　宇宙侵略」
歌い始めたばかりの時、屋敷中から悲痛なうめき声が聞こえた。
不思議の思い、様子を見に行く為階段の下まで来ると
「お・・・う・・・じ」
そういって、ルシウスが階段を転がり落ちた。
「ぎゃあああ。ルシウスさんの穴という穴から血がーーー！！！」
パニックになりながら、呪文で傷を治すと、自分自身もばったり倒れた。

目が覚めると、ヴォルが目の前にいた。
「ぎゃああ！！目に毒！！！」
「うっ。我が子よ。悲しいぞ」
「ＯＲＺしてる！！！パピーがＯＲＺしてる！！！ごめん、いきなり怖い顔が目の前に」
「うぐっ。」

「パピーが　o――――　床に倒れて棒になった！！！落ち込まないでパピーは世界一素敵だよ」
「良くぞ言った我が子よ」
「元気になるの早！！」
「もう一度言ってくれ」
「パパは宇宙一のすてーき」
「ふはははははは」
笑い声と共にヴォルデモートガ去っていった。

夜になりうろちょろしていると
「王子様！！」
「！？ベラちゃん。突然脅かさないでよー。後、無駄に声高い」
「ワームテールから聞きました。王子に悩み相談が出来ると」
「何の話？」
「お風呂で悩み相談を受け付けていると」
「え？まぁやった事はやったけど」
「私も相談があるのです」
「ベラちゃんも？良いけど。対価が必要だよ」
「ちなみに、ピーターは自分の秘密を払ったよ」
「私に払えるものは何があるのでしょうか？」
「明日から修行に付き合って」
「修行？なんのですか？」
「魔法の」
「王子にそんなもの必要があるとは思えませんが。」
「実戦経験がないから、力押しの攻撃以外も修行したいの」
「私にできる事でしたら喜んで」
「交渉成立。じゃあ後でお風呂でね」

お風呂の準備をして先に湯に使っているとベラトリックスが現れた。
「それで、相談って何？」

「闇の帝王にとって私は何なのでしょうか？」
「パパの右腕でしょ？」
「心は隣においてくれないのでしょうか？」
「愛か。うーん。パパも良く分かっていないと思うよ。パパは愛を馬鹿にしているし、自分が人の上に立っていれば誰も自分から離れていかないと心のどこかで思っている悲しいところがある」
「どういうことですか？」
「寂しがりやなんだよ。力に執着するのはね自分に心のそこから信頼できる仲間がいないから、だけど、仲間が欲しい。だからこそ、人を力で縛ろうとする。闇の印なんかで繋ぎとめようとするんだ。」
「やはり、私は、心からの信頼は得られない」
「違うよ」
「どういうことですか？」
「パパは、自分の寂しさを認めようとしないだけ。認めているのを恐れているだけ。認めてしまえば、自分を見失ってしまうから」
「どうすれば」
「パパは態度も行動も言葉も信じない。それでも、信じて続けて、願って。あなたの思いはきっと届く。人の願う力はそれほど強い。特に、魔法使いはね」
「わかりました」
「でもね、あなたの願いは、二人で一緒にでしょ？」
「何故分かるのですか？」
「あなたの名前を知っているから。あなたの願いは強い力がある。でも、２人で一緒なら良いの？そのままでは、ただの邪念になってしまう。相手の幸せを願わなければ、どんな状態でも、誰を殺しても２人なら良いというのは邪念なの」
「邪念」
「邪念は、呪と一緒。自分も相手も不幸にする。相手も自分も不幸になって、２人で不幸の道を行く。あなたの願いわ？」
「２人で幸せになる事」

「僕はきっかけを作るだけ。後は、あなたしだい」
ゆびぱっちんの失敗の音と共に、ベラトリックスを眠らせた後、部屋に送った。

ルシウスの悩み

猪口に酒を注ぎ、一杯やっているとルシウスが入ってきた。
「ここで、王子が人生相談をしてくださると聞いたのだがよいですか」
「うん、まあ良いよ」
そう言って、ルシウスに酒を勧める。
「異国の酒とは、なかなかの名品です」
「分かる？あんまり手に入らないんだよ。こっちもどう？」
そういってキセルを取り出す。
「これは？」
「パイプみたいなものかな」
ルシウスが煙を吸い吐き出した。
「なかなか、すばらしい」
「それで、何を相談したいの？」
「私は杖を失った事で、地位を失った」
「それで？」
「地位を取り戻したいのです」
「地位を取り戻すだけで良いの？」
「それ以外に何を？」
「地位を取り戻してどうしたいの？」
「マルフォイ家の力を取り戻さなくてはいけないのです」
「マルフォイ家の力を取り戻してどうするの？」
「ドラコもナルシッサも蔑まれておるのです」
「あなたの願いは？」
「家族で共に幸せな日常に」
「そこに杖や地位はいるの？」
「家族さえいれば良いです」
「そう。きっとそうなるよ。思うように行動すればね」

「感謝します」
失敗する指ぱっちンで部屋に送った。

スネイプに悩み相談

スネイプが入ってきた。
「王子、ここですかな?」
「スネピーも相談?」
「何の事ですかな?良い酒が飲めると聞いたので来たのですが」
「酒目当てね」
「ところで、王子は杖なしで魔法が使えるのですな。妖精の魔法に似ておりますが」
「別に使おうと思えば使えるんでしょ?杖の制御無しで使う練習しないからだよ」
「確かに、制御が難しいですな。その歳で、呪文も杖もなしで使えるとはさすが、帝王の御子息ですな。指をこするのは何故ですかな」
そう言われると、手をすっと払い猪口を出した。
次に、息をふっ吐くと徳利が現れ、ウインクするとつまみが数点現れた。
「別に何でも良いんだけど、何かやったほうがカッコいいから」
そういって、頭で念じると、徳利が勝手に猪口に酒を注いだ。
「何もせずとも、魔法が使えるのですな」
スネイプは目の前に浮いている、猪口を取り、飲んだ。
「なかなか、良い酒ですな。ジャパンの物ですかな?」
「日本の酒だよ。これは、肉じゃが」
「うむ、おいしいですな」
「ねえ?質問して良い?」
「何ですかな」
「どうして、一人の人を一生愛せるの?」
「!?突然何ですかな」
「りーりーさんまだ好きなんでしょ?」
「リリーです」

「ファミリーネームが変わっても？」
「それを聞いてどうされるのですかな？」
「誰にも言わないよ。信用できないなら、僕の秘密を教えてあげる」
「秘密ですと？」
「僕、ヴォルデモートの子どもじゃない」
「！？どういう事ですかな」
「こういう事」
手をスッと振ってスネイプにのみ本来の感覚に戻す。
「錯乱の呪文か。我ら全員にかけるとは末恐ろしい」
「錯乱の呪文とは違うけど、そんな物かな？みんなには内緒ね」
「それで、何が聞きたい？」
「人を好きになるって、どういう感じ？」
「何に変えても守りたいという様なものだ」
「良く分からないよ。それなら、僕は、誰に対しても感じてるよ」
「子どもには難しいかもしれぬな」
「いつか、僕にも分かるのかな」
「人を愛する気持ちが分からぬのか？」
「愛は分かる。でも、たった一人って分からない。僕は、皆大事だから」
口を湯に沈めてブクブクやっている僕の頭にスネイプが手を置いた。
「いずれわかる」
とっても、やさしい。
知らない世界に来て、みんなに優しくしてもらった。
だけど、僕は皆を好きだから、誰にも心を開けない。
誰か一人に特別な愛情がもてない。
前の世界でもそうだった。

兄ちゃん元気かな。

恐怖　ベラトリックス来襲

次の日、約束どうり、ベラトリックスと修行を始めた。
多対戦の力押しなら、僕のが強いけど、一対一の技量線になると、経験がない分とっても弱い。
今は、実力を見るために決闘の最中だ。
「1、2、3」
ベラトリックスが杖をあげるより早く、僕が魔法をぶつける。
無言呪文の上に杖もなしだから、先手はこちらが取る。
「くっ」
ベラトリックスは驚きの声を上げながら、呪文をよけ、魔法を放つ。
さすがに、死の呪文は使ってこないが、本気の魔法をぶつけてくる。
「プロテゴ」
「王子も呪文をいうのですな」
審判役のスネイプが聞いてくる。
「呪文のイメージを明確に持たないといけないから、とっさの時は呪文を言ったほうが早いの」
「余所見をしている暇があるのですか！！！」
ベラトリックスが先頭モードに入って、狂いだす。
「ベラちゃん、呪文の連射しすぎ」
「ｈｈ」
「言葉になってないよ！何？ｈｈってははって笑い声の事なの！？」
「ｈｈ」
「怖いよ」
ベラトリックスが、芝生を炎で多い尽くす。
「熱！！我を守護せよ水の魂」
体の周りに水の幕を張る。だが、水は長く炎の中にいれば沸騰してしまう。
炎を一気に突っ切り、ベラトリックスに跳び蹴りを入れようと炎か

ら飛び出す。
「読まれた!?」
ベラトリックスが待ち構えて、杖を鞭に変え、僕の体を捉える。
鞭がギュウギュウと体を締め付ける。よく見ると、それは、鞭ではなく蛇だった。
息が出来ないので、無言呪文で蛇を綿にし引きちぎる。
「ベラちゃん強すぎ」
そう言って両手の１０指から呪文を打ち出す。
呪文は１０倍の力で、ベラトリックスを襲う。
地面がえぐれ、小さなクレーターが出来る。
しかし、ベラトリックスは、もはや、そこにはおらず、呪文の直線的な軌道を読み、斜線上から体を横目に走ってくる。
それでも、僕の術スピードのほうが速い。口から、気絶呪文を打ち出す。
不意打ちだったにもかかわらず、ベラトリックスは反応し、呪文を弾かれた。
目の前に杖を突きつけられた。
「まいった」
「勝者ベラトリックス」
「ベラちゃん強すぎだね。後、怖い」
「王子様こそ、冷や汗をかかされましたよ。１０指の魔法は、威力がありすぎます。当たってたら死んでました」
「それにしても最後の不意打ち良く反応できたね」
「やってやるって顔してましたから」
「表情で読み取られたの?うわっ、すごすぎ」
「王子も良く戦っていましたよ」
スネイプが割り込んできた。
「そうかなー」
「王子の技は多対戦で力を発揮するようですな。１０指の技は一直線に出すより、多対戦の時のように広範囲に術を出したほうが良い

と思いますぞ。」
「広範囲か」
「そうです。あたれば終わりの業の威力を高めても意味はないのです。」
ベラトリックスが言った。
「ちょっとやってみるね」
魔法を放つ。１０個の魔法の当たる音が重なり合い、不思議な音がした。
「これでは、先ほどのようなよけ方はできまい、ベラトリックス？」
「避けるのは無理ですね」
「今から、もう一回やろ」
「いえ。一対一はもう必要ないです」
「え？まだ勝ってないけど」
「王子は術の応用や反応が悪いだけです。今から、サバイバルをして、戦いに慣れてもらいます」

恐怖のサバイバル演習

そういうことで、サバイバルに突入。
僕対ベラトリックス、スネイプ、ピーター、ヴォルデモート、グレイバック
「あーもーマジですか。何で、こんなに強いやつらと多対戦なの」
岩の陰に隠れながら、嘆いていた。
不意に、何かの気配がする。
何もないはずのところで、誰かと目が合った。
キラっと何かが光ると、僕は横っ飛びに避けた。
頭から地面に突っ込んで、みっともないが、そのまま反撃する。
盾の呪文と共にスネイプが現れる。
「目くらましを見破るとは」
スネイプが僕の横にあるつたに杖を向けると、つたがするすると動いて体を縛る。
「何で皆、縛るのが好きなの!!!」
そう言って、術を使い、つたを通り抜ける。
「なに!?」
「ていやー」
そう言って、回転しながら10指ストゥーピファイを打つ。
「くっ」
そういって、スネイプは物陰に隠れた。
後ろのほうでも、誰かが盾の呪文を使っている。
何人か潜んでいたようだ。
ドシンという音と共にグレイバックは倒れた。
術にあたったようだ。
グレイバックに近づき、気絶しているかを確かめる。
「グーちゃん」
「・・・」

「返事がない。ただの屍のようだ」
ふざけている所に魔法が飛んでくる。
ピーターの襲来だった。
とても早い術の応酬に、パニックになり、反撃が出来ない。
「ピーター結構強いな」
足に魔力を込めて飛び上がり、ピーターの背後に着地し、ゼロ距離で魔法を使う。
とたんにピーターの姿が消える。
ネズミになったのだ。
ネズミに向け術を乱射するが、当たらない。
精密射撃は難しいな。
「ｈｈ」
ベラトリックスが現れた。
ベラトリックスの攻撃
王子に２０のダメージ

王子は逃げ出した。
「ｈｈ」
王子は逃げ切れなかった。

ベラトリックスは魔法を使った。
王子に４０のダメージ

王子はアイテム砂を使った。
砂がベラトリックスの目を直撃。

ベラトリックスは逃げ出した。

「卑怯な手を使ってしまった」

「ふはははははは」
「パピー！？」
空から現れた、ヴォルデモートが、強力な魔法を使ってくる。
結界を張り防ぐ。
「強い！！攻術をするしかないか」
手をヴォルデモーとに向け魔力を直接叩きつける。
ヴォルデモートが避け魔法を放ってくる。
「パピー本気か」
「当たり前だ。でなければ強くはなれぬ」
「ｈｈ」
「ベラちゃんもう復活したの！？」
「私もいるが」
「スネピー！！」
そういって、土の壁を作り3人の術を防ぐ。後ろに回り込もうとした矢先、土が突然3匹の蛇になり体を縛り付けた。
3匹の蛇を水に変え3人を襲わせる。
3人はそれを、炎に変えた。
僕は足に魔力を溜め一気に駆けぬける。
そこに、ピーターがアニメーガスを時、杖を持って現れる。
ピーターの杖を吹き飛ばすと、どこから現れたのか3人に杖を向けられた。
「まいった」
「まさか、あの炎を防ぐとわ。さすが我が子よ」
「蛇を水に変えて反撃したのは、上手かったです」
「しかし、魔法ではなくベラトリックスを砂で撃退するとは、面白い手を使いますな」
「追い詰めたと思ったのに杖を吹き飛ばしたのが素晴しかったです」
「でも、また、負けちゃった」
「我が子よ。我ら5人の相手をし、ここまで善戦するのだ。見事としか良いようがないぞ」

「そうかなー。」
「では、また明日。戦えばよかろう。今日は、休まねばならん」
「え？もう一回やろうよ」
「疲れておらぬのか？」
「まだ、大丈夫」
「我が子よ。お前は大丈夫かもしれんが、我らは力を使いすぎておるのだ」
「まあ、いっか」
バタ
バタ
バタ
バタ
振り返ると４人が倒れていた。
「え？うそー！！僕だけ魔力無限だからか！？」
パニックになりながら、皆を建物の中に運んだ。

レトルト食品という崇高な存在

修行を始めてからしばらくたち、ヴォルデモーとに呼び出された。
「我が子よ。しばらく我らは旅に出る」
「杖を探しに行くの？」
「分かるのか？」
「何となくね」
「お前を連れてはいけぬ」
「何となく分かってた」
「すまぬな」
「一つだけ約束して欲しいんだけど」
「何だ？」
「人を殺さないで」
「・・・」
「お願い」
「できるだけそうしよう」

次の日ヴォルデモートが旅立った。

「これからどうしよう。ハリーたちは、しばらくグダグダしてるだろうからな。まあいっか行こうかな」
ゆびぱっちんの失敗する音と共に、移動した。
「久しぶり！！」
「くっ」
一瞬で杖を向けられた。
「え？何？」
おたおたしているとハリーが口を開いた。
「僕は君を信じていたのに！！！」

「やめてハリー相手は子どもよ」
「でもこいつは!!」
「そうだぜハーマイオーニー」
「でもロン!あなたを助けた」
「裏があるに決まっている」
3人の言葉の意味が分からず聞いた。
「ちょっと待って、何なの説明してくれない?」
「私、本で調べたの。あなた例のあの人の子どもなんでしょ?」
「え?ああ。そこまで変わるのか」
「どういうつもりだ!何の目的だ!!」
「今説明する」
動くと術をくらいそうなので、3人の頭に真実入れる。
「え?どういうこと?」
「僕の力だよ」
「錯乱の呪文じゃないわよね?」
「違うよ」
「わけが分からないけど。あなた味方なのね?」
「そうだよ。最初に言ったでしょ」
「ハリー、杖をおろしたほうが良いんじゃないかな」
ロンの声でハリーが杖を降ろした。
「死ぬかと思った」
「それより、あなたどうやって保護魔法を破ったの?」
「破ったんじゃないよ。保護魔法を通り抜けただけ」
「そんな事できるの!?」
「できてるでしょ?」
「そうね。そう」
「君は何で来たの?」
ロンが聞いた。
「暇だったから遊びに来た」
「ふざけるな!!遊びじゃないんだ!!!」

「ハリー外して」
ハーマイオーニーがホーラックスをつけているハリーに言った。
「それ、しばらく封印しようか？」
「出来るの？」
「つけている本人の心が安定しているなら惑わされない程度には出来るよ」
「対価はどうなるの？」
「そうだな。時が来たらあるものをもらう」
「怖いわね」
「ハリーが捨てる物だから大丈夫だよ」
「僕が捨てるもの？」
「今は知らなくて良い」
「何でも良いよ」
ハリーがまたイライラしだした。
「それを、そこにおいて」
ホーラックスの上に手を置いて、目をつぶり魔法陣を出現させる。
ホーラックスが浮き出し、目の前に来たところで、ホーラックスの周りに円を描くように手を動かす。
「できたよ」
「もう？」
「うん。でも、これはつけている本人の意思によるところが大きいからね。特にロンとハリーは気おつけてね」
「わかった」
「うん」
「前から言おうと思ってたんだけどさ」
3人が真剣な顔でこちらを凝視する。
「ロンって背が高いのに可愛いね」
「え？」
ロンが驚いた顔をして顔を赤らめる。
ハマイオーニーがくすっと笑い、続いてハリーが力を抜かしイスに

座る。
「何だよそりゃ」
「だって、発言が何か子どもみたいで可愛い」
「君が言うな!!!」
3人が声を揃えて言った。
「そういえば、みんなちゃんとご飯食べてる?」
3人のやつれた姿を見て言った。
「あまり、ちゃんとしたものはないわね」
「おいしいものなんか何もないんだ」
「魚を焼くくらいしかないよ」
「魚ってちゃんとしてるよ」
「焼いた魚だけだぜ」
「私達、あまり料理をした事がなくて、焦げちゃうのよね」
「じゃあ、ご飯の作り方を教えてあげるよ」
「本当に?でも簡単に出来るのかしら?」
「とりあえず、ご飯作ろうか」
魔法で飯ごうを出し、米を研ぐ。3人にも教えながらご飯を炊く。
野菜の切り方も教える。
「ディフィンド」
「こら!魔法使うな」
ロンが魔法を使ったので叱った。
「だって楽でしょ」
「手作りが美味しいの」
「こんな感じで良い?」
「え?ハリー上手いな」
「うそ?私より上手」
「僕は、ダーズリーのところで料理担当だったからね」
「そういえば、そうか。カリカリベーコン作ってたね」
「君は何で知ってるの!?」
「しまった・・・」

第一巻の記述だったな。どうしよう
「それも、君の力？」
「そうそう、僕の力」
「まあ、何でも良いや」
お湯で、野菜を煮て火が通ったところでカレー粉を入れる。
「この匂い、カレーアンドライス」
「こんな本格インド料理作れるんだね」
「あらやだロン、少し前までは、イギリスでも家庭料理だったのよ」
「カレーのルーと野菜入れれば作れる料理だから簡単でしょ」
「・・・」
「・・・」
「カレーのルーって何？」
「何いってんのロン？それに二人して何で無言？」
「忘れてた！！！レトルト食品使えばこんな生活せずに住んだのに！！！」
「そうだわ、冷凍食品だってあるわ。その手があったのよ」
「何それ？」
「マグルの食べ物で、火で暖めるだけで、料理が出来るんだよ」
「え？何それ魔法みたい。魔法とは違うの？」
「出来てる料理を腐らないようにしてるだけだからね」
「魔法生活長いから忘れてたわ」
「まあ今度買ってくるから、しばらくは我慢してね。とりあえず食べよう」
皆でカレーを食べ始めた。
「美味しい！」
「何か、イギリスで食べるのとは違うね。でも美味しい」
「うぐっ　ヒッグ　グスン」
「ロン泣かないでよ」
「だってー」
「喜んでもらえて光栄だよ。これは日本の味付けのカレーだからね」

「私知っているは、日本ではカレーライスって呼ばれてるのよね？」
「博識だね」
「あーあ。これで、ホーラックスを破壊できる方法が分かればな」
「え？まだ知らないの？」
「君は知ってるの？」
「安全な方法よね？」
「バジリスクの毒を吸ったグリフィンドールの剣とバジリスクの牙」
「そうか！そうなんだ。だからリドルの日記も」
「でもだめね。そんなに簡単に手に入らない」
「ごろごろ転がってるわけじゃないし、君が取ってきてくれれば」
「だめ。自分達でやって」
「何でさ？」
「そうしなければならないから」
「そうね、私たちで成し遂げなければ」
「真の勇気を示せば大丈夫だよ」
「僕は、もう行くね」
「もう行っちゃうの？」
「いろいろしなきゃならない事があるからね。料理のレシピと、山菜の見分け方の本置いていくね」
僕は姿を消した。

番外編　新入生の悪夢

聞いてほしい事がある。
僕の生まれは魔法族。って言ってもピンとこないか、僕の家系は代々魔法使いなのだ。
魔法を信じない人もいると思うけど、魔法は実在するんだ。だって、僕のお父さんもお母さんも、じいちゃんもばあちゃんも、果てはおじさんも、皆、杖を振るだけで、不可思議なことをやってのけるんだから。
ある日、例のあの人が復活したという噂が流れた。
どうやら、ぼけた爺さん。もといホグワーツ校長ダンブルドアが言っているらしい。
それからの毎日は地獄だった。僕のパパが、今日から自分を守れるように特訓をすると言い出したのだ。毎日の過酷な修行の中８歳で、守護礼の呪文を使えたことは、最年少だと親は喜んだ。だけど、食事に毒が入っていたり、寝ている時に闇の魔法を打たれるのを修業というんだろうか？ママもママで、風呂に入っていようが、ご飯を食べていようが、攻撃呪文をかけてくる。
最初の頃は、当たってしまったが、今では、無言呪文で防げるようになった。ちなみに、おはようの挨拶に、ステューピファイを打ってくるのは日常の光景だ。
そんな、不思議な毎日の中、一通の手紙が届いた。
ホグワーツ入学の手紙だ。
ありえない。ありえなさすぎる。僕が魔法を使えるから覚悟はしていた。だけどとっても行きたくない。なぜなら、今、魔法界はヴォル・・・例のあの人に牛耳られてるからだ。
こんな時期にホグワーツに行きたい訳がない。行きたい奴なんて、闇系の子供か、自殺志願者だけだ。どちらでもない僕が行きたくないのは、皆共感してくれるだろう？

そういう理由から、手紙は親に見られる前に燃やした。
次の日、朝の眠さを晴らそうと外に出ると飾りであるメールボックスが、体積を無視して膨張していた。メールボックスから「助けてくれ・・・」という声が聞こえたたから、開くと、体が吹っ飛ばされ、壁に打ち付けられるほどの勢いで顔面を手紙が襲った。インセンディオで燃やした。紙の勢いで顔中が切れたが、ママに治してもらい、治療呪文も教えられた。
次の日、昨日の炎の真ん中で笑っている、人の悪夢が災いしたのか、寝ぼけ眼で部屋のカーテンを開けた。外が見えなかった。目をこすって、もう一度見るが、やはり外が見えなかった。アグアメンティで顔に水をかけたが、やはり外は見えなかった。良く見ると、覆っているのは、手紙だった。
家のカーテンじゅうを開けてみたが、全て手紙で覆われていた力の限り。ちなみに全部のカーテンを開けるのに２０分かかった。
次の日、ドアを開けると目の前が真っ白になって、体に濁流のような圧力が流れた。パパとママがいるリビングに入る前に燃やした。
パパとママはなんか焦げ臭いといっていたが、悪霊の火を使うのに失敗して髪の毛焦げちゃったと言っておいた。嫌がらせのように、大量の手紙が雨の様に降ってきた。
さすがに親にバレた。
とうとう僕は、死亡フラグ満載のホグワーツに入学する事になった。

新入生の悪夢2

パパ、ママ、逝ってきます」そう言ってホグワーツ特急に乗り込んだ。
パパとママには逆らえない。僕にできることは、列車占拠だけだ。
乗って早々、機関室に乗り込んだ。
運転士は楽に倒せたが、ホグワーツ特急に乗っていた、教師陣によって取り押さえられた。
組み分け防止の儀式まで、眠らされていたようだ。
突然、頭の上で声がした。
「ふむ、君は、好奇心旺盛で、自分の信じる道を疑わず、誰よりもやさしい。だが、ホグワーツがくだらないと思っているね。う～む、難しい。だったら、ハッフルパフ！！！」
意味不明すぎて、寝落ちした。
眠りから覚めると「知らない天井だ」そう言って、起きてみると、周りは静かで、寝ているようだった。
お腹が鳴り、談話室を出て、親から教えられていた、調理場へ行った。しもべ妖精たちも寝ていて、起こすのもまずいから、明日の朝食になるであろう、パンとスープをいただいておいた。
階段でムシャムシャと食事を取っていると足音が聞こえた。
「何をしておるのかね？」
粘っこくて、いかにも薬漬けな先生がいた。
「ご飯食べてます」
ムシャムシャ
「そうか。だが、この時間に談話室から出るのはどうだろうか？」
「餓死しても良いなら、出ませんが？」
ムシャムシャ
「では、私の部屋に来ると良い。それならば、良いだろう。今からb、トイレに行くので着いて来い」

「先生、トイレ怖いんですか?それともショタコンですか?この変態校長!!!」
そういった瞬間、青筋を立てて、無言呪文を放ってきた。
それを、防ぎ、言った。
「!!!??」
「分かりましたよ。着いて行けば良いんでしょう?」
「・・・黙って着いて来い」
「むしゃむしゃ、むしゃむしゃ」
「口で言う必要わない」
「はいはい」

新入生の悪夢３（前書き）

間違って消してしまったので再投稿します。

新入生の悪夢3

今日も僕は夜更かしをして、厨房へ向かった。

どうも昼夜逆転になってしまっているみたい。うす汚い帽子のせいだ。どうして、僕が夜厨房に向かうかといえば、一つはお腹がすいたから。もう一つは、うるさいからだ。

毎晩、毎晩、ノイズ交じりの音声を垂れ流し、それに耳を傾ける、寮生達がああでもないこうでもないと凄くうるさいのだ。話の中心は、英雄ハリーさんと蛇の人だ。

・・・どうでもよくない？

蛇の人が政権とったからってどうだっていうの？今までと変わらないよね。今までだって、独裁政治の魔法省だったんだよ。独裁裁判、独裁政治、独裁教育。大臣が何でも決めれたんだよね。蛇の人が革命を起こしても、政治体制変わってない。じゃあ、どっちでも良いでしょ。

魔法族以外を捕まえまくっているから良くない言ってるけど、それって、無実の人を捕まえるから駄目って事でしょ？

やっぱり変わってない。今までだって、魔法界の裁判に証拠も何もあったものではなかったよね。シリウス・ブラックって確か証拠も何もなしで、捕まって投獄されてたんだよね。魔法で記憶改ざんなんて簡単にできるのに、それを証言に使うって何なの？え？秘密の守人？状況証拠でしょ。何の証明にもならないよ。魔法界マジでウザィ。

何で、僕が魔法界でこんな異端な考え方をするのかといえば、僕の近所にスクイブのエレンおばさんとニコラスさんっていう夫婦がいるんだけど、エレンおばさんは、マグルの子達の学校で先生をして

いるって言ってた。魔法が使えない子に何を教えるの？って聞いたら、人生をより楽しく生きる方法を教えてるんだって。内容は良く分からないこと言われたんだけど、面白そうだから色々教えてもらったんだ。そうそう、その人の夫のニコラスさんが弁護士さんなんだ。弁護士っていうのは、良く分からないけど、魔法界でいう偉い人が裁判の時に付添い人になることする仕事みたい。二人から色々、教えてもらった。

僕の家は、純潔の家系だから、魔法のことは色々、分かりすぎるくらい教えてもらってるけど、マグルの子が教えてもらってることの方が面白そうだった。だから、時間があればエレンおばさんの家に行ってたんだ。エレンおばさんもニコラスおじさんも、息子さんが今は結婚して違うところで住んでるけど、孫が一生できないって良く分からないことを言ってたから、それで、僕の事を可愛がってくれてるんだって。

パパもママもニコラス夫婦とは仲が良かった。

パパとママがマグルやスクイブを嫌わないのには、理由がある。

僕が生まれる時に、家の前で突然産気づいたんだって、そんな状態だから、姿くらましも危なくてできなくて、パニックになってるから助けを呼ぶことも忘れてたんだって、パパちょっと情けないよ。

それで、たまたまエレンおばさん家でイースターのお祝いをしていた、エレンおばさんたちと息子のウォルター夫婦が様子に気付いて助けに来てくれたんだ。ウォルターさんの奥さんのアイリーンさんが生殖医療だかなんかのお医者さんなんだって、ヒーラーのマグルバージョンみたいなものらしい。

それで、僕は健康に生まれて来られたらしいんだ。そんなこんなで、パパとママは、ニコラスさん一家に感謝してて、マグルやスクイブの事も偏見がなく見ているみたい。そのせいで、パパもママも不死鳥の騎士団に参加してしまったわけだけど。エレンおばさん達はパパ達が保護してるらしい。

エレンおばさん達は好きだけど、バレたら、僕どうなるんだろう。

はぁ。ため息が出る。

「どうかなさいましたか？」

「ドビーか。ちょっとね、親の都合で窮地に立たされるかもと思うとね・・・」

「どういうことでございましょうか？」

「なんでもないよ」

「ドビーめには分かりませんが、ドビーめにできることがあれば何なりとお申し付け下さい」

「ドビーは優しいね。う～んそれじゃあ、お腹すいちゃったからご飯もらえるかな？」

「ドビーめが優しい？あなたも不思議な魔法使いなのですね」

「不思議ってどういうこと？」

「他の魔法使い様のほとんどはドビーめ達をそのように扱いません」

「ああ。そういうことね。僕のうちの屋敷しもべ妖精も、みんなこんな感じだよ」

「純潔の家系なのですか？」

「そうだよ。でも美味いものを作る奴に悪い奴はいない。美味しいものを作ってくれるんだから感謝するのは当たりまえでしょ」

「ハリーポッター様のような方ですね」

「ハリーポッター？」

「ハリーポッター様も屋敷しもべ妖精に優しいのです」

「英雄も変わり者なのね。ドビーそれよりご飯をくれない？餓死しそうなんだけど」

「はい。ただいまお持ちします。」そう言って、ドビーはどこかに走っていった。

（ハリー・ポッターね。どういう人なんだろう。ダンブルドアの追悼式にもビビって仮病使って行かなかったから、新聞でしか知らないんだよね。潜伏中らしいけど、僕からしたら意味わからないんだよね。死体偽装して逃げればいいのに、整形すればいいのに、何で革命返ししようとするの。人の迷惑考えてよね）

また、ため息が出る。

「お待たせいたしました」そういって、ドビーはパスタ（タリアテッレ）にスープ、サラダにマッシュポテトミートボールを用意した。

「ドビー、すばらしい。ボロネーゼにミートボール。すばらしい組み合わせだよ。」

「光栄です」

「ドビー、聞きたいんだけどハリーポッターってどういう人？」

「すばらしい方でございます。ドビーめはハリーポッターを心から

崇拝しております」

「崇拝・・・」（蛇の人と変わらないじゃないか）

そんな、事を考えていると、ドビーは聞いてもいないのに、ハリーポッター6年の軌跡を語りだした。

3時間後・・・

「ハリーさん、パネェ・・・マジで恋する5秒前だった。それに、セドリックさん!!!シリウスさん!!!ダンブルドアさん!!!親しくもないのに名前で呼んでごめんなさい。そして、最大の被害者ロックハート先生!!!ホグワーツにさえ来なければ平和に暮らせたのに」

「パネェとはなんですございますか?」

「凄いっていうことだよ。昔、近所の家の、兄ちゃんに教えてもらったんだ。今は確か、ひきこもりって仕事しながら映像の写る箱の中で勇者してるんだって」

「勇者でございますか。凄い方ですね。あっパネェですね」

「そろそろ、部屋に帰らなきゃな。ドビー、夜遅くまでありがとう。おやすみ」

ドビーはカッと目を見開き言った。

「もったいなきお言葉、おやすみなさいませ」

廊下を歩きながら、考えていた。

（ハリーさんは凄いけど、やっぱり僕には関係ないよ。どうせ、そのうちハリーさん守るために戦わなくちゃとかになるんでしょ。僕は不干渉でいこう）

「こらまて！」

「そっちだ！そっちに逃げろ」

（え？何？誰か来る。やばい隠れなきゃ）

すぐに、目くらまし呪文を使った。

「まて、ロングボトム！！フィネガン！！」

（うわー過労死（カロー）兄弟に追われてるよ。確か彼らは7年生の先輩でハリー・ポッター擁護派の人だったよね）

「ええい！まだいるかもしれん！ホメナムレベリオ」
スウっと何かが身体を通り過ぎた。

「やはりいたか。出て来い！」

（どうしよう。今、やっつけても顔を見られたら・・・）

新入生の悪夢４

7年生を追いかけていたアミかス兄弟により見つかりそうになってしまった。
ジリジリと杖を向けながら迫る兄弟。
（攻撃するより降参した方が得策かな。でも、この人たちは体罰で有名だからな。痛いの嫌だな。倒した後、記憶操作をしようか）
そんな事を考えていた矢先、突然、赤い光線が放たれた。

「ステューピファイ」

「ぐぁ！」

「ロングボトム、貴様、よくも！」

「こっちも忘れるな！コンフリンゴ！」
地面が爆発し、土煙で煙幕ができた。

「誰か知らないけど、こっちへ！」
先輩達は走り出した。
僕も、今は逃げなきゃいけないのでついて行った。

「はぁはぁ。ここまでくれば・・・シェーマス大丈夫か？」

「はぁはぁ。何とかなネビル。必要の部屋には入って来れないはずだ」

「誰か知らないけど、そろそろ姿見せたら」
ロングボトム先輩が言った。
しかたがないので、呪文をといた。

「一年生!!?」

「何で知ってるんですか?」

「ホグワーツ特急を占拠しようとしたり、組み分けの最中に寝る子どもなんて見たことないから。君、有名だよ」

「目、つけられてるんですか?」

「いろんな意味でね」

「聞かなかった事にします」

「ネビル、そんな事より、こいつを必要の部屋に入れたのまずくないか？」

「あっ、確かにまずいかな」

「記憶消すか？」

「ちょっと、まずくないか」

「こいつが、ＤＡの事を喋ったらどうするんだよ。」

「あの、必要の部屋？ＤＡ？って何の事ですか？」

「え？あっしまった」

「シェーマス、焦りすぎだよ」

「ＤＡってもしかして日刊預言者新聞に載ってたダンブルドアの私設武装組織ですか？ファッジ元魔法大臣が解体したんですよね」

「私設武装組織ではないけれど、今もハリーを守るために活動は続いているよ」

「不死鳥の騎士団の下部組織としてですか？」

「君はどうして、そんな事まで知っているの？」

「僕の親も不死鳥の騎士団の協力者ですから。目立った活動はしてませんけど」

「じゃあ、君もハリーの事を・・・」

「僕は不干渉ですよ」

「どうして？」

「だって危ないじゃないですか。僕は純潔ですから、どちらが勝ってもデメリットはないです。メリットもないですけど」

「君は、ヴォル」

「ネビル！」

「ああ、追跡されるんだったね。例のあの人が支配する世界になっても良いの？」

「良いも何も、もう支配されてるじゃないですか。それとも、一年生に死を覚悟して戦えって言うんですか？親が不死鳥の騎士団だから？」

「いや、そういうつもりはないんだ。ただ、この時代だから、身を守るすべは覚えた方が良いかなって、それがＤＡの本来の目的だから」

「必要ないですよ。７年生くらいの身を守る力はありますから」

「ああ、目くらまし呪文使ってたね。一年生にしてはすごいけど、あれだけじゃ」

お節介だなと思いつつ、無言呪文でパトロナースチャームを使った。

「無言呪文でパトロナースを！？」

「すげー」

「防衛と攻撃は、それなりにできますよ。他は微妙ですけど」

「他に何ができる？」

「手の内あかすわけないじゃないですか」

「それだけの事ができるなら、やっぱり」

「嫌です。不干渉です。しつこいと、僕が先輩方の記憶消しますよ」

フィネガンさんとロングボトムさんが身構えた。

（やばい、成り行きで言っちゃったけど、強気すぎたかな。親からお墨付きはもらったけど、ＤＡってたしか、かなりの修羅場を潜り抜けてきたはず。蛇軍団と戦って生き残ってるんだったよね。特に、ロングボトムさんは新進気鋭のオーラが出てる）

「２対１だよ。本気でやるきか？」

「シェーマス、落ち着け。不干渉なんだから、ほっといても大丈夫だろ」

「何言ってるんだ！ピンチになったらそっちにつくって事だぞ」

（え?そんな事、言ったかな。メリットとかの話かな?う〜ん、どうやって逃げよう）
「ほら、黙ってるって事は、そういうつもりなんだろ」

「何か良いなよ」

（ロングボトムさんも、戦う気になってる。一年生相手に七年生が2人で戦おうって、イジメだよね。よし、こうなったら）

「先輩!さっきの技、使わせてもらいます」

「「?」」

無言呪文で床を破戒し、煙幕を使った。
ガチャ　バタン

「ネビル!逃げたぞ。扉だ」

「分かってる」
ロングボトムさんとシェーマスさんが部屋から出て行った。

（危なかった、足じゃさすがに、7年生には勝てないからな。それにしても、単純な事ほど引っかかるね。目が使えないから耳に頼る

しかないからね。扉の音だけで、部屋から出たと思ったんだろうね。
それにしても、疲れたな、本気の戦いには気迫も必要なんだな。ま
ぁ、僕には関係ないさ。寮に帰って寝よう）

新入生の悪夢5（前書き）

まず、注意とおわびを申し上げます。
本編にはマクゴナガル先生を誹謗中傷する場面と魔法界が狂っていると主人公が持論を展開します。

もうひとつなのですが、本編に、番外編の主人公の名前を入れて話を進めていて、番外編の方に名前を出し忘れていました。番外編主人公名アレックス・クープです。どこかに、書き足しておきます。
本当は、名前出さない事を何かの伏線にしようかと思ってましたが、本編ですごく絡んでいる為、無理でした。ご迷惑おかけします。

新入生の悪夢5

「あー、眠い。今は、9時30分か。早く起きたな。ティータイムでも行こうかな」
そう思って、部屋にあるバスルームに行って、目を覚まさせようとした。

ハッフルパフのバスルームは、そこそこ豪華で、マイペースなハッフルパフ生には良く合っている。脱衣所には、忘れ物用に、洗面用具からお風呂セットまで、全てが用意されている。
風呂から脱衣所に行くにはトンネルを通らなくちゃいけなくて、そこでは、シャワーを全身に浴びせられる。
風呂は、先輩が言うには監督生の風呂よりは一回り小さいが設備はこちらのが優れているらしい。ジャグジー風呂や、香り風呂、牛乳風呂、多種多様な風呂がある。男子に必要あるのかなって思うけど、そこそこ騒ぎながら楽しんでいる。

僕が一番好きなのは、シャワーの一部に食べ物やドリンクが出るものがあるのだ。シャワーを捻ればオレンジジュースや、百見ビーンズ蛙チョコ、ファイヤーマシュマロなんかが出てくる。寮生のお気に入りは、ファーイヤーマシュマロをココアに入れて、内緒でブランデーを少し入れる事だ。

ヘルガ・ハッフルパフの時代は違法じゃなかったんだろうけど、今は違法だ。でも、今までの寮監達も、慣習として見逃しているそうだ。ただし、魔法で個人に合わせて、酔わない程度に調節してるらしい。ただ、お祝いの日は、二日酔いにならない程度に出しているらしい。
もちろん、風呂で酒を飲むんだから、酒の回りが速くて悲惨で大変

になるらしい。
・・・何が大変なのかは聞かなかった事にしておいた。記憶に残したくない。教えてくれた先輩は通過儀礼さと謎の発言をしていた。

（お祝いの日は風呂はみんなとは別に入ろう）
そう心に誓った。

着替えも終わり、ティータイムという名のブランチをとりに行った。

「いつも悪いね、ドビー」

「いえ、お役に立てて光栄です」
そういって、揚げ物やパン、サンドイッチなどを置いた。

「ドビーはハリーポッターが好きなんだよね？」

「はい。あの方は、すばらしい方にございます」

「暗黒の時代を終わらせたから？」

「はじめてお会いなさるまではそうでした。ハリーポッター様は気高く慈悲深くそして、とても勇気に

あふれたかたなのでございます」

「それはそうだろうね。こんな時代に、頑張ってるんだから。ドビーはハリーポッターの事をヒーロー扱いする事が怖くないの？」

「ドビーめはハリーポッター様のためなら命などおしみません」

「そう・・・ドビー、もしハリーポッターが負けたら、僕の家で働きなよ。ホグワーツにいるよりは、ましな生活できるはずだから」

「もうしわけございません。ドビーめは仲間の屋敷しもべ妖精を裏切るわけにはいきません。それにハリーポッター様は負けません」

そういって、ドビーは意見した事に対して、自分を罰しようと机に頭をぶつけようとした。僕は、それを止めて、言った。

「止めて。僕が悪かったよ。ごめんね、もう行くね」

悶々とした気持ちの中、廊下を歩いていると、ドンっと何かにぶつかった。

見上げると、笑顔で憤怒のオーラを出すスプラウト先生がいたのだ。

「こんなところで何をしているのかしら？」

「・・・お茶」

「え？まさかとは思いますけど、あなたは、ホグワーツに来て以来、カリキュラムの半分しか授業に出ていませんけど、その時間、お茶を飲んですごしていたと？」

（間違いない。ここで、不用意な発言をしたら、マンドレイクの世話をさせるといわんばかりの危険なオーラが見える）

「いえ、その・・・」

「はい？」

逃げようそう思い立ち、走り出そうとした瞬間、バシっと音を立てて何かが身体に巻きついた。

「悪魔の罠？」

「正解です。ハッフルパフ５点減点。では、悪魔の罠の特徴は？」

「湿気と暗いところを好み、日の光に弱い。今は昼なんですが、どうして、活動ができるんですか？」

「さてなぜでしょうね」

スプラウト先生をよく見ると、腕とローブの隙間から蔓が出ていた。
（一部しか出てないから活動は可能だという事だろうか。それよりも、どうやって悪魔の罠を使ってるんだろう。身体に寄生させているのか。この光景どこかで見た事があるような、たしか、箱の中の勇者が見せてくれたアニメだったような気がする。あれは、種の状態で持っておき魔力を注ぎ込んで一気に成長や変形をさせるものだったな。たしかレイガン！！）←違います

「種に魔力を注いで一気に育て上げたのでしょう」

「意味が分かりませんね」

「もしかして、身体に巻きつけているんですか？」

「ふふ」

（先生怖い・・・それでそんなにふくよかな身体をしているんだろうか。実はナイスバディのモデル体形か！！！）

「何か・・・」

「いえなんでもありません」

「では、授業に行きますよ」
そのまま、授業に連行された。

「カップを金に、カップを金に。あ～う～」

「まだやってるんですか、授業は終わりましたよ。何をうなってるんですか」

「この、昼でも活動する悪魔の罠に身体をイスに縛り付けられていてきついんですよ」

「逃げようとしなければ、きつくしまりませんよ」

「それはそうなんですけど。杖を握るだけで腕を締め上げるもんですから、腕も上げあげられないんですよ」

「それは、困りましたね。カップを金には変えられないようですね。

では、この紙に呪文をかけて動くようにしてみてください」

「マグゴナガル先生、話し聞いてました？」

「甘やかさないでとスプラウト先生にきつく言われているので、頑張ってください」

僕はため息をつき、懇親の力で腕を上げ、何とか呪文をかけた。

「噂どおり見事ですね。ロングボトムのいっていたとおりですね。今のは４年生の呪文です」

「先生、はめましたね」

「攻撃防御呪文に長けてると聞いたので、どのくらいの実力があるのか知りたかったので、金に変えるのはできないのに、攻撃に応用できるものはできるのですか？」

「一通りはできます。変身術だったら、ガーゴイル動かすのが限界ですが」

「そんな事まで・・・あれだけ過酷な訓練を受ければ当然ですね」

「？」

「ご両親から聞きました」

「そうですか。たしか先生も不死鳥の騎士団でしたね」

「不干渉だそうですね」

「はい」

「17歳未満なのですから当然ですね」

「不満そうですね」

「そんな事ありません。ただ、向こうにはつかないでほしいですね」

「今は、大丈夫ですよ」

「あなたは、ハリーポッターが敗れると思っているのですね」

「子どもに世界の命運を託す方が異常ですよ」

「異常？」

「不死鳥の騎士団の原動力ってハリーポッターあってこそですよね」

「そうですね」

「くだらないですね。ハリーポッターの為と言いながら、自分達の為じゃないですか。ハリーポッターが希望だ。ハリーポッターは英雄だ。そういって、彼をその運命に追いやり、自分達は三食満足な食事し暖かいベットで寝る。子どもを犠牲にする事でしか存続できない希望なんて捨ててしまえばいいんですよ」

「ハリーポッターは、もう成人です」

「先生、本当にそう思ってるんですか？ついこの間まであなたの生徒であり、本来なら今年も学生であるべき学生が世界の運命を託された大人だって言うんですか？」

「それは・・・」

「僕、聞きましたよ。

一年生の時、彼は、僕と同じ１１歳で蛇の人に立ち向かった。たしか、あなたは、彼らが助けを求めた時に追い払ったそうですね。

２年生の時、彼はバジリスクと戦ったそうですね。たしか、その時も、彼はあなたに、自分を信じてほしいと言ったそうですね。あなたは、自分には判断できないと言ったそうですね。

３年生の時、シリウスブラック逃亡時、あなたは、迂闊にもハリーポッターが隠れているときに、シリウスブラックがジェームスポッターを密告したと言ったそうですね。

４年生の時、学生のほとんど全てがハリーポッターに疑いの目を向けていた時、あなたは、苦しんでいる彼に救いの手を差し出さぬばかりか、自分のせいでセドリックディゴリーが死んだと思っている彼の側にいてやらなかったそうですね。

５年生の時、蛇の人に操られそうになって、疑心暗鬼になっている彼に、あなたは優しく接しましたか?あなたが、彼の心の拠り所になれたかもしれないのに。

６年生の時、彼は数々の危険な任務をさせられたそうですね。そして閉心術、あなたも教える事ができるのでは?もしくは、彼に優しく諭す事ができたのでは?彼が蛇の人に蝕まれていくのを黙ってみてたんですか」

「私は生徒を特別扱いは・・・」

「してるじゃないですか！学校ぐるみで、世界ぐるみで、彼が戦うのが当然だと、それが彼の運命だと！！」

「それは・・」

「7年生！！！今年彼は、今まで異常の危機に晒されています。あなたは、今まで彼に何もしてこなかった。いや、あなたは彼に絶望しか与えていない。今年もあなたは何もしないんですか。今年も17歳を迎えてばかりの彼に泥水を飲むような生活をし、私達の希望の為にその運命を全うしろ、そして戦って死ね。そう、言うんですか？」

「ハリーポッターが死ぬことなど」

「死にますよ。学生の年齢で魔法省を支配した、強大な敵に立ち向かって、勝てるわけあるわけないじゃないですか」

「ハッフルパフ30点げ・・・」

「減点しますか？良いですよ、僕はご立派なマグゴナガル先生に暴言を吐いたんですから。でも、間違いは認めませんよ。この世界は狂ってるんですから」

「あなたのご両親も含まれているのですよ」

「両親は好きですよ。でも、どうしてなんでしょうね、僕に戦いを教えたのわ。どうして不必要なほどの戦闘呪文と防御呪文、まるで、僕が戦いに参加する事が決まっているように準備させたんでしょうか。・・・僕の命よりハリーポッターの方が大事って事ですよね」

マグゴナガル先生は、何も言わず、杖を振って僕の身体から悪魔の罠を外した。

「・・・行きなさい」

僕はすぐにその場を後にした。マグゴナガル先生の顔をうかがう事はできなかったが杖を持つ手は震えていた気がした。

（言いすぎた。絶対言いすぎた。ホグワーツデのイライラとハリーさん万歳なパパとママ。僕に魔法をこれだけ教えたって事は、やっぱり僕にも戦えって事なんだよね。でも当り散らす事じゃなかったな）

「聞こえていたぞ」

「スネイプ先生・・・」

「我輩が保護呪文をかけなければ、学校中に聞かれていたぞ」

「別に聞かれたって・・・」

「あれでは、ハリーポッター擁護派か闇側にしか聞こえないが」

「・・・そういえば、先生、死食い人でしたよね」

「そうだが」

「・・・あの」

「校長室に来い」

（やばい、どうしよう。連れて行かれる。これが、地獄への一本道ってやつなの?不干渉決めてたのに、それでもこうなっちゃうの）

「セブルス・スネイプ、その子をどうするきですか?」

そこには、凛と立つマグゴナガル先生の姿があった。

（マグゴナガル先生！！）

「教授に失礼な態度をとったのだ罰則を与えるのは当然だと思うが」

「まさか、カロー兄弟に？」

「我輩が個人的に指導しようと思うのだが」

「その子を連れて行かせるわけにはいきません」

（マクゴナガル先生ーー！！あんなに酷い事、言ったのに、教師の鑑か！！こんな先生に迷惑かけるわけにはいかないな・・・）

「何を言って・・・」

「マクゴナガル先生、僕、大丈夫ですよ」

「何を言ってるんですか」

「校長室に行くだけですから、いざとなったら、ダンブルドアの肖像画もありますから、助けを呼びますよ」

「しかし！」

「先生、あなたは、あなたの信じている者のために生きてください。軌道に乗ってしまったのなら降ろす事はできません。それなら、軌道に乗せてしまった人達がそのために尽くすのがせめてもの罪滅ぼしです」

「・・・わかりました」

「・・・貴様達は何を言っているのだ。説教をするだけだ」

「「え？」」

「ははは・・・いざ行こう天の彼方、校長室へ」

「引っ張るな馬鹿者」

「恥ずかしいんですよ。いっこくも早く、この場から立ち去らなけ

れば」
マグゴナガル先生のほうを見ると、先生もかなりの速さ、いや俊足とも言える競歩でその場を後にしていた。

新入生の悪夢5（後書き）

もうじき、本編と合流します。本編では、しばらく相変わらず意味不明に騒いだ後、すごくシリアスになります。
本編でアレックスは主人公と攻守交替でツッコンでます。

追伸
作者はマクゴナガル先生が一番好きなキャラクターです。
また、ハッフルパフ寮のバスルームは創作です。アナグマとかを寮のシンボルにする人は尋常ではないマイペースに違いないと思っているわけです。だから、寮の中はきっと大変な事になっているはず。それにすら気がつかない、ハッフルパフ寮生なわけです。
妄想ですがハッフルパフ寮の人は気付かず大変な事をしているというイメージがあります。

「それで、貴様は、反省する気はあるのか？」

「ええ、もちろん。反省しています。ハリーさんなんて、糞虫、いや、英雄気取りの偽善者ですよ。まったく、もって、我が君にはかなうはずもありません」

「・・・貴様は馬鹿か」

「なんですとー。あっ・・・いえいえ、世界を制するのは我が君の御一派ですよ。とってもすばらしい」

「もう、良い。今は、そんな事を問題にしてはいない。下らぬ、能弁はしないでよい。それよりも、貴様のハリーポッターに関する考えが聞きたいのだ」

「クサレ、ハリーさんのですか？・・・どういった事をお聞きしたいのでしょうか？スネイプ校長先生様」

「貴様が、いうと嫌味にしか聞こえんな。正直に答えなければ、退学にすると思え」

「ええ!?退学にしてくれるんですか!!!本当ですね!約束ですよ!!嘘じゃありませんよね!!!!?」

「貴様は、退学になりたいのか。それより、そんな、嬉しそうに詰め寄るな、校長として、どう考えてよいかわからぬ」

「いやいや、とっとと退学にすれば良いんですよ」

「貴様の思い通りになどさせるか。いい加減に、ポッターについて話せ、でなければ、我が君に貴様のことを話すぞ」

「あっ!はい!わかりました。すぐに、ハリーポッターの事を話すので、それだけはご勘弁を!!」

「それで、貴様はハリーポッターが運命の上に死ぬといっていたな・・・何を知っている?」

(何を知っている?どういう意味だろう。返答を間違えるわけにはいかない。僕に、不死鳥の騎士団が持っている情報を教えろといっているんだろうか・・・しゃべる、しゃべらないにしても、関わりを持つ事になってしまうよ。ここは、探りを入れてみるしかないか)

「どうしたのだ。早く喋らぬか」

「僕に何をを聞きたいのですか?セブルス・スネイプ校長?ハリーポッターの未来の話ですか?それとも、過去?彼の生まれる前のことをですか?ああ、たしかハリーポッターの両親は、あなたの御学友でしたね?」

(反応した!?両親の話か。)

「彼の父親のジェームズポッターはあなたの天敵、母親のリリーポッターはあなたとは仲が良かったそうですね?」

(え?何か、悲しそう。っていうか、顔に出すぎだろ。閉心術はどうした。ここは、コールドリーディングでも試すか)

「あなたは、リリーポッターに事を好きでしたね」

(これなら、友としても、愛としても、どっちともとれる)

「・・・」

(おい。愛か、愛なのか。っていうか今もか?もし、今もなら、たいしたストーカーだよ。もう死んでんでしょ。その、一人息子のハリーポッターのことをしつこく聞いてくる。なおかつ、この人は、蛇の人の軍勢。そして、二重スパイとして活動していた。まさか・・・いや、まだ早計だ。確かめなくては)

「リリーポッターの息子であるハリーポッターは、今年中に死にますね」

「！！？」

（うわー・・・もう、この人完璧にハリーさん側だよ）

「あなた、まさか・・・」

「な、なんだ」

（どうようしている。間違いない）

「あなたは、ハリーポッターをリリーポッターの代わりにしようとしている！！」

「！！！」

（おい、マジか。マジなのか。マジで正太郎さんコンプレックスか。ハリーさん南―無。この人に引き取られていたら、うん。間違いなく、児童保護だね。っていうか、もう絶対あれだよね。好きな人を虐めたくなっちゃう精神で闇の軍勢に着いたんだよね。どんだけ、この人子どもなの。それで、ハリーさんピンチになったら、颯爽と駆けつけて何事もなかったように助太刀するんだろうね。これで、ハリーポッターの心は我のものだとか思っちゃうんでしょ。中二、

中二、中二病だ。）

「貴様、閉心術を解け」

『何でですか』

「その目は何だ。人のことを薄目でできるだけ視認したくないと言わんばかりの態度は、貴様が何を考えているのか覗かせてもらおう」

『やめろ、変態』

「誰が変態だ」

『・・・』

無言で指を刺すと、変態さんが机の上にあるものを投げつけてくる。

（これだから、中二は・・・）

そのとき、突然、扉が開き、頭からマントを被った、黒ずくめの何者かがなだれ込んできた。

「急ぐんだ、行くぞ」

「ちょ、待って」

「時間がない！急ぐんだ」

「そんな、黒ずくめの人に言われても」

黒ずくめの人たちは、僕を肩に担ぐと、部屋から出て行った。

一方、部屋に残されたセブルス・スネイプは呟いた

「何故、ダンブルドアとの計画を知っているんだ。アレックス・クープ、やつはどこまで知っているのだ」

「あの、降ろしてください」

（やばい、吐きそう）

「もうすぐだから」

僕は、どこかで聞いた声だなと思いながら、必死で嘔吐感と戦った。

「着いたぞ」

そういって、肩から僕を下ろした。僕は、深呼吸をして嘔吐感を和らげた。

「危なかったな」

そう、僕に話しかけてくる、黒ずくめは、頭からマントを取った。

「ロングボトムさん。いったいどういうことですか？」

「君が、スネイプに連れて行かれるのをジニーが見たんだ」

「ジニー先輩？」

「ジネブラ・ウィーズリーよ。ジニーって呼んでね」

「ルーナよ」

そう言って、二人は手を差し出した。

（女子だ。めんこい女子だ。綺麗すぎる。握手して良いのかな？手汗かいてるし、拭けば良いか）

「ネビルの言った通り、協力的じゃないのね」

二人は手を引いた。

（しまった、色々考えていたら、勘違いされた）

「あの、えっと」

「ああ、お礼は良いよ。君が闇側についたら、大変だし、ホグワーツの生徒を守る事もＤＡの仕事だからね」

３人は、自慢げに頷いた。

（うさんくせー、やっぱり、顔は綺麗でも残念な人たちだ。先輩なんて言って損した。さんだ、さん、ウィーズリーさん、ラフグットさん。うん、決定だ）

「ありがとうございました。それでは、さようなら」

「ちょっと待って」

「まだ、何かあるんですか？」

「君に聞きたい事があるんだ」

「聞きたいこと？」

「校長室の合言葉を聞いたでしょ？それを教えてほしいの」

「校長室の合言葉ですか・・・」

「そう、お願い。合言葉がないと校長室に入れないの」

（ウィーズリーさん可愛いな。やっぱお姉さんは良いです。実に良い。あれ、うん？校長室に入れない？）

「さっきは、どうやって入ったんですか？」

「「え？」」

「えって・・・さっき校長室に入ってきたじゃないですか」

「あー、どうしたんだっけ？」

「私が言ったんだよ」

「ルーナ？！何で合言葉知ってるんだ？」

「スネイプに連れて行かれるのつけてたから、その時、聞いたんだよ」

「あー、うん、そうか」

「そ、そうね。これで、校長室に入れるから、うん、大丈夫ね。それで、合言葉は何だったの？」

「リア充爆殺」

「どういう意味だ？」

「さあ、でもきっとスネイプの事だから、酷い言葉に決まっている

わ」

「僕、もう帰りますね」

そう言って、走って、逃げ出した。

（意味・・・校長先生、かなり引きずってるんだな。でも、それで、正太郎さんコンプレックスにはしられてもね。ハリーさん、残念無念また来週。勝っても負けても地獄です。っていうか誰が教えたんだろう、教えた人ナイスです）

新入生の悪夢６（後書き）

スネイプ先生はアレックスの知っている情報を勘違いしています。スネイプ先生に合言葉を教えたのはもちろん、本編の主人公です。

新人生の悪夢7（前書き）

お知らせ

番外編の最下部に本編でアレックスと本編の主人公が出会うまでのアレックス視点を乗せておきます。
本編はしばらく意味分からない事しているので、読み飛ばせるようにすしときます。一様、伏線があるのでできれば読んでほしいですが、本編がシリアスになるまでは、ついていけない人がいると思うので

新入生の悪夢7

「クープ様！クープ様！」

「どうしたのさドビー」

「今日は、特製のシチューを作りました！」

「え？本当に！？僕はシチューが大好きなんだ。何のシチュー？」

「ビーフシチューでございます」

「やった！一番好きなシチューだ。ドビー大好き」

そう言って、ドビーに抱きついた。

「クープ様！服が汚れてしまいます」

「良いの良いの。ドビーたち屋敷しもべ妖精が汚れてるのは、頑張って仕事してるあかしなんだから、とっても綺麗な汚れなんだよ」

「綺麗な汚れでございますか？」

「そうだよ！とっても綺麗な汚れさ」

「嬉しゅうございます」

ドビーはそう言って、ピョンピョンと飛び跳ねた。

「ドビーがホグワーツにいてよかった。ドビーがいなかったら、心の支えがなくて、きっと寂しくてロングボトムさんに擦り寄っていたかもしれない」

そのとき、とても低い地の底からするような声がした。

「ハリー様の見方をしないものめ」

「誰？」

「クリーチャーめです」

「ああ、クリーチャーね。今はハリーさんＬＯＶＥになったんだってね」

「ハリー様は、ご主人様です。ハリー様に見方しないものめ」

「クープ様、怒らないであげてほしいのです。クリーチャーはハリーポッターにおつかえできなくて寂しいのでございます」

「怒らないよ。ご主人様が地べた這いずり回ってるのに、他の人に仕えなきゃいけないなんて、クリーチャーにとってみたら嫌な事だもんね」

「クリーチャーは、今日のシチューのジャガイモを切りました。ドビーと二人でシチューを作りました」

「うわ！嬉しいな。クリーチャー、ありがとう」

「ハリー様の敵がクリーチャーに抱きついている」

「別に敵じゃないよ」

「見方か」

「それも違うけど」

「離れろ」

「いちよう、僕も純潔なんだけどな」

「家名は」

「クープだよ」

「クープ家の者か。だが、魔法使いはこんな恥知らずな事をしてはならない」

「良いじゃないか。嬉しい時は嬉しいんだよ」

「恥知らずな魔法使い」

「ドビーめは嬉しゅうございました。クープ様、シチューがさめてしまいました。温めなおします」

「あっ、忘れてた。あれ?でも、そんなに冷めてないよ」

「クリーチャーめが温める」

そういって、クリーチャーは、どこかに行った。

「クリーチャーめも嬉しいのでございます」

（ツンデレ妖精も何か良いね）

シチューを待つ間、パンを食べて過ごした。

「ドビー、このパンは、ここで作っているの？」

「はい。そうでございます。お気に召しましたでしょうか？」

「とっても美味しいよ。ライ麦パンだよね？」

「そうでございます」

「今度レシピを教えてくれない？」

「わかりました。レシピを書いておきます」

「おねがいね」

「クリーチャーめがシチューを温めた」

笑顔で言うとクリーチャーはフンッとそっぽを向いた。

（本当にツンデレなのこれ？）

「ありがとう。クリーチャー」

「シチュー・・・信じられないくらい美味しいんだけど」

「クリーチャーめがクープ様の為に6時間煮込みました」

「そんなに！？本当に嬉しいな。しもべ妖精の鏡だね」

「クリーチャーは、その間、野菜を切り続けた」

「ええ！？すごいな。疲れたでしょう。二人とも頭が下がるよ」

「魔法使いが頭を下げてはいけない」

「それにしてもほんとに美味しいな」

お代わりあるかな、そんな事を思っていたとき、突然、厨房の扉が開いた。

「やばかったな」

「ああ本当にな」

（どうして、フィネガンさんとロングボトムさんが入って来るんだ）

「あっ！お前は！！」

「どうもです」

「シェーマス、ほっときなよ。アレックスは多分大丈夫だよ」

「名前名乗ってないはずなんですけど」

「有名だからね。姿を見せない実力者としてね」

「なんですかそれは？」

「授業にほとんど現れないのに、魔法レベルは7年生並みって噂になってるよ」

「誰が噂流してるんですか・・・」

「主にスプラウト先生とＤＡのメンバーかな」

「ＤＡの人は諦めます。どうしてスプラウト先生が噂を流すんですか？」

「噂流さなきゃ、授業の成績を貰えないからじゃないかな。先生方が興味を持って、テストする順番決めてるらしいよ。ああ、変身術の評価は有名だよ」

「意味わからないですね」

「しょうがないでしょ。サボるんだから」

「あら、ネビルまた、怪我が増えたわね」

「ジニー、君も来たんだ」

（ウィーズリーさんまで来るとわ）

「怪我が増えてるね。階段で転んだの？」

（うわー、ラフグットさんもか）

「今日は、ここでＤＡの集まりでもあるんですか？」

「ＤＡの集まりのために食べ物をもらいに来たんだよ」

「そうですか」

（あの、怪我は闇の魔術かな？何か痛そうだな）

「ああ、この怪我かい？アミカスカローにやられたんだ。一年生に磔の呪をかけようとしていたからね。止めたんだよ」

（偽善者も行き過ぎると、ドＭになるんだな）

「心配しなくて良いよ。名誉の勲章さ」

（うぜー）

「あれ、何食べてるんだ？」

（フィネガンさんか、見ればわかるだろうに）

「シチューですよ」

「とってもおいしそうね」

「良い匂いがするね」

「あー・・・食べますか？」

「食べようかみんな」

「ドビー・・・まだある？」

「はい、ございます」

「じゃあ、おねがい」

（僕もまだ、食べてる最中だしな。まぁおいしいものを好きなやつに悪いやつはいないか）

しばらくするとドビーたちが食事を運んできた。

「美味しいね」

「ほんとに美味しい」

「しわしわずのスノーカックにも食べさせてあげたい」

「ルーナ、また、変な事いってるよ」

（しわしわずのスノーカックって何だよ）

「痛て、しみるなー。味が良く分からないや」

（なんだと！こんなに美味しいものを食べて味がわからないだと。ああ、ドビーそんなに申し訳なさそうな顔しないでよ）

「大丈夫ネビル？」

「カローがまだ探してるから、マダムポンプーリのところに行けないしな」

「血の味がするの？」

（血の味だと？このデミグラスソースに、そんな味を混ぜるな）

「あーしみるな。しみない食べ物にすればよかった」

「そうね、変えてもらう？」

「それが良いよネビル」

「痛いのは我慢しちゃ駄目だよ」

「そうだね」

（なんだと！僕のために一生懸命作ってくれたものを横取りしておいてよくもぬけぬけと言ってくれる。それに、そんなこと言ったらドビーが自分を罰しちゃうじゃないか！）

「ロングボトムさん！！ドビーたちが６時間かけて一生懸命作ったものに、何てこと言うんですか。食への感謝は無いんですか」

「6時間!?」

「そうですよ。一生懸命作ったんですよ」

「そんな事、言ったって痛いんだからしょうがないだろ」

「もう良いです。ロングボトムさん傷を見せてください」

つかつかと、ロングボトムさんの前まで行き言った。

「何言って」

「黙っててください。ほら、口開けて」

傷の状態とかけられた呪文を推測すると杖を取り出した。そして、無言呪文で呪文解除と傷を治す呪文を唱えた。

「終わりました」

「え?」

「もう痛くないはずですけど」

「本当だ」

「どうしてヒーラーの呪文ができるの？」

「練習したからですよウィーズリーさん」

「そんなに簡単にできる事じゃないだろ」

今度はフィネガンさんが聞いてきた。

「母がヒーラーだったんですよ」

「それでもすごいね」

「やっぱり君、ＤＡに入りなよ」

「お断りしたはずですよロングボトムさん」

「じゃあ、せめて呪文を教えてくれない？教えてくれたら助かるんだもん」

「一年生に呪文習ってるようで、ＤＡなんて存続できるんですか？」

「なんだと！」

「落ち着いてシェーマス」

「ねえ、その呪文があると助かるんだけどな」

「図書館にでも行って、自分で調べてくださいよ。それに、応急処置くらいできないんですか？」

「ＤＡは戦闘が専門だからね」

「ハナハッカくらい持っててくださいよ。怪我する事前提で戦闘しないでどうするんですか」

「言い返せないね・・・」

「それに、僕の呪文だって、ヒーラーの真似事ですから、応急的なものですよ」

「それでも良いんだ。教えてくれない？」

「しつこいですね。僕に教えるメリットが無いんですよ。何で教えなくちゃいけないんですか」

「教えてくれたら、君を守ってあげる」

「必要ありません」

（この人たち、ほんとに偽善者だな。こういう時には、身の安全を取引材料にするなんて。大体、パパとママから呪文以外にもベゾアール石にマンドレイク、フェリックス・フェリシス、それにえら昆布とか色々持たされてるから必要ないんだよね）

「私達、あなたの事が心配なのよ」

「心配する必要ないですよ」

「あなたが、それなりにできる事はわかってるけど、それでも死食い人に狙われたら危ないわ」

「どうして、僕が死食い人に狙われるんですか」

「あなたの両親、不死鳥の騎士団でしょ？」

「それが？」

「あなた、人質にされるわよ」

「人質・・・」

「そうよ。私達も、もうすぐ潜伏するわ」

「そういえば、ネビルのおばあさんは、うまく逃げれたみたいね」

「おばあちゃんは、大丈夫だけど・・・」

「ディーンも捕まったみたいだしね・・・」

「心配ね」

「ディーンならきっと大丈夫だよ」

「とっとと国外に逃げれば良かったんですよ」

「は？」

「国外に逃げれば良いって言ったんですよ。イギリスになんて潜伏しているから捕まるんですよ」

「なんだと！ディーンはハリーと共に戦う為に残ったんだぞ」

「また、ハリーさんですか。もう良いです。帰ります」

「お前、あんな事言っておいて唯で帰れると思うなよ」

「やめなよ、シェーマス、一年生だよ」

「ディーンを馬鹿にされて黙っていられるか。お前、この前みたいに逃げられると思うなよ」

「ハリーさんとかのために意味わかんない事してるからですよ。だから、みんな死ぬんですよ」

（全員が怒りの表情を見せた、頭に血が上ったやつとのが逃げやすいんだよ）

そう思って、ルーモスを一瞬だけ最大限発光させた。まばゆい光で相手は僕を見失う。

「オブスクーロ、フィニート」

（さすが、歴戦の猛者ウィーズリーさん。ならば！）

「エイビス、オパグノ。エイビス、エンゴーシオ、オパグノ」

（二段攻撃だ。どうする？）

「エクスパルソ」

（爆風で全部やったか。判断が早いな。それに、呪文対策は、ウィーズリーさんとラフグットさんが、攻撃はロングボトムさんとフィネガンさんと見た。陣形もチームワークも凄くうまいな。戦いなれてるんだな）

「インカーセラス、オブスクロー、エンゴーシオ、ジェミニオ」

（目隠しと縛りの二段だ、それに、巨大化したから、視認もできないはず。そしてつみだ。ジェミニオ、ディシリューション、プロテゴトタラム）

「「インセンディオ」」

（二重できたか。だがもう遅い）

「もう観念したらどうなの？」

「・・・」

「何とか言え」

「・・・」

「何かおかしいんだもん」

「・・・」

「インカーセラス」

「・・・」

「やられた・・・」

「どういうことだよ」

「呪文を言ってたのは伏線で無言呪文で自分の分身を作って目くらましを使ったんだよ」

「頭の良い子ね」

「だけど、厨房の扉は開いてないだろ?まだ、近くにいるはずじゃないか」

「姿が見えない状態で私達に攻撃してこないのよ。姿を見失った時点で、私達の負けよ。４対１だったわけだしね」

「だけど、こんな卑怯な手で諦められるか」

「魔法の応用がうまいのね。本気の戦いだったらやられていたわ」

「今だって、杖をあげたら、魔法を放ってくるはずだもん。確実に一人はやられるよ」

「ああ、そうとう実践訓練をつんだんだろうな、僕らみたいな練習じゃなくて、本当の戦いの実戦形式の訓練だったんだろう」

「くそ！」

そう言って、部屋を出て行った。

「ふう、あぶなかった。ディフィンド」

「危険な賭けでしたね」

「黙っててくれてありがとうね」

「最初から、ご自分を消して逃げればよろしいものを、どうして、自分が分身のふりを？攻撃呪文だったら大変でした」

「まあね、いちようプロテゴ使っといたからね。プロテゴのも目く

らましかけたしね。なんかあの人たちだったら、自分の分身と入れ替わるだけだったらバレちゃいそうだったからさ。怪我させるような事はしないだろうって思ったら何か悪戯したくなってね」

「あのように、恐ろしい賭け事は、もうおやめ下さい。アレックス様にご飯を作れなくなってしまいます」

「ありがとう。もうしないよ。それで、悪いんだけど、ドビー、僕をハッフルパフまで送ってくれない？外でまた会ったら今度は逃げられそうにないから。ほとほりが冷めるまで隠れてたいんだ」

「わかりました。唯ひとつ言っておきますがドビーめもハリーポッターのために命をかけます」

「悪かったよ。さっきのは逃げ出す為に仕方なくいったんだよ」

「そうでしょうとも。あれではまるで敵対派のようでしたから」

「悪かったって」

ポンッと音がして、ハッフルパフに向かった。

以下本編でアレックスと主人公が出会うまでです。

その日の夕食時、とても変なテンションの、わけの分からない人が現れた。

とても、残念な方としか説明できないけど、その人が出した、料理はとても美味しかった。

すき焼きという料理らしい。

変人さんは、どこの寮でも自由に出入りするらしい。どうも、生徒という扱いではないようだ。

どこの寮でも出入り自由なのに、ハッフルパフに出入りする事が多いようだ。

どうも、どの寮でも彼についていけないらしく、ハッフルパフの誰が来てもマイペースを貫くハッフルパフの寮風が格好の標的にされ、

押し付けられた。

ある朝、起きると何故だか、僕のベットで彼が寝ていて、少し焦った。とうとう、僕は落ちるところまで落ちたかと思ったが、彼からお酒の匂いがしたので、きっと酔って間違ったんだろうと思う事にした。

また、ある日の昼、何かと僕に話しかけてくるしつこいロングボトムさんをあしらっていると、トイレからものすごい音と共に、彼が飛び出してきた。その後から、憤怒のオーラをまとった、ラフグットさんが出てきて次の一撃を放とうとかまえた。

ロングボトムさんが、それを止めて、名無しの変人さんに駆け寄ると、わが生涯に一片の悔い無しとすばらしい言葉を呟いた。ラッキースケベだと言っておいた。

その日の夜も、夜食を食べにキッチンに向かうと、名無しの変人が今だ横たわっていた。
死んでるんだろうか?そんな事を思っていると、何か良く分からない事を言いながら、置きだした。

新入生の悪夢7（後書き）

気付けば、こんな時間に、明日（今日）は7時に起きなければいけないのに・・・
電車で寝てしまう。

お知らせです
しばらくしたら、本編再開します。
あの、もしかしてアレックスの話のが良いんでしょうか？
アレックスの話になってから、見に来てくれる人が多くなったような気がするんですが・・・
本編の主人公も、そのうちどうにかなるので生暖かい目で見守ってくれると嬉しいんですが

まさか、アレックスが主人公じゃなくなったら、見に来なくなるとか・・・止めてくださいよ・・・まさかね・・・

アレックスと主人公のからみが多いので楽しんでいただければ良いんですが・・・

ホグワーツ強行編入　本編再開（前書き）

本編再開しました。

ホグワーツ強行編入　本編再開

ホグワーツに行こうと思い立ち、現在、ホグワーツにいます。

「貴様、何をしている」

「お茶飲んでるんだけど。飲む？緑茶」

「何故ここにいるのだ」

とか良いながらお茶飲んでる。

「暇だったから来たの」

「この子は誰かのセブルス？」

「あっ！生ダンブルドア」

「生ではないの、肖像画じゃし」

「この子は・・・なんだか良く分からない子です」

「その言い方ないでしょ！」

「フォフォフォ。君は敵か味方か・・・はたまた何かな？」

「どっちかというと味方かな。だけど、誰も死なせる気はないから」

「ヴォルデモートもかの？」

「・・・」

「よいよい。悩めば宜しい」

「スネピー！お願いがある」

「何だ？」

「しばらく、ここにおいて」

「ホグワーツにか！？」

「よろしい！」

「校長！！」

「もう校長は君じゃよスネイプ校長」

「わかりました。では、君を生徒にしよう」

「本日よりホグワーツで御世話になります。山田太郎です。もちろん偽名」

右から左へ教師人も、生徒もぽかんと口を開けている中、ヘラヘラと笑顔でいた。

「あ～、うむ。この者に組み分け帽は不要だ。好きな時に好きな場所で寝る事になった。みな、存分に注意して対応するように」

わしの出番は！！！！というような古びて乾燥した燃えやすいような声が聞こえたが誰も聞かなかったことにして食事を続けた。

「へっへ～い！！！今日はグリフィンドール～」

声と共に席にねじ込むと、どこかでドスンという音と共に「ぎゃーフォークが刺さったー」という声が聞こえ、ねじ込んだ席の隣の生徒はそちらを向くが「どうかした？」という声が聞こえたと共に自然と食事を取り始めた。

「イギリスの食事って、焼いただけって本当だったんだね。あ～脂っこい！！！」

そう言いながら、少年は手を振って、何かをしだした。

少年が何かをしだすと廻りの数人が、興味深そうに頭を上げ何をしているのか見ようと体を乗り出した。

それに気付いた少年が

「うん？料理だよ。食べる？」

そう言って、テーブルの上に鍋を乗せた。

廻りの数人が見つめる中、少年は「すき焼きだよ」

そう言って、鍋から自分のさらに料理を取り分けた。

「やっぱ和食は美味しいな～。食べたかったら食べて」

どうやら、各寮のテーブルにも同じ物があるようで、他の寮の生徒も突然現れた料理に不思議そうにしていた。ハッフルパフからすき焼きヤバ旨!!と叫ぶ声がしてどうやら安全らしいと思い、教師人を見ると、同じような鍋を食べているようなので、安心して他の生徒も手を出した。

ホグワーツ抵抗組み（前書き）

注意
この小説はルーナさんキャラ崩壊します。

ホグワーツ抵抗組み

食事が終わり、ホグワーツのあちらこちらを見上げながら堪能している時だった。

突然、手が伸びてきて、ヒュっと体を掴み引き寄せた。

「何がしたいんだ?」

顔を見ると傷だらけの少年がこちらを睨む様に見ていた。

「ネビルやめて」

見覚えのある顔があった。よく見ればジニーだった。

息につまり振りほどこうとしていると少女が行った。

「自分の知ってることなんて少ないんだもん。知ってることを、考えるんだもん」

そう言って少女が少年の掴んでる手を握ると、呼吸ができるようになった。

「目的は?」

呼吸を整えながらネビルという少年に聞かれ、応えた。

「最善の未来の為」

「どういう意味？」

「ハリーを殺すつもりはないよ」

すこし考えてから、ネビルが応えた。

「ついてきて。君の真実を見分ける。それで良いだろう？ジニー、ルーナ？」

そう言って、少女達は同意した。

3人に伴って歩いていくと、身の丈三つ分以上もある大きな扉の前で3人は止まり入った。
中に入ると、部屋の中央に大きな鏡が置いてあった。

「これは？みぞの鏡？」

「良く知ってるわね。もちろんどういうものかは知ってるわよね？」

「自分の望みが写るんでしょ？」

「そうだよ。でもちょっと違うんだもん」

「何が？」

「みぞに鏡には、自分の一番幸せな姿が写るんだ。この、みぞの鏡は特殊で、廻りの人間にも何が写っているか見えるんだ」

「ふ～ん。って事は、もしかしてここが必要の部屋？」

「そうよ。でもどうして分かったの？」

「みぞの鏡って、レア物でしょ？それが、生徒が簡単に入れるところに置いて置くわけないから、必要の部屋に願ったんじゃないのかなって思ったんだ」

そう言いながら、鏡の前に促がされた。鏡に映し出されるものが現れると、３人が小さな叫び声をあげた。

鏡には、まずヴォルデモートが写り、続いてはハリーが写った。

その横や後ろに、これまで、あってきた人皆が写り、皆が笑顔でいるのだ。

一番驚いたのが、ハリーとヴォルデモートが手をつないでいること

だった。

「どういうこと？」

「意味が分からないわ」

「これって、和平って事だと思うもん」

3人の目が小さな少年に集まった。

「そうだよ。これが、僕の幸せだよ」

黙ったままの3人を満面の笑みで見返すとネビルが口を開いた。

「なんていうか」

「予想外ね。敵か味方か見分けようとしたのに、全員救済いって」

「素敵なことだもん。でも傲慢な神様気取りだもん」

「ルーナさん。天然毒舌ってすばらしいですね。もっとキャラ崩壊させてくださいよ。天然腹黒プリーズ」

「ぶっ殺されたいのかもん?」

笑顔で見詰め合う二人に若干引き気味にジニーが呟いた。

「二人ともキャラ違う・・・」

3人は気付いていなかったが、みぞの鏡には少年の姿はなかった。

ホグワーツ抵抗組み（後書き）

この先もルーナさんはキャラ崩壊します。
そして、ルーナさんには、もんって言わせとけばいいかという作者の怠惰があります。すみません。

おはようございます。そして、買い物へ

「おはようマグゴナガル先生」

「ええ、おはようございます。ところで、どうして朝起きたらあなたが私のベットの枕元でクッキーを食べているんですか？」

「ハッフルパフで起きたんですけど、お腹へって。だけど朝食には時間があるし、厨房はきっと朝食の準備で忙しいだろうから、そうだマグゴナガル先生に部屋に行こうって」

「意味のわからない思考回路ですね」

「そうそう、ハリーたちは元気だったよ」

「！！？」

ガバッっと布団が勢い良く持ち上げて驚愕の表情を見せた。

「え？どうしたの先生」

「ハリーポッターは今どこに？いえ、それより危険に巻き込まれて

はいませんか？」

「危険？彼らはいつも危険だと思うけど、彼らはグリフィンドールだから」

「それもそうですね。元気ならとても良い知らせです」

「あー！！！しまった！！！！」

「どうしたんですか！？ハリーポッター達に何かあったんですか！？」

「殺される～！！」

「まさか！急いで不死鳥の騎士団に連絡を取らなくては」

「ご飯届ける約束を忘れてた！！！」

「はい？」

杖を振りかけた腕を止めマグゴナガルが声を出した。

「急いで届けなきゃ本気で殺される」

突然走り出す少年を見ながらマグゴナガルの思考回路は停止してしまった。

走り出した少年の先には窓があった。

「とうっ」

そう言って、窓に向かってスーパーマンのごとく飛び窓を突き破った。

「痛いー！ガラスが突き刺さったー！！！」

そう言いながら落下していく少年その声がぷつりと止んだ。

マグゴナガルはしばらくのあいだ窓を見つめた後、杖をふり窓を直した。

「朝食でも食べ行くとしますか」

ドスン

「ぎりぎりセーフ」

フウッと額を拭う。

「君って子は何してるのかな」

「え？」

「あっリーマスさん。もしかして、その手に持っているのはパン？」

「ああそうだが。それより」

「お腹減った」

「・・・わかった。ご飯を食べようか」

「わーい」

「はぁ。とりあえずテーブルから降りて」

こっちに移動した時にテーブルの上に着地した様だった

テーブルの上の朝食は形をなしていない。

「ああ！！！僕の朝食が！」

「君のじゃないよ。私の朝食だよ。また作れば良いさ」

「じゃあ僕も作る」

キッチンに向かったリーマスについて行った。

「君は今、何してるの？」

「卵割ってる」

「そうじゃなくて、今までどこにいたの？」

「さっきまでホグワーツにいたよ」

「そう・・・なんで？」

「戦うなら地理覚えておいたほうがいいかなって思って」

「戦う？」

「え？」

「うん？」

「リーマスさん。ベーコン焦げるよ」

「ああ」

炒める手を再開しだす。

「それで？」

冷や汗だらだらの少年に、笑顔でにっこりしてくるリーマス。

「ごめんなさい。言えない」

「まあ、分かってたよ。卵焼こうか」

「うん。ありがとう」

「ところで、君はこれからどうするんだい？」

「ハリーたちに届け物をする予定」

「居場所を知ってるのか！？」

「知ってるっていうか行けるよ」

「私も連れて行ってくれ」

「だめ」

「なぜだ？」

「そのうち会う時は来るよ」

「予言かい？」

「そんなところ。お腹すいた、早くご飯食べよ」

「そうだね」

朝食を食べ終えて、大型スーパーに買い物に来ていた。

「ここが、マグルのスーパーというものなのかい？」

「そうだよ」

「ずいぶんたくさんの物が並んでるんだね。それで何を買うんだい

？」

「レトルト食品。売り場はあっちだね」

大きなスーパーは迷路のようで、迷ってしまいそうだった。

「あれ？売り場が分からなくなっちゃった。店員さ～ん」

「どうしたの僕？お父さんと買い物？」

リーマスは東洋人親子だと間違われたのに、不思議に思いふと少年のほうを見ると姿がリーマスを小さくしたような容姿になっていた。

「え？どうなって」

「この方が良いかと思って、それにリーマスさんが買い物についてきてくれたからサービスサービス」

「まったく君という子は」

レトルト食品売り場に案内されながらリーマスは、自分の子どもの

ような容姿をした子どもに微笑ましさを感じずに入られなかった。

「これだこれだ。とりあえず、さ○うのご飯さんにカレーさん、粉末のコーンスープに」

どんどんとかごが一杯になっていき、次は冷凍食品だ、次はカップメンだ、次は真空パックだと言いながらカートが三つにもなってしまった。

レジに行くと店員も衝撃的な顔で見て急いで他の店員も駆けつけた。

値段はリーマスの食費の一年分にはなるだろう値段になっていた。

衝撃を受けたリーマスだったが、それを事も無げにカードを渡して素通りしてしまった事にも驚いた。

「今のは？」

「え？う～んなんていうんだろう。銀行に入っているお金をカードを使って後払いするみたいなものかな」

「マグルの世界は不思議だね」

「そっくりそのまま返すよ」

「お腹すいたね。もうお昼の時間だ」

「ほんとだ。もうこんな時間だね。リーマスさんと一緒にいると時間が流れるの早いや」

「この近くに美味い店があるんだ」

「へ～マグルの店を知ってるなんて意外だね」

「・・・うん・・・まあね」

どうしたんだろうと思いながら荷物に魔法をかけ、重さをなくし道を進むと、あったのは

マックドナルド・・・。

リーマスは何も言わず入り、店員に親しげに「やぁ」と言い、なれた雰囲気で注文を済ませた。それに続き注文を済ませると席に着いた。

リーマスはじっと射殺すものがあるかのように一転を見つめていた。ビームでも出るのかと感じたほどだ。

何を見ているのかと思えばゴミ箱を見ていて、不思議に思っていると突然立ち上がった。

「お客様、トレーはこちらです　氷はこちらに流してください」そう言って席に戻ってきた。

「・・・リーマスさん?」

「聞かないでくれ」

バイトか?と小さな声で言うとリーマスはグゥと一声上げ、ハンバーガーを口にした。

いざ、救いの食事を届けに・・・何故か瀕死の重態

「ちわ～来来軒です。出前届けに参りました」

「・・・君か」

「暗!!どうしたのさ」

「ロンが出て行ってしまったんだ」

ハリーがそう言うと、ハーマイオーニは俯いて啜り泣きを始めた。

「え?ホークラックスは封じたよね?」

「君が言っただろ、平常心を保てるかどうかだって。まともなご飯が食べれてなくて、イライラしてたんだ。そこに漬け込まれたんだと思う」

「腹減ったから喧嘩したの?」

「まあ・・・」

「一足遅かったか」

そういって、大量のレトルト食品をドサっと置いた。

「それは？」

「レトルト食品・・・」

ハリーのジト目でこちらを見る。ハーマイオニーは般若の形相をしている。

正直言って怖い。

「あ～う～ん・・・ご、ごめんなさい」

秘儀、猛虎落地勢を披露し、その場を取り繕った。

持ってきたシチューの元を使い、料理を振舞った。言うまでもなく、たった一人で料理を作った。

「おいしいね」

「ロンも、これさえあれば一緒にいられたのに」

「う〜」

罪悪感をあおる手腕さすがですと言いたくなるくらい、上乗せダメージを浴びせてくるハーマイオーニーに見事と思い、心の中にメモしたことは、墓まで持っていこうと誓った。

「君、どうしてるの？」

「ホグワーツにいるよ」

二人が盛大に噴出した。

「何で？」

「そうだホグワーツに行こう的な？」

「何で疑問系！それに意味分からないよ」

「学校の皆はどうしてるの？」

「元気だよ」

「ジニーは？」

「元気だったよ」

「あなたよくホグワーツにいられるわね。スネイプが今校長でしょ？」

「説得したよ」

「説得って」

「何でもありすぎて、逆に引くわ」

「そうそう、これ」

「そういえば、リーマスさんにも会ったよ。こっちに来たがってたよ」

「リーマスが？どうして？」

「まぁそのうち分かるよ。じゃあ僕は帰るからね。バイチャ」

少年が帰った後、二人がため息をついたのは言うまでもない。

現れた瞬間、盛大にぶん殴られた。

確か、ルーナの天然毒舌を味わおうとして、ルーナの魔力のところに飛んできたんだけど、あっ、空が回ってる、あんなところにダンブルドア先生がいる。やっほー。そんな事を思っているとルーナの声がした。

「何してるんだもん？」

「ルーナさんの魔力のところに飛んだんだ」

「ここどこだか分かるもん？」

周りを見回すと、壁、壁、壁、何かの個室？あれはトイレットペーパー、ルーナさんが個室に入ってる。

どこですかここは、僕はだれですか。

「女子トイレじゃ、ボケー！！！」

「ルーナさん口ちょ！！」口調と言いかけたところで、盛大に吹っ飛ばされました。ちなみに壁ぶち抜きました。

あっあんなところに、シリウスさんが、あっちにはハリーに激似のジェームズさんが二人がグッドのポーズをして言った。

「そういう時は我が生涯に一片の悔い無しというんだよ」

突然、体が揺り動かされ、また現実に引き戻された。

「大丈夫？口から血でてるけど」

ネビルさんが顔を覗き込みながら、聞いてくる。

「わが生涯に一片の悔い無し」

ラッキースケベだ。そんな声が聞こえた気がした。

いざ、救いの食事を届けに・・・何故か瀕死の重態（後書き）

ルーナは、主人公が嫌いです。彼女って原作でもけっこう毒舌ですよね。

今ホグワーツ決戦を書いている最中なんですが・・・
ハリーポッターたちって貝殻の家にどのくらいいたんですかね。一週間以上は滞在してますよね。グリンゴッツ襲撃からホグワーツ決戦までって、2日くらいですかね。
原作の記憶がおぼろげです。

あっ、ちょっとしたアイディアなんですが、原作とはかけ離れた話って大丈夫ですか。ホグワーツで決戦のみ原作と一緒なんですが・・・こんな、話を書いといて今更ですが

残念な人と無念な人　　アレックス登場

「知らない天井だ」

目を覚ますと医務室に・・・違った。床が冷たい。どうやら廊下に放置されているようだ。

「酷い。酷すぎる」

周りに赤いコーンが置かれていて、『このもの変態につき。動かすな。触れた者、処刑』
そう書かれていた。

某、動物が通っている小学校の、頬に靴下を詰めている熊の台詞が浮かんだが、言わないでおいた。

「何してるんですか？」

「何がですか？」

どうやら熊の動きだけはしていたらしい。突然声をかけられ、動揺したが無かった事にしておいた。

「誰？」

「一年生のアレックス・クープ」

「僕は」

「いいですよ、どうせ偽名なんでしょ？」

「もちろん」

「即答した・・・」

「アレックスこそ、こんなところで何してるの？」

「夜食を食べに厨房に」

「夜食って、そういえば暗いね。今何時なの？」

「夜中の一時です」

「一時！？本当にほっとかれたんだね・・・」

「そりゃ、ラッキースケベなんですから当然ですよ」

こいつだったか。そう思っていると、お腹がなった。

「名無しさんも一緒に行く？」

「うん行く～」

「かるいなー」

「何これ！？おいしい！特にこのキャッセロールにコーニッシュパスティ、ベイクドビーンズ。極め付けにライスプディング」

「イギリスの食事も伝統料理は美味しいんですよ。単純な料理が多いですけど」

「素朴な味を極限まで高めると、これほどの味になるのか。良い勉

強になった」

「嬉しいな、そんなに褒めてくれるなんて」

「う～ん、これをのせてあれをかけると」

「どうしたんですか？」

「いや、キッパーを僕の母国の料理と融合させたら、美味しいんじゃないかと思って」

「ふ～ん。作ってみてくださいよ」

そう言われて、鍋を借りて出汁をとり始める。

この繊細な作業は、イギリス料理に慣れた屋敷しもべ妖精ではできないだろうと思った。

「それにしても、こんな時間に屋敷しもべ妖精はよく起きてるね」

「ああ。夜中に僕が来るって知ってるから交代で準備してるみたいですよ。そうだよね？」

「はい！！クープ様のために準備しております！！！」

「いつもありがとう」

そういってアレックスは、屋敷しもべ妖精をなぜた。

「身に余る光栄です」

そう言って高揚に満ちた面持ちでふらふらと去っていった。

「アレックスは変わってるって言われるだろう？」

「よく言われますね。でも、美味しいご飯を作ってくれる屋敷しもべ妖精に、礼を尽くすのは当たり前ですよ？食への感謝です」

クックと笑いながら、出汁を火から外し、魔法で出した茶碗に持ったご飯とその上にのったキッパーの上にかけた。

アレックスは、口に運び開口一番。

「旨い！！！」

そう言った。

バクバク食べる姿を見ながら、今度はひつまぶしでも食べさせてやろうと思った。

箱の中の勇者は大変な者を教えていきました（前書き）

休日の夜なので更新します。

箱の中の勇者は大変な者を教えていきました

良い朝だ。そう思って起きると部屋には誰もいなかった。今日はハッフルパフで寝たはずだ。時間を見ると日が昇っていることから昼の2時だった。

・・・寝すぎた。

そう思い階下へ降りた。何人かがいたが、一瞬目を向け逸らした。

昼食も無いだろうと、厨房へ向かった。階段を下りていると、緊迫した声が聞こえた。

「テメー待ちやがれ」

「待てと言われて待つやついますか」

アレックスとシェーマスが追いかけっこをしていた。仲が良いなと思ってみていると、どうも様子が違う。

アレックスが妨害呪文を後ろに向けて弾幕を張りながら走っているのだ。

よくもまあ、あれだけ無言呪文を打てるなと思っていると、こちらに向かってきた。

やあ、とっ手を上げると、アレックスはすさまじい剣幕でこちらに杖を向けた。

「名無しさんもですか、先手必勝です」

問答無用とばかりに迫ってくるアレックスの攻撃呪文を避け、こちらも、アレックスから逃げる為に自転車をだし逃げ出した。

「アレックス！どうして追ってくるの」

「知りませんよ。名無しさんが、僕の前を走っているからですよ」

「なんだ、その横暴な理由は！それに、いい加減、呪文打つのやめて」

「僕、もう打ってませんよ」

「「じゃあ・・・」」

後ろを振り向くと、シェーマスを先等にコリンクリービーやネビルを始めとした、ＤＡのメンバーが呪文を打ちながら追ってきていた。しかも、男ばっか。なぜか一番後ろにスネイプがいた。

アレックスは恐れをなして、自転車の後ろに飛び乗った。

「アレックス、何したの？」

「ＤＡの人が話してるのを聞いちゃって、今度校長の部屋に・・・っうわ」

「それ以上、しゃべってみろ唯じゃおかないぞ」

「シェーマスさん、言いませんってば」

「それで、追われてるの」

「それだけじゃないと思います」

「ハリーさん、ハリーさん、言ってるので、ただならぬ関係だと言ったら、ブチギレちゃって、やっぱり年頃の男子が寮でいたら当然の成り行きですよって言ったら、追われる事になりました」

「それは、怒るよ。っていうか意味わかってるの？」

「男子が仲良すぎたら、そう言えって言われたんですけど」

「誰に！？」

「箱の中の勇者に」

「意味わからない。それで、校長が追ってきてる理由は？」

「え～わかんないです。スネイプ校長先生の事なんて言ってないですよ」

「本当に？」

「ハリーさんのことを狙ってるのは、あなた達だけじゃないですよ。なんたって、ショタコンほいほいですからねって言っただけですよ」

「本当に意味わかってないんだよね・・・」

「子どもを愛でるのが好きな人のことですよね。時には金と権力を駆使してでも自分のものにするんですよね？」

「それも、箱の中の勇者に？」

「見つけたら、心を開かずジト目をしろって言われました」

「その人どういうひと？」

「ニートっていう、仕事しながら、ひきこもりっていう活動をして、箱の中で勇者として世界の平和を守ってるらしいですよ」

「そ、そう」

「あっそれが、本場のジト目ですね！僕も練習しなくてはいけませんね。コツってあるんですか？」

「この世で最も醜悪な者を想像して、軽蔑する心を持って見るんだよ」

アレックスは試行錯誤しながら練習しているようだった。

「できてます？」

「上手い上手い。いまは何を想像しているの？」

「ハッフルパフの男子風呂です」

「うん・・・そっか・・・気になるけど聞かないでおくよ」

「それにしても、後ろの人たちしつこいですね」

「そうだね。あんなに、焦ったら本当のことみたいだね」

「本当なんじゃないですか」

「「・・・ジー・・・・」」

二人で後ろを見た瞬間、呪文の数が倍増した。呪文は主に、オブリビエイトだったが、あたれば、記憶が全て消失するレベルのものだった。何故だか、明らかにさっきより人数が増えている上に女子が多数いた。たまに、レジリメンスが飛んできている気がする、話の中身を知りたい人がいるらしい、そして、何だかはぁはぁという変な息遣いが聞こえるが気にしては負けだ。

「何とか逃げ切ったね」

「そうですね」

「お腹減ったな。そう言えば起きてから何も食べていない」

「ずっと寝てたんですか？」

「良く知ってるね」

「え、だって名無しさんがいつも寝ているベッドは僕のベッドですから」

「そうだったの？」

「そうですよ。いつも、起きると勝手に僕のベッドにいるんですから、とうとう落ちるところまで落ちたかと思いましたよ」

「やけに広いベットだとは思っていたけど、ダブルだったか」

「ああ、あれは、僕が空間を拡張させたんですよ」

「アレックスはずいぶん力が強そうだね」

「過酷な修行をしたので」

「それだけじゃなさそうだけどね」

「どういうことですか？」

「なんでもないよ。それより、お腹がすいたからご飯を食べに行こうよ」

「そうですね。僕も運動したからお腹がすきました」

「アレックス様、・・・それから」

「この人は名無しさんで良いよ」

「はい、名無し様」

困った顔をした、ドビーにアレックスが助け舟を出した。

「ドビー、シチューある？」

「ございます。今日はビーフストロガノフをご用意しました」

「ドビーは本当に料理の名人だね」

「ありがとうございます」

ドビーはとっても嬉しそうに言った。

「じゃあ、僕もそれをもらえる？」

「はい、わかりました」

ドビーは走って厨房の奥へ行き、料理を運んできた。

「うわー、美味しそう」

テーブルにすわり食事をしだすと、アレックスが言った。

「本当だ、良い匂いだね」

「日本にもビーフストロガノフあるんですか？」

「日本人は何でも食べるからね。日本の場合は、ほとんど、ご飯にかけてあるけどね」

「ご飯にですか？カレーアンドライスみたいですね」

「そんな感じだよ」

「僕は今みたいにマッシュポテトと食べるのが好きですね」

「こういう、味付けなら、マッシュポテトのが美味しいかな」

「味違うんですか？」

「日本人好みにしてあるからね」

「日本人はアレンジ上手なんですね。今度、日本料理食べさせてくださいよ」

「良いよ」

「あれ、あのミシュランに載ってたやつ食べさせてください」

「ミシュランに載ってたやつ？」

「コース料理のやつですよ」

「ああ、種類が色々あるけど、任せといてよ」

「コースに種類があるんですか？」

「目的が違うんだよ」

「目的って食べる事じゃないんですか？」

「そうなんだけどね。専門職でもない限り、違いなんて分からないから良いよね」

「おいしければ、何でも良いですよ」

「ああいう料理も美味しいけど、田舎料理や家庭料理も結構美味しいよ」

「名無しさんのお勧めはなんですか？」

「う～ん、猪鍋、肉じゃが、饅頭かな」

「どんな料理なんですか」

「猪鍋は字のとおりだけど、肉じゃがはビーフシチューを基に作られた日本料理。饅頭は、そうだな、使われているのがジャガイモじゃないけどマッシュポテトを丸くして、汁をかけたものかな」

「ビーフシチュー日本バージョン、肉じゃが食べてみたいです」

「ビーフシチューとは大分違うんだけどね」

「そうなんですか？」

「デミグラスソースじゃないしね。醤油だから」

「ソイソースですか。あれって、カナッペとかブルスケッタに使うと美味しいんですよ。スモークサーモンとチーズのカナッペにソイソースが最高です」

「それは、醤油と合いそうだね。話変わるけど、アレックスの家って金持ち？」

「え？どうなんでしょう。普通なんじゃないですか。どうしてですか？」

「その年で、食べ物をよく知ってるなと思ってね」

「他家との交流は多いですね。両親は旅行も好きですから、旅先でご飯も食べますしね」

「やっぱ、金持ちなんだね」

「マルフォイ家以下ウィーズリー家以上ですよ」

「極端すぎて分からないよ」

「まあ良いじゃないですか。ご飯が食べれれば良いんですよ」

「好きだねー。ご飯が食べれれば、誰が魔法階を支配しても良いってこと？」

「そうですよ。食こそ正義です」

「変な考え方だね」

「名無しさん程じゃないですよ」

「ひどいな。そういえば、不干渉なのに、僕と仲良くして良いの？」

「名無しさんは、強いから良いんですよ」

「弱かったら仲良くしないの？」

「それは、もちろん。それに、名無しさんは、ハリーさんＬＯＶＥだけど、他の人とは違う感じがしますし」

「そうだね」

「名無しさんは、ハリーさんに勝ってほしいいんですよね？」

「う～ん。勝つとか負けるとかって事ではないんだけどね」

「どういう事ですか？」

「みんなで仲良くできればいいなって思ってる」

「何か偽善者みたいですね」

「そうかもね。でも、そうすれば、みんなでご飯だって食べられるよ」

「そのために、自分の身体を傷つけても人を助けるんですか？」

「よく知ってるね」

「両親が不死鳥の騎士団なんですよ」

「そういう事か。そうだね、みんなが楽しく生きるために頑張ってるよ」

「ホグワーツとかでバーベキューできたら良いですね」

「それ楽しそうだね」

「できたら良いですね。バーベキューだけは参加させてもらいます」

「なんかズルイな」

「ご飯は、みんなで食べた方が美味しいんですよ」

「まったく。僕に呆れさせるとは、なかなかの実力だね」

「今度、お菓子あげますから」

「お菓子で釣るとは、いくつだと思ってるの？」

「年齢不詳ですよね？」

「不詳じゃない。１５歳だよ」

「日本人って、凄いですね」

「ニ・・・ニホンジンナンテダイタイコンナモノサ」

（にほんの皆さんごめんなさい）

「まあ年齢知ってましたけど」

「そんな意味のわからない、嘘をつくんじゃない！」

「はは、名無しさん面白い人ですね」

「年上をからかうんじゃない」

「・・・」

「どうしたの？」

「こういう時も、ただならぬ関係なんですかね」

「そういう事言うな！」

「ベッドも共にしたわけですし」

「変な言い方しないで！」

「ハッフルパフの伝統」

「止めろ！そんなわけの分からん伝統など存在しない」

「え？だって先輩が、お祝いの日にはお風呂でお風呂でお酒飲んで××××××××するらしいですよ」

「聞こえなかったんだけど！え？何か規制入ったよ」

（作者さんアザーッす）

（良いって事よ）

「なにボーっとしてるんですか？」

「とにかく、変な言い方しないで」

「勝手にベッドに入ってくるの名無しさんですよ」

「わかった、もう入らないから、自分のベッド出して寝るから」

「別に入ってきても良いんだからね」

「なんでそこでツンデレ」

「男子にはこうしろって箱の中の勇者さんが」

「そいつ絶対一発殴る」

「殴っちゃ駄目ですよ。勇者さんなんですから」

そうして、二人の一日は終わった。

その夜、アレックスのベッドに名無しの姿はなかった。アレックスは、久しぶりの一人のベットにホッとしたが同時に寂しさも感じたとか感じてないとか

一方、別の部屋で困惑の声が上がった。

「何故、我輩のベッドにこやつが。まさか、我輩はクープの言ったとおり・・・」

そんな声が上がったとか上がってないとか

その後、少年は薬臭いし加齢臭が臭いという理由で別のベットへ向かった。その途中、飲酒をし続けたため、また誰かの被害がでたらしい。

箱の中の勇者は大変な者を教えていきました（後書き）

まず、ＢＬ小説じゃないですからね！うほっな展開はありません。

アレックスと主人公の関係が薄かったので話を増やしました。
これで、仲良くなったって納得できますか？
ハリーポッターって原作でも仲良くなるのが速すぎるって気がするんですよ。
ハリーは明らかに幼少期を引きずってるからでしょうが、他の人も、早いような気がするんですよね。
シリウスとか、さっきまで殺人鬼扱いしといて、もう仲良くなるのかって思ってたんですよね。
吊橋効果なんでしょうか。

「貴様はこんなところでなにをしている?」

「何をとは?座っているだけだけど?」

「そういうことを聞いているんじゃない」

「何を聞いてるの?」

「今は闇の魔術に対する防衛術の時間だ!それを教えるのは我らカロー兄弟だ。貴様は我が君を裏切ったであろう」

「いや、アミカスは、マグル学でしょ?」

「黙れ!貴様の対策の為だ」

「そうだ!我が君からのご命令で貴様には関わるなと言われているんだ」

「そっか。それで何が言いたいの?」

「「出て行け！」」

「嫌。禁じられた呪文使うんでしょ？そんな面白そうな授業出ないわけにいかないじゃない」

「我が君は偉大だ！貴様の行動を予見してある物を我らに与えてくださった」

「？」

「くらえ！」

そういって懐から取り出した、手紙を開け放ったのだ。

「ここであったが百年目！我が恨みを貴様に身に刻むがいい」

吼えメール特殊な呪文がかけてあったのか、そこらじゅうに呪文が放たれた。

「パピー！！！ちょっと待ってよ！いきなり呪文の応酬って卑怯すぎでしょ！ってか闇の呪文連発しすぎ！！」

「貴様のような餓鬼は教育せねば」

「死ぬ！死ぬ！やばいよ！！！」

そう言いながら、避けては、呪文を返し、呪文を放っては相殺されながらのバトルは続いた。

後輩には結界を張っておき、見学時間にさせた。

やっとの事で反撃して、手紙を消失させた。

「はぁ、疲れた」

「大丈夫ですか？」

「アレックスか。すまないけど連れ出してくれ」

「しょうがないですね。僕も、お腹すいたのでキッチンに行きましょう」

「シチューある？」

「はい、ございます」

「じゃあ、それおねがい」

「僕はビスケットと紅茶でおねがい」

「はい、かしこまりました。クープ様、山田太郎もちろん偽名様」

しもべ妖精が走っていった。

「・・・うん」

「めんどくさい事するからですよ」

「自業自得だけどさ」

「名無しさんは、どうしてめんどくさい事に、首を突っ込むんですか？」

「は？」

「いや、あっちへバタバタこっちへバタバタ。僕の親、不死鳥の騎士団の協力者なんで、情報は入ってくるんですよ」

「何で。う～ん、成り行きかな」

「成り行きですか」

「ふ～ん。君は成り行きに身を任せられないみたいだね」

「え？何で分かるんですか？」

「魂が振り回されてるからね。不死鳥の騎士団に入った親が関係してるのかな」

「閉心術してるんですけど」

「それとは、あまり関係ないかな。アレックスの魂の端っこを掴んでるようなもんだからね」

「何か怖いですね」

「まぁ、アレックスがどうするかは自由だよ。全ては終わりに向かってるんだから」

「良く分からないですね」

「あっ、シチュー来たみたいだよ」

「やった！ビーフシチューだ」

「僕のは・・・ビスケットだけじゃなくて、クリームティ。むしろアフタヌーンティになってる」

「屋敷しもべは、サービス精神旺盛だからね」

アレックスがありがとう、とっても美味しいよと言うと、屋敷しも

べ妖精は目を輝かせていた。

「そういえば、この前変な物を見つけたんですよ」

「変な物？」

「何か、鏡っぽいものなんですけど、何も映らないんですよね」

「みぞの鏡かな。それで、何も写らないって？」

「何かむかついたんで、呪文打ち込んだんですよ。そしたら、呪文が吸い込まれて、鏡に大量の呪文が渦巻いてるような感じで映し出されたんです」

「アレックスも凄い事するね。それで、大量の呪文ね」

「なんか、呪文の光線みたいなものが混ざり合ってるっていうか」

「一度、見てみなきゃわかんないね。必要の部屋だよね？」

「はい」

「そういえば、何でそんな事を僕に？」

「先生たちに言ったら、めんどくさそうですし、ＤＡの人に言って分かるようなものじゃないかなって思って。あの人たち意外だとあなたが一番詳しそうだなって思ったからですよ」

「今の状況だったら、先生達も切羽詰ってるだろうからね」

「ご飯も終わったし、行ってみようか」

「はい。あっスコーン食べて良いですか？」

「・・・まだ、食べるのか」

「え？食べちゃ駄目ですか？」

「・・・どうぞ食べて」

「どうですか」

「たしかに、何も写らなくなってるね」

「変ですよね」

「それで、アレックスは、何の呪文使ったの？」

「悪霊の火です」

「・・・ああ・・・そうか。っていうか使えるんだ」

「まあ。そこそこですけど」

「そこそこで、ぶっ放したんだ」

「もう良いじゃないですか」

そう言って、アレックスは、みぞの鏡に向けて呪文を放った。鏡は

呪文を余すところなく飲み込み、呪文は渦を巻くように、他の今も渦を巻いている呪文の中に飲み込まれていった。

「これ、なんだろうね」

「呪文を封じてるんですかね」

「封じてどうするんだろう」

「どうするんでしょうね。でも、こんなに中に入ってる呪文って危なくないですか？もしこれを、開放する方法があるとしたら、蛇の人、一撃で倒せそうじゃないですか」

「不干渉はどうしたのさ」

「不干渉ですよ。これって、不死鳥に騎士団にも、蛇の人にも、渡れば決定打になりますよね」

「そうだね。それにしても、これだけ強力なものを、どうして、生徒の手の届くところに置いておいたんだろう」

「置いておいたわけじゃないんじゃないですか。ここ、必要の部屋

ですし」

「それは、そうだけど、みぞの鏡はダンブルドアが管理していたはずだからね」

「考えてもしょうがないですよ。今、目の前にみぞの鏡があるんですから、ただそれだけですよ」

「冷めてるね」

「こんな時代ですからね」

「僕も呪文打ってみようかな」

「会話の流れぶっつりですね」

呪文を放つと、普通とはいえない現象が起こった。

「うわ！何だこれ、魔力を吸い取っていく」

「え？やばくないですか？」

次の瞬間、魔力の吸い取りが止まり、今度は引力のような力で鏡のほうへ身体を引き寄せ始めた。

「これ！引っ張られる」

「何がですか？」

「アレックスは引っ張られないのかよ！！」

鏡のふちに手を置いて力の限り、抵抗していたが、足は鏡の中に吸い込まれていた。あまりの引力に腕を話してしまい、何かを掴もうとあたりを探った。

「ちょっと、掴まないでくださいよ」

「冷たすぎでしょ！同じ釜の飯を食った仲でしょ？」

「知りませんよ。それより、僕は引っ張られてないんですから巻き込まないで下さい。心中はごめんです」

「君たち何してるんだ！」

「ロングボトムさん！いえ、ネビル先輩、助けてください道連れにされそうなんです」

「何が起こっているの」

ネビルと共に入ってきた、ジニーやルーナが戸惑っていた。

「早く助けなきゃ！」

そういって、３人がアレックスの手をつかむが、その瞬間、５人は今までよりも強い引力に引かれて鏡の中に吸い込まれた。

残されたのは、静寂だけだった。

みぞの鏡（後書き）

ＤＡはいつから、必要の部屋の部屋に篭ってたんですかね。

そういえば、シェーマスって映画だと大活躍ですけど、原作だとあまり印象にないんですよね。作者の印象は、映画で他の人の顔がえらく成長するのに、シェーマスだけ、顔変わらないなって感じですね。あれも、童顔なんですかね。ロンも童顔ですよね。

最奥の部屋

「いったー、どうなってるの」

周りには、４人が倒れている。

「アレックス起きて、今日のご飯はステーキだよ」

「う・・・ステーキよりシチューが良い」

「さっき食べただろ」

「ってよくも道連れにしてくれましたね」

「しょうがないだろ、緊急事態だったんだから。それより、他の人を起こすの手伝ってよ」

不服そうにアレックスはエネベールトを唱えていった。

「ここどこ？」

「部屋だもん」

「鏡の中の部屋？」

「あの壁なんか書いてあるよ」

ホグワーツ、我らが守りし学び舎に危機が迫り来る。
我らの死した後、危機はどうやって乗り越える
願え、願我らの学び舎を犯せしものに滅びを
さすれば、古の守り与えられん

「この、我らって誰かな？」

「誰だろう」

「もう死んでる人って事だよね」

「創設者じゃないですか」

「私もそう思うんだ」

「古の守りって何だろう？」

「わからないけど、かなり強力なものじゃないかな」

「創設者、お墨付きだからね」

「これに書いてある通りに願ったら、どうなるのかな？」

「願ってみれば良いんじゃないかな」
そう言った瞬間、新たな字が浮かび上がった。

学び舎を守りし勇敢なものたちよ、その願いのために覚悟を示せ。
試練の道を行くがいい。道は開かれた。

ゴゴッという音と共に壁が開き奥へと続く道が現れた。道は５つに

別れ、それぞれに名前が浮かび上がっていた。

勇気の道　　知性の道　　やさしさの道　　狡猾の道
強さの道

「これって、寮の言葉よね？」

「でも強さの道って何かな？」

「一番危なそうだもん」

「これは、寮どおりに進めって事かな？」

「スリザリンはどうするの？」

「スリザリンに、信頼できるやつっているか？」

「校長先生は駄目ですか？」

「スネイプ？駄目に決まってるだろ」

「裏切り者よ」

「大丈夫だと思うんですけど」

「とにかく駄目だ」

「5人いるからそれぞれ、進めば良いんじゃないか？」

「そうね」

「僕やりませんよ」

「「「え？」」」

「言うと思った」

「何でよ？」

「ホグワーツが危ないんだぞ」

「腰抜け」

「食欲馬鹿」

「ショタコンホイホイ」

「ハッフルパフの真実教えなさい」

「・・・何か、変な事聞こえたんですけど。それは良いとして、試練って、何でそんなめんどくさい事をしなきゃいけないんですか。不干渉です」

「せっかく、目の前に例のあの人を倒す事ができるかもしれない力がるのに」

「残念ですね。別の人探してください。部屋さん、この部屋から出してください」

退く者よ、行くが良い。恐れもまた大事なり

すると、浮き出た文字の反対方向から光が差した。

アレックスは、光の中に入っていった。

「彼以外のハッフルパフ生に心当たりある？」

「アーニーマクラミンは？」

「優秀だけどアレックスほどの力は無いわね」

「アレックスは強いからね」

「今日は終わりにしようか」

「そうだね」

夜遅くに、食堂に行くと、そこにはアレックスがいた。

「やっぱり、ここにいた」

「なんかようですか、名無しさん」

「僕も夜食に来たんだよ」

「そうですか」

「不貞腐れてるね」

「手伝いませんからね」

「アレックスの自由だよ」

腕をスッとふって、いつもの晩酌セットを出し、イスに座った。

「酒ですか」

「そう、酒だよ。飲む？」

「ちょっとだけ」

そう聞くと、すぐにもう一つ、杯を出した。

「お酒って案外美味しいんですね」

杯から酒を流し込んで早々、アレックスが言った。

「飲むのは初めて？」

「日本の酒は」

「そっか」

「・・・何も言わないんですか？」

「何を？」

「弱虫とか・・・」

「必要ないよ」

「僕、魔法界にはついていけませんよ。ハリーだ、蛇の人だ、疲れちゃいますよ」

「そっか」

「何で、僕がハリーさんのために命をかけて戦わなくちゃいけないんですか。どうして、パパとママは僕にそんな事させたいのかな。僕の事、大事じゃないのかな」

「どうだろうね」

「こういう時、普通は優しい言葉かけません？」

「君にそれが必要だとは思えない」

「いつもと感じが違いますね」

「これも僕だよ」

しばらくすると、アレックスは寝てしまったので、部屋に転送しておいた。

もう少し飲もうかと、月明かりの下で月見酒をしていると、突然声をかけられた。

「こんなところで何をしているんですか？」

「マクゴナガル先生、一緒に飲む？」

「そんな事、聞いていないのですが」

「どうぞ、日本のお酒だよ」

「はぁ」

そう言って、マクゴナガルは隣に座った。

「ずいぶん、美味しいお酒ですね」

「上物だからね」

「いつもと、雰囲気が違いますね」

「何故だろう。僕もあなたと同じで魂を揺さぶられているからかな」

「魂ですか。そういえば、あなたはクープと仲が良いそうですね」

「ああ、アレックスも魂が揺れていますから、気になる」

「そうですか。彼も迷っているのですね」

「マクゴナガル先生は何を迷っているの？」

「あなたには、かないませんね。ハリーポッターに期待をしすぎて彼を死に急がしてると言われまして」

「アレックスですか」

「私達のやっている事は、クープをも死に追いやろうとしているのでしょうか」

「どうだろう」

「私は、グリフィンドールから不死鳥の騎士団のメンバーが出ることを期待しています。それは、命を懸けて戦えと言っている事と同じなのでしょうか」

「それでも、先生はホグワーツを離れる事ができないでしょ。自分のやるべき事は分かっているから」

「私のやるべき事・・・」

「そう」

「私はここに留まり、生徒を守ります」

「大変だよ」

「覚悟の上です」

「心は決まったみたいだね」

「ええ、お酒おいしかったです」

そう言って、マクゴナガルは立ち上がった。

「お酒は没収です」

去り際にお酒を持っていった。

「ひどいな」

一言呟くと、新しいお酒を出した。

最奥の部屋（後書き）

ルーナとジニーはもうすぐ退場しなければいけないのに、忘れてて、グリンゴッツ襲撃の時点で、何故かホグワーツにいるという意味わかんない展開になってしまった。

どうしよう。修正しようか、オリジナル展開で進めるか。ルーナは誘拐されてもされなくてもストーリーに支障はないはず・・・

それぞれの試練

歳奥の部屋に呼ばれ、今後の話をする事になった。

「それで、どうしよう？」

「とりあえずは、できるところだけやっておきましょう」

「そうだね、勇気の道と、知性の道はやれるんだもん。強さのみちはどうする？君、やってくれる？」

「いいよ」

「軽い・・・」

「それで、やさしさの道と。狡猾の道はどうしようね」

「後で考えればいいんだもん」

「・・・ルーナのそういうところ、見習いたいね」

「はい！決まり！！じゃあ、レッツゴー」

「ほんと・・・どういう思考回路なの」

4人はそれぞれの道へ歩みだした。

二人が扉を開け中に入ると、そこは、草原だった。

そんな、明るい雰囲気とは明らかに違うものがそこにあった。

獅子だ。そして、獅子の前には、ハリーとジニーの母であるモリーがいた。

「ハリー、ママ」

「ハリー、パパ」

ジニーとネビルは同時に呟いた。どうやら、二人の目には違うものが見えているようだ。

「これ、どうなって・・・」

その時、獅子が言った。

「選べ、どちらを生かす」

二人は、沈黙した。

どちらかなど、選べるはずはなかった。

「では、聞こう、どちらがホグワーツを守る戦いに必要だ」

ハリー、それは、間違いなくハリーだ。だからといって、肉親を切り捨てろというのか。二人には、そんな事ができるはずがなかった。

「覚悟の必要がない戦いなどないぞ」

獅子は、言葉を迫った。

最初に口を開いたのはネビルだった。

「ハリー。ハリーを助ける」

ネビルにとっても自分の口から出た言葉は意外だった。自分とまともな会話をした事はない父でも、かけがえのないものだった。それでも、自分の口から出た言葉が、ネビル自身を突き動かした。その目には、凛とした真っ直ぐなものがあった。

ジニーはネビルの目を見て、その覚悟を悟った。一見、その考えはスリザリンのようにも思えた。しかし、ジニーは悟ったのだ。この戦いに、寮は関係がない事を、そう、ハリーを守る戦いなのだ。ハ

リーが闇の手に落ちれば、戦いは負けたも同然。希望は潰えるのだ。

「わ、私も、ハリーを選ぶわ」

震える、声で言った。自分の身体が動き出してしまわないように、自分の手で自分の身体を縛るように抱いた。その光景は、自分の心が砕けないように守っているようにも見えた。

「そなた達の、覚悟、受け取ったり」

獅子はそういい、父そして母を噛み砕いた。

声が出なかった。二人は、覚悟はしていても、自分の肉親が殺されるという事には覚悟が幼すぎたのだ。

その時、ハリーの辛い覚悟を知った。ハリーは、友でありライバルでもあった、ゼドリックを自分のせいで死なせてしまった。そして、自分の浅はかな考えで唯一の肉親といっても過言ではないほどのシリウスを失った。そして、唯一の理解者であった、ダンブルドアさえも。

「人の死ってこういうものなのね」

「覚悟が足りなかった」

獅子が言った。

「勇気だけでは戦えぬ。次へ進むがいい」

二人は無言で進みだした。

ルーナはスキップをしていた。第一、第二の試験は難なく突破し、最後の第三の試験は目前だった。日頃から、寮の絵との謎解きをしている、ルーナにとっては、第一、第二の試験の問題など朝飯前だった。いつもと、違うのは、間違えたら呪をかけられるというものだったが。

第三の試験の扉を通ると、鷲がいた。

「どうぞ、こちらへお嬢さん」

そこには、机と椅子があり、アフタヌーンティーが用意してあった。

ルーナは促がされるように座った。

「どうぞ」

そう言って、お茶をルーナのカップに注いだ。ルーナは、お茶に口をつけ、サンドウィッチを食べた。

「あなたは、どうして、サンドウィッチを食べたのですか？」

「サンドウィッチがおいしそうだったからだもん」

「そうですか。では、ここであなたに問います。魔法ってどうしてできたのかしら」

「魔力があるからだよ」

「魔力はどうしてできたのかしら」

「必要だったからだよ」

「ほう、では、必要のないものはできないと。では、非魔法族には

魔法が必要がないというのですね。
では、なぜ、魔法族と非魔法族ができたのですか？」

「魔法族でも魔法が使えない人はいるよ」

「分ける必要がないということですね」

「違うんだもん。魔法族と非魔法族の定義がないのに、違いなんて言えないんだもん」

「見事な返しですね。これなら、この最後の問いを受ける資格がありそうですね」

「最後の問い？」

「ええ、では、これを、飲んで下さい」

そう言って、鷲はどこからともなく小さな小瓶を取り出した。

「これなに？」

「強力な毒です。この世で、最も苦しい痛みを与え、一瞬で死にい

ざないます」

「嘘だもん」

「なぜですか？」

「一瞬で死ぬんだったら、問いに答える暇はないんだもん」

「そうですね。じつは、先ほどの食事に少しの解毒剤を入れておきました。この毒を飲んでも１０分は存命できます。その間に、この空間のどこかにある、解毒薬を探して下さい。ヒントはハッフルパフです」

「ハッフルパフ・・・」

「どうしますか、この試練は止めますか？」

「やるんだもん」

「そうですか。では毒を飲んで下さい」

ルーナは小瓶をあけ、一滴残らず毒を飲んだ。そして、ルーナはお

もむろに先ほどのサンドウィッチを
食べ紅茶を飲んだ。

「なにをしているのですか？」

「さっき、これに少し解毒剤が入ってるって言ったもん。これを食
べれば、また、毒で死なない時間が延びるでしょ？」

「死の前で、なかなか冷静ですね。たしかに、その方法なら少しは
伸びるでしょう。それでも、早く見
つけなければ死は免れませんよ」

「薬は、もう見つけたんだ」

「ほう」

「あなたが持ってるんだもん」

「なぜそう思うのですか？」

「こんなところから、１０分で探すなんて無理なんだもん。それに、
解毒薬を料理に入れたんなら、あな
たが、持ってなきゃおかしいんだもん」

「冷静ですね。では、私から奪って下さい」

「奪う？」

「知恵だけでは、戦いはできません」

そう言って、鷲は巨大化し、とても大きな翼を広げた。

「強さの道開かないんだけど」

ドンドンと扉を叩くがまったく動く気配がない。術を使ってみてもうんともすんとも言わないのだ。

しかたないので、別の扉に行こうとスリザリンの扉を開けると超巨大な蛇が確実に目が合うように微動だにせずドアの真ん前で目を最

大に開けていた。どう考えてもバジリスクです。入ってきたやつを、速殺する気満々です。邪眼の力をなめるなよとでも言いたげです。扉を開ける瞬間に、気配を感じて結界を張ってなかったら、確実にＯＵＴでした。今も、結界に顔を貼り付けんばかりにガン見してます。

「あの、どいて」

「シュー」

「どいてよ」

「シューシュー」

「僕には、その言葉分からないんだって」

「シューシューシュー」

「だから、そんなにガン見されても困るんだけど」

すると、バジリスクは、ショックを受けたように目を見開き、頭を地面につけ拗ねたようにシューシュー言っていた。

「ごめん、先に行くから、悪いんだけど君を踏んでいくね」

この、先に進むには、道の幅もあるバジリスクに退いてもらうか、バジリスクの上を行くしかなかった。多分、パーセルタングの人専用の道なのだろう。

ごめんと思いながら、地面にへたり込んでいるバジリスクの頭に上り歩いていった。

それぞれの試練（後書き）

第一話にあらすじとキャラクター解説（アレックスによる）を載せました。

それぞれの、戦い。一部除外

「ジニー、気をつけろ。そっちに行ったぞ」

髪のけを少し焦げながらネビルが言った。

「分かってるわ」

こちらに向かってきた、獅子に身構えた。

獅子は、口から炎を吐きながら、こちらに突っ込んでくる。

炎を呪文で相殺すると、右後ろの方で何かが動いた。とっさに左にステップを踏むが、腕を何かが掠めた。鋭い痛みと時間差をつけて、熱い物があふれ出した。

「ジニー！！」

「大丈夫よ。アレックスの言うとおりね、応急処置の呪文くらい覚えておいたほうが良かったわ」

獅子は目の前まで迫ってきており、避ける事はできなかった。自分の自嘲がとても愉快に感じた。

その時、ネビルの呪文が炸裂した。獅子は、顔をネビルの方に向けると咆哮して、威嚇した。殺気、これが本当の死を目の前にすると

いうことかとネビルは思った。身体が硬直して動かなかった。強くなったそう思っていたのに、身体が硬直して動かないのだ。練習して練習して練習して、死食い人とだって戦った。それが、何の意味もないことだったのか。その時、アレックスの言葉を思い出した。ヒーローごっこ。彼はそう言っていた。

「違う!!僕は、戦わなくちゃいけないんだ!!!ロングボトム家の・・・父さんと母さんの誇りにかけて!!!!!」

次の瞬間、ネビルの身体の硬直がとけ、獅子に向けて渾身の呪文を放った。獅子は呪文の直撃に一瞬の油断をみせた。

「ジニー!今だ!!」

「分かってるわ!第一の課題の答えは撤回よ。私は、自分の愛するものを全て守ってみせる!!!」

ジニーの呪文が獅子の後頭部を直撃し、獅子は動きを止めた。

獅子はゆっくりと後退し、止まった。

「そなた達は、幼いな。だが、その覚悟見事なり。この、勇気の関門は突破したこととする。我もまだ、甘いな」

獅子はにやりと笑った様に見えた。次の瞬間、獅子はその姿を変え、丸い玉に変わった。

「終わった?」

「そうみたい」

「あー疲れた」

「そうね」

二人は、腰をドスンと地面に降ろした。

時間は戻り、ルーナは大鷲と共に疾走していた。

ルーナは、呪文を放った。しかし、何度やっても、ルーナの呪文は、鷲の大きな両翼で起こされる風に弾かれてしまう。打つ手がない。だけど、まだかすかな勝機があった。しかし、問題は時間だ。ルー

ナに残された時間は、5分もなかった。

「エイビス、オパグノ」

アレックスの、やり方を真似て全方位から襲わしても、大鷲の回転により発生する、竜巻に全てが無に帰すのだ。

「残念ね。やはり、あなたは知恵がまわるだけ。それだけの愉快な女の子よ」

愉快な女の子。そう、そう言われ続けてきた。でも、私にはそれだけで充分だった。私の信じるものは私が決める。それだけなのに、どうしてみんなは理解してくれないんだろう。いつしか、その思いすらもなくなった。そんな時、出会ったのがハリーポッターだった。彼は、私の話を聞いてくれた。みんなとは違う、そう感じた。最初は聞いてくれたからそれだけの関係だったのが、DAを通して仲間としての絆、友としての絆を感じさせてくれた。

仲間達は、わたしがおかしいと思われる事を言っても、否定はするものの、そこには愛があった。だから、こそ、友が窮地に立たされ、それを助けられるかもしれない力が手に入るかもしれない状況で、手を拱いているわけにはいかない。

「知恵があるだけ?そんな事、関係ないの。私は、大事な人たちのためにあなたに勝たなきゃいけない!!!」

ルーナは真正面から突っ込んだ。大鷲は驚いたもののすぐに、風を発生させるかまえをした。

「知恵さえ忘れたか。愚か者。毒を待たず死ぬがいい」

ルーナは、風によるカマイタチで体中から血が噴出し、風による力で前に進めなくなった。足が崩れそうになったとき、ルーナは渾身の力で自分にレビコーパスを使い身体が反転する力を使い、大鷲の翼を駆け上がり、そのまま顔面に蹴りをあびせ、怯んだところに逆さまになったルーナがオブスクローを唱えた。勝負は決した。

「甘いですね。目隠しなどと、決定打を放つ場面でどうしてこんな呪文を使ったのです？」

「あんたみたいな、でかい鷲にステューピファイが効くか分からなかったからだもん。頭ならもしかしたら効くかもしれないけれど、やっぱり確実に効果のある目隠しにしたんだ。これで、後は効く呪文を試していけばいいんだもん」

「そうですか、なかなか機転が利く。それに、まさか肉弾戦を仕掛けてくるなど思いもよりませんでした。ただ、一つ忠告しておきます。私がこのまま身体を回転させて竜巻を起こせば、あなたは切り刻まれ死んでいました」

「そんなことしないんだもん」

「なぜです？」

「さっき、私の身体に傷ができたときに、あなたの風は力を弱めた。

私もホグワーツの生徒だから？」

「ふふ。無意識に力を弱めてしまったようですね。それでも、二度とあんな危険な賭けはしないことにしてください」

「わかったもん。それで、毒消しは？」

「ああ、時間ぎりぎりですね」

そう言って、大鷲は小さくなった。

「私の羽根を一本抜きなさい。それを噛めば毒は消えます」

ルーナは、言われたとおり、羽根を一本抜くと噛んだ。

「これで、大丈夫ですね」

「羽根は大丈夫？」

「羽根はすぐに、再生します」

「そっか。よかった」

そう言って、ルーナは倒れた。

「ちょっと、やりすぎちゃいましたか」

ルーナの頭に最後に響いた言葉だった。

時間はさらに戻り蛇の上を歩く少年へ

「蛇の道、歩きづらいな」

そう言って、空中に浮き出した。ビュンビュン進むと、壁にぶち当たった。地べたを転がりながら止まると、そこは湖畔だった。

「それにしても、どうして狡猾の道だけあんなに長かったんだろう？途中に今１２キロ地点頑張りましょう（笑）って書いてあったし」

それにしても、綺麗な湖だな。池に月が写って、酒を飲むにはうってつけだ。そう思って、酒を飲みだした。魚がどこかで跳ねた音がした。穏やかな時間、それが何よりも酒を美味くした。小一時間酒を飲むと、寝た。

「記憶が見えんな。いや、この感覚は・・・ないのか」

何かが、そう呟いた。

それぞれの、戦い。一部除外（後書き）

ネビル、ジニー、ルーナの3人の戦いは終わりです。この先、どうする？どうなる？
主人公寝てるだけっていう・・・

BLフラグは大抵勘違い

アレックスは、フィネガンに腕を引っ張られていた。どこに連れて行かれるんだそう思った。まさか、とうとう、僕に魔の手を及ばせる気か。そうはさせるか。そんな誓いを立てた。

「フィネガンさん、いくら、ハリーさんがいないからって、こんないたいけな一年生を捕まえて何しようって言うんですか？」

「誤解をまねく様な言い方するな」

「みなさん、聞いてください。この人は、愛するハリーさんの変わりに、僕を手篭めにしようとしています」

「バカ！違うぞ、違うからな」

周りの生徒に焦りながら否定をしている。周りの生徒は見事なジト目の使い手らしい。おそらく免許皆伝だと思われる。一部を除いて。

「あんまり、乱暴はするなよ。優しくだ優しく」

「後で、報告しなさいよ」はぁはぁ

「萌えるわ」

そんな、声が一部から聞こえる。ホグワーツ終わってるな、そう思わざるをえなかった。

フィネガンさんは、僕を空き教室に連れ込み、僕を壁によせ逃げられないように両端の壁に手を付いている。顔が近い。まさか、これは、マジですか。ちょっとマジで勘弁して下さい。どんどん、顔を近づけないでくださいよ。息臭！何食ったんだよいったい、トロールの鼻くそか？

「ア、アレックス」

「・・・なんですか？フィネガンさん」

「じ、実はさ」

（この、雰囲気止めろ。静まり返った教室でって、どこのＢＬだ。まさか、このまま、僕は手篭めにされて、なぜか知らないけど付き合ってしまうというお決まりのパターンなのか？それだけは、駄目だって箱の中の勇者に言われたんだ！嫌だー、せめてもっとカッコいい人にしろー。違う違う、そんな事じゃないよ。よし、こうなったら、チューだ。チューまでは我慢して（臭いけど）その間に、杖で呪文をぶっ放し記憶を消す。それで、愛の妙薬を使ってネビルさんとくっつければ良いのさ。ふふ、計画通り進めてやる）

「ネビルがいないんだ」

「は？」

「ネビルも、ジニーも、ルーナもいないんだ」

（なんだよ、勘違いさせやがって、僕の覚悟を返せ。っていうか、あの人たちが行くところってあそこしかないよな）

「必要の部屋は探しましたか？」

「探したよ」

（え？違うのか）

「3人の居場所は知らないのか？」

「あー、知りませんね」

（確証はないし）

「わかった。手を引っ張ってすまなかった」

「あっはい。大丈夫です」

（なんか、せつなそうな顔しすぎ。こっちが罪悪感にかられるじゃないか）

「僕も、探してみますよ」

「本当か？ありがとう」

（何この人、可愛い）

「じゃあ、探してきますね」

必要の部屋に向かうと、やはりみぞの鏡はあった。手を触れると、中にすり抜ける事が出来るようなので入った。

「え？何これ」

そこには、傷だらけの、３体の遺体が・・・

「死んだか・・・」

「死んでない」

「ああ、ロングボトムさん。ご無事でしたか」

「ああ、何とか。だけど、動けないんだ」

「どうしてですか？」

「ちょっと、頑張りすぎてね」

「じゃあ、これ飲んで下さい」

アレックスは、母に持たされた魔法薬をネビルに手渡すと、ジニーとルーナを見に行った。ルーナが、あまりにも傷が多い事を目にするとすぐさま、応急処置を施す為の準備を始めた。

「ルーナさんが、危ないので、ジニーさんの傷は、これをロングボトムさんが傷に塗ってください」

手早く、ローブの中の拡張された空間から魔法薬を取り出し、ハナ

ハッカの小瓶をネビルに放った。アレックスは続いて、ルーナに呪文をかけながら、もう一つのハナハッカを霧状にしてルーナの全身にかけた。

「ルーナは、大丈夫？」

ジニーの傷に薬をたらしながらネビルが聞いてくる。

「命は、大丈夫だと思います。ただ、これ以上は僕にはどうしようもないです。名無しさんに頼むしかありませんね。マダムポンプーリのところには行けないでしょう？」

「そうだね」

「ところで、名無しさんは、どこに？」

「強さの道に行ったはずだけど」

「まだ、クリアできてないんですかね」

「大丈夫かな？」

「名無しさんなら、大丈夫ですよ」

「それはそうだけど」

「名無しさんが帰ってくるまで、必要の部屋で休んでいて下さい」

「わかった」

「じゃあ、僕にできる事はもうないので、帰ります」

「きみは・・・」

（ロングボトムさん顔が近いですよ。そんなにまじまじと見ないでください。イケメンだよ。イケメンだけどもさー。駄目だ、ダークサイドには落ちてはいけない。あっ、でも、マジでイケメンだ。ワイルド系イケメンだ。
・・・駄目だ。僕、早く何とかしないと）

「な、何ですか？」

「君は、本当に生粋のハッフルパフ生だね」

「？」

「こういう時には、放っておけないから」

「そんなんじゃないですよ」

そう言って、アレックスはその場を後にした。

部屋に帰ると、アレックスのベットに、彼が寝ていた。

「名無しさん。どうして、ここに・・・」

彼は夢に夢中で起きそうにないので寝かせておく事にした。

にいちゃん、ポツリと呟いた声に反応してアレックスは言った。

「どうして、そんな悲しい顔で泣いてるんですか・・・あなた強いんじゃないんですか?」

静寂の中、アレックスの声だけが響いた。

ＢＬフラグは大抵勘違い（後書き）

アレックスがどこまで理解してるかは作者にもわかりません。イギリス男子だから、知ることはもう知ってるんだろうか。

この後、追加する話がなければギャグ（ルーナ最強伝説、ルーナの拳）が入って、その後シリアスの話が続くと思います・・・多分。

ルーナの拳と教師の苦悩そして悪巧みへ（前書き）

ふへへ、お気に入り登録が増えてやがる。
はっ！しまった。自分を見失っていた。
新規のお気に入り登録ありがとうございます。これからも、よろしくお願いいたします。

ルーナの拳と教師の苦悩そして悪巧みへ

クリスマス休暇が来た。
眠りに、ついていると、お腹に突然衝撃が来た。みるとアレックスが、腹に頭を押し付けていた。

「フォアグラシチュー」

「いったい、どんな家に生まれ育った・・・」

引き離そうとするが、アレックスはグイグイと力を強め、離さなかった。

「アレックス止めて、人に見られたらどうするんだ」

「グヒヒ、ローストチキンより北京ダックが良い。どっちも食べる」

「だから、どんな金持ちだ！」

「ハムハム」

「噛むな！そんなところ噛むんじゃない。僕は食べ物じゃない。やめてー僕は思春期真っ只中なんだぞ。目覚めたらどうする気だ」

「あひゅー」

「いい加減にして」

術で壁に叩きつけておいた。

「あっ名無しさん。おはようございます。ところで、僕の北京ダックは？」

「そんなものないよ。夢だよ夢。」

「ええ？たしかに噛み応えはあったんですけど」

「・・・夢だって」

「そうですか。そういえば、他の人がいませんね」

「いつもの事でしょ。寝坊常習犯なんだから」

「それは、名無しさんもじゃないですか」

「そうだけどさ」

「お腹すいたので、ごはん、食べに行きましょう」

「そうだね」

廊下を歩いていると、マクゴナガル、フリットウィック、スプラウト先生達が楽しそうにお喋りしていた。

「先生たちご機嫌ですね」

「あら、わかりますか」

にっこりと、スプラウト先生が言った。

「クリスマス休暇中はホグワーツにカロー兄弟がいないんですよ」

「本当に、嬉しい事だ」

アレックスはキョトンとしていた。

「クリスマス休暇？」

「そうですよ。今日、ホグワーツ特急で帰りました」

「ええ！？」

「どうしたんですか、クープ」

「僕も帰るはずだったんですけど・・・忘れてました」

「そうでしたか。それでは、ご両親に迎えに来てもらうしかありませんね」

「無理ですよ。今、外に出れませんから」

「ああ、そうでしたね。フルーパウダーも監視されてて使えませんしね」

「連れ添い姿くらましでは、守人の呪文は通過できないからの」

「クープは家への行き方を聞いてないのですか？」

「両親が隠れたのは、ホグワーツに来てからですから、連絡とってないです。多分、何らかの方法で９４／３に迎えに来るつもりだったんだと思います」

「このご時世に、ふくろう便も危険ですからね」

「ああ！僕の北京ダック！！！」

「「「はい？」」」

「気にしたら負けだよ先生」

「名無しさんは予定ないんですか？」

「クリスマス休暇？何かあったような」

「また、例のあの人の所にいく気じゃないでしょうね？」

怪訝そうにマクゴナガル先生が聞いた。

「そっち系だったような。たしかホグワーツ特急が・・・」

「ホグワーツ特急！！？」

「う〜ん。ザ・クイブラーが」

「ラブグッドのお父様が出している本ですね」

「あっ！ルーナさらわれるんだ！！！」

「「「え！？」」」

「それは、忘れちゃ駄目でしょう」

その時、狼狽しながらロランダ・フーチが走ってきた。

「大変です！！ホグワーツ特急が襲撃されました」

「ラブグットはどうなったんですか？」

マクゴナガルがフーチに聞いた。

「なぜラブグットの事を？」

「説明は後です。早くラブグットの事を教えて下さい」

「ラブグットは死食い人相手に大立ち回りをして3人を回し蹴りで倒し、二人を肘鉄で倒し、窓を破って逃げ出したそうです」

「ルーナ・・・ランボー顔負けだな」

「ラブグットは、いつそんな技術を学んだんですか」

「ＤＡはそんな事も学んでいるのですか」

「さすがは私の寮の生徒だ」

「ルーナさん、恐ろしい子」

「噂によると、ルーナラブグットを狙っていることを理由にゼノフィリアスラブグットを脅しているそうです」

「ああ、そうなるんだ」

「どういうことですか？」

「まぁ無事だよ、ピンチになったら助けに行くから大丈夫」

「名無しさん。お腹すいたんですけど」

「わかった。わかった。ご飯食べに行こう」

「あなたたちは本当に・・・」

「あきらめましょうポモーナ」

「はぁ」

二人を見送りながら、皆からむなしいため息が聞こえた。

厨房でテーブルに着いたアレックスがドビーに聞いた。

「今日の晩御飯はいったいなんだろう」

「はい、クープ様。今日はクリスマス休暇なので特別なディナーをご用意します」

「シチューは？」

「現在、各種作っております」

「やったー」

「アレックス、今もシチュー食べてるじゃないか」

「これは、試食です」

「お味はいかがでしょうか」

「もう少し煮込んでいけばもっと美味しくなるよ。あとこれに、トマト入れた方が良いよ」

「わかりました」

「そうだ。アレックス、後で、魔具開発に付き合ってほしいんだ」

「なんですかそれ？」

「魔法をかけた道具なんだけど」

「そうですか。何を作るんですか？」

「この前、パピーが手紙に魔法をかけて呪文を封じていただろう？」

「そんな事もありましたね」

「それで、あれって、僕の魔力に反応するようにしてあったと思うんだけどそれを改良してあるものを作りたいんだ」

「あるもの？」

「地雷」

「地雷って、マグルのあれですか？」

「そう！マグルのは爆発するけど、僕が作るのは、呪文を込めて踏んだら呪文が炸裂するようにしたいんだ。死食い人限定でね」

「卑怯！愚劣、そして狡猾！なんてこと考えてるんですか。そんなことしたら、圧勝するじゃないですか」

「そうでもないと思うけど。でも、突っ込んで来たらどんどん倒れていくって面白くない？」

「それは、笑えますね。でも名無しさんだったら、そんな事しなくても一掃できませんか？」

「最近、調子悪いからね」

「風邪ですか？」

「そうじゃないけど、何か体だるくてさ。だから、もしもの時の予防線を作っておこうかと思ってね」

「そうですか、だったらホグワーツのふくろう達に仕掛けをして空襲できるようにしましょうよ」

「何と！それは思いつかなかった。おぬしも悪よのう」

「いえいえ、お代官様ほどでは」

「「はっはっはっはっはっ」」

「クープ様！気をたしかにお持ちくださいー」

そんな、哀れなしもべ妖精には解決できない出来事であった。

ルーナの拳と教師の苦悩そして悪巧みへ（後書き）

ふくろうの空襲ってパクリとかになってませんよね？デジャブですよね？

それと、ルーナって捕まってなきゃいけないような進行上で必要な理由ありましたか？なかったと思うんですけど

そして、クリスマス休暇からイースターまでの４ヶ月間の話かいてない。キンクリしてもいいですか？

それとも、このままホグワーツデすごさせるか、また放浪のたびにいかせるか。どっちにしても、グダグダになりそうです。

ハリーたちって今頃、ゴドリックの谷の辺りの時系列ですね。

今書いてるシリアス展開に心折れそうです。

食べ物の恨みは人を間違った方向へ進化させる

「名無しさん。そろそろ休憩にしましょうよ。ディフォデュオ」

地面に穴を開けながら、アレックスが言った。

「さっき休憩したばかりでしょ」

「えーあれから、１０分も経ってるじゃないですか」

「１０分しか経ってないだろ」

「体力バカ」

「どこがだよ！」

「そんなところに穴掘って何悪さたくらんどる」

「デカ！」

「なに、はじめてみましたみたいな反応してるんですか」

ハグリッドの登場によくわからない反応をしたことに対して言った。

「ハグリット、かたぐるまして」

「なんで、俺がお前のかたぐるましなきゃならんのだ」

「名無しさん、キモィ」

「今、どのくらい埋めてあるのか見たいだけだよ！ハグリット、ハリーを守るためなんだよ」

「ハリーをか？なら、どんとこい」

そう言ってハグリットは、肩に少年を乗せた。

「なんだか、こうしておると、ハリーが入学した時の事を思い出す」

「ハリーが？」

「ハリーはこんなにちびっこかったんだぞ」

そう言って、指でサイズをあらわしてきた。

「そんなにちっちゃいわけ」

「名無しさん、夢を見させてあげてください」

「わかったよ。突っ込みはなしだね。ハグリット、あっちの方に真っ直ぐ歩いて」

「おう、わかったぞ」

のしのし、歩いていくハグリットを、あっちへこっちへと歩かせていた。

まっすぐ、歩かせれば、すこし横にずれ、また来た道を戻ったり、斜めに歩かせたり、ジャンプしながら行かせたりしていた。

「名無しさん、何してるんですか？」

「ハグリットの歩いたところを見てみなよ」

そう言われ、アレックスがハグリットの通ったところを見ると、ハグリットの足跡が地面に穴のように残っていた。

（ディフォデュオで地面をもろくして、そこをハグリットを歩かせることで穴を開けさせる。なんというハグリット田植機！いや、地雷埋機か！！）

「名無しさん、何て事をさせてるんですか」

「ジャ○ネット○田もビックリだろう。なんたってプライスレスなんだから」

「非道、鬼だ、悪魔だ、新世界の神だ」

「残念だが、そのセリフを言ってやることはできない。そのセリフは死亡フラグだからね」

「僕だけ、おかしな人みたいになっちゃうじゃないですか」

「あんた、おかしいよアレックスさん！！」

「デプリモ！！」

ズン、その音と共にハグリットの体が半分埋まった。

「・・・この術使えば一朝一夕だった気がするんですが」

「これだから、魔法族は、労働の価値を知らない」

「ハグリット、オンリーだったじゃないですか」

「おい、おまえら、そんな事より俺をここから出しちょくれ」

アレックスは浮遊呪文をかけてハグリットを出すと言った。

「もう、終わったんだからご飯食べに行きましょう」

「まだ、駄目」

「もう疲れたー。ご飯食べたい、ご飯食べたい、ご飯食べたい」

「シレンシオ」

「プロテゴ」

「ご飯！ご飯！ご飯！ご飯！」

「うるさい！うるさい！うるさい！うるさい！」

「ステューピファイ」

「アレックス！そこまでするか！！」

「エクスペリアームス、ステューピファイ、タラントアレグロ」

アレックスの術を防ぎながら言った。

「おかしいですよ、アレックスさん。ステューピファイ」

「なんの、エクスペリアームス」

「くそ、杖をとられた」

血に飢えた獣のように、アレックスは校庭を見回し、騒ぎを聞きつけて、近くに来た生徒に言い放った。

「トチ狂ってお友達にでもなりに来たのかい？」

「ちょっとアレックスマジでおかしいよ」

「裸にでもなってやりましょうか！！」

ヒャッハー状態のアレックスが生徒から杖をぶん取ると、課外授業をしていたグリフィンドールとスリザリンに生徒に突っ込み、あら

かたの生徒から杖を取り上げ、こちらに迫ってきた。下手な鉄砲数打ちゃ当たると言わんばかりに、杖をとられては新しい杖を掴みという事を繰り返した。
被害にあった生徒の中には、ＤＡのシェーマスやネビルが含まれていた。

哀れな生徒達を見ながら、何かに目覚めてしまった、アレックスを元に戻すには、ご飯という最終手段をとるしかなかった。そうして、ホグワーツで起こった、ご飯戦争は多数の被害者を出しながら、肉まんという交渉手段により終結した。

食べ物の恨みは人を間違った方向へ進化させる（後書き）

すみません・・・調子に乗りました。
おそらく、追加がなければ最後のおふざけの話です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4196q/

ハリーポッターに怒りの転生

2011年12月7日01時56分発行